

【表紙】

【提出書類】 有価証券報告書

【根拠条文】 金融商品取引法第24条第1項

【提出先】 関東財務局長

【提出日】 2024年6月11日

【事業年度】 第137期(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

【会社名】 株式会社滋賀銀行

【英訳名】 THE SHIGA BANK, LTD.

【代表者の役職氏名】 取締役頭取 久保田 真也

【本店の所在の場所】 滋賀県大津市浜町1番38号

【電話番号】 077(521)9530 (代表)

【事務連絡者氏名】 総合企画部長 成田 大作

【最寄りの連絡場所】 東京都中央区日本橋小伝馬町12番9号
株式会社滋賀銀行 総合企画部東京事務所

【電話番号】 03(3661)1186 (代表)

【事務連絡者氏名】 総合企画部東京事務所長 寺川 正人

【縦覧に供する場所】 株式会社滋賀銀行京都支店
(京都市下京区烏丸通四条下ル水銀屋町630番地)

株式会社滋賀銀行大阪支店
(大阪市北区曽根崎新地1丁目1番49号)

株式会社東京証券取引所
(東京都中央区日本橋兜町2番1号)

第一部 【企業情報】

第1 【企業の概況】

1 【主要な経営指標等の推移】

(1) 当連結会計年度の前4連結会計年度及び当連結会計年度に係る次に掲げる主要な経営指標等の推移

		2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
		(自 2019年 4月1日 至 2020年 3月31日)	(自 2020年 4月1日 至 2021年 3月31日)	(自 2021年 4月1日 至 2022年 3月31日)	(自 2022年 4月1日 至 2023年 3月31日)	(自 2023年 4月1日 至 2024年 3月31日)
連結経常収益	百万円	88,871	85,715	98,306	115,289	122,630
うち連結信託報酬	百万円		2	0	0	0
連結経常利益	百万円	13,875	11,070	23,999	20,041	23,967
親会社株主に帰属する 当期純利益	百万円	12,412	11,448	17,715	14,858	15,940
連結包括利益	百万円	22,117	122,660	26,692	15,071	55,925
連結純資産額	百万円	375,801	495,469	464,214	441,222	490,887
連結総資産額	百万円	6,285,002	7,793,748	7,537,956	7,305,698	7,970,551
1株当たり純資産額	円	7,482.34	9,958.46	9,552.14	9,293.39	10,459.88
1株当たり当期純利益	円	243.05	228.12	359.50	310.57	336.31
潜在株式調整後1株当 り当期純利益	円	214.19	220.43	359.20	310.49	
自己資本比率	%	5.97	6.35	6.15	6.03	6.15
連結自己資本利益率	%	3.19	2.62	3.69	3.28	3.42
連結株価収益率	倍	10.56	10.50	6.15	8.62	12.47
営業活動による キャッシュ・フロー	百万円	131,260	1,240,417	278,958	483,433	453,292
投資活動による キャッシュ・フロー	百万円	6,726	127,874	21,823	57,989	288,586
財務活動による キャッシュ・フロー	百万円	14,310	34,337	4,483	7,954	6,280
現金及び現金同等物の 期末残高	百万円	934,088	2,012,295	1,750,676	1,201,299	1,359,724
従業員数 〔外、平均臨時従業員数〕	人	2,282 〔1,198〕	2,286 〔1,153〕	2,271 〔1,102〕	2,198 〔1,056〕	2,154 〔1,002〕
信託財産額	百万円		166	214	187	184

- (注) 1 2023年度連結会計年度における「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 2 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権 - 期末非支配株主持分)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
- 3 従業員数は出向者を除いた就業人員であり、〔 〕内は嘱託及び臨時雇員の期中平均人員(外書き)であります。
- 4 信託財産額は、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務に係る信託財産額を記載しております。なお、連結会社のうち、該当する信託業務を営む会社は当行1社であります。
- 5 2021年度に投資事業組合等への出資に係る利益又は損失について「表示方法の変更」を行いました。当該変更について、比較情報の観点より、2020年度にも反映しております。

(2) 当行の当事業年度の前4事業年度及び当事業年度に係る主要な経営指標等の推移

回次		第133期	第134期	第135期	第136期	第137期
決算年月		2020年3月	2021年3月	2022年3月	2023年3月	2024年3月
経常収益	百万円	73,250	72,610	86,664	103,401	110,306
うち信託報酬	百万円		2	0	0	0
経常利益	百万円	12,538	10,375	22,942	18,841	23,130
当期純利益	百万円	11,869	11,331	17,361	14,411	15,746
資本金	百万円	33,076	33,076	33,076	33,076	33,076
発行済株式総数	千株	53,090	53,090	53,090	53,090	53,090
純資産額	百万円	363,248	474,287	445,455	420,344	468,297
総資産額	百万円	6,271,836	7,769,496	7,517,734	7,281,966	7,944,199
預金残高	百万円	4,891,113	5,403,957	5,616,699	5,718,288	5,808,311
貸出金残高	百万円	3,878,885	4,020,228	4,082,731	4,360,257	4,495,122
有価証券残高	百万円	1,310,342	1,589,519	1,515,143	1,518,879	1,860,529
1株当たり純資産額	円	7,232.32	9,532.66	9,166.05	8,853.65	9,978.52
1株当たり配当額 (内1株当たり中間配当額)	円 (円)	40.00 (17.50)	40.00 (17.50)	80.00 (17.50)	80.00 (40.00)	90.00 (50.00)
1株当たり当期純利益	円	232.42	225.80	352.32	301.22	332.22
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	円	204.82	218.18	352.02	301.15	
自己資本比率	%	5.78	6.10	5.92	5.77	5.89
自己資本利益率	%	3.15	2.70	3.77	3.32	3.54
株価収益率	倍	11.04	10.61	6.27	8.89	12.62
配当性向	%	17.21	17.71	22.70	26.55	27.09
従業員数 〔外、平均臨時従業員数〕	人	1,989 〔984〕	1,983 〔939〕	1,965 〔871〕	1,915 〔820〕	1,875 〔774〕
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX)	%	98.86 (90.49)	93.85 (128.62)	89.87 (131.18)	110.65 (138.80)	171.53 (196.19)
最高株価	円	2,833	2,699	2,477	3,020	4,515
最低株価	円	1,811	1,896	1,739	2,177	2,634
信託財産額	百万円		166	214	187	184
信託勘定貸出金残高	百万円					
信託勘定有価証券残高	百万円					
信託勘定有価証券残高 (信託勘定電子記録移転有価証券表示権利等残高を除く。)	百万円					
信託勘定電子記録移転有価証券表示権利等残高	百万円					

(注) 1 第137期(2024年3月)中間配当についての取締役会決議は2023年11月10日に行いました。

- 2 第137期(2024年3月)における「潜在株式調整後1株当たり当期純利益」は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。
- 3 自己資本比率は、(期末純資産の部合計 - 期末新株予約権)を期末資産の部の合計で除して算出しております。
- 4 従業員数は出向者を除いた就業人員であり、〔 〕内は嘱託及び臨時雇員の期中平均人員(外書き)であります。
- 5 第137期(2024年3月)の1株当たり配当額90.00円のうち、期末配当額40円00銭については、2024年6月26日開催予定の定時株主総会の決議事項になっております。また、同期における1株当たり中間配当額50円00銭のうち10円00銭については、当行創立90周年記念配当であります。
- 6 第133期(2020年3月)及び第134期(2021年3月)の1株当たり期末配当額22円50銭のうち5円は特別配当であります。
- 7 最高株価及び最低株価は第136期より東京証券取引所プライム市場におけるものであり、それ以前については東京証券取引所市場第一部におけるものであります。
- 8 第135期(2022年3月)に投資事業組合等への出資に係る利益又は損失について「表示方法の変更」を行いました。当該変更について、比較情報の観点より、第134期(2021年3月)にも反映しております。

2 【沿革】

1933年10月	彦根市に本店を置く株式会社百州三銀行と近江八幡市に本店を置く株式会社八幡銀行が対等合併し、現在の株式会社滋賀銀行設立(設立日10月1日、資本金5,000千円、本店大津市) その後、1940年11月株式会社蒲生銀行、1942年8月株式会社湖北銀行、1943年6月株式会社柏原銀行を買収、1943年8月株式会社滋賀貯蓄銀行、1945年7月近江信託株式会社を合併し、滋賀県下唯一の本店銀行となる。
1951年5月	外国為替業務取扱開始
1976年3月	預金全科目オンライン化完了
1977年10月	大阪証券取引所(市場第二部)、京都証券取引所に上場(1979年3月から大阪証券取引所市場第一部へ指定替え)
1979年7月	しがぎんビジネスサービス株式会社(現・連結子会社)を設立
1982年11月	海外コルレス業務開始
1983年4月	国債窓口販売業務取扱開始
1984年3月	株式会社しがぎん経済文化センター(現・連結子会社)を設立
1985年4月	株式会社滋賀ディーシーカード(現・連結子会社)を設立
1985年5月	しがぎんリース株式会社(現・連結子会社：しがぎんリース・キャピタル株式会社)を設立
1985年6月	債券ディーリング業務取扱開始
1986年8月	滋賀柏原代理店株式会社(現・連結子会社：しがぎん代理店株式会社)を設立
1987年6月	担保附社債の受託業務取扱開始
1987年10月	東京証券取引所(市場第一部)に上場
1988年2月	第三次オンライン勘定系システム稼働
1988年3月	ニューヨーク駐在員事務所開設(1991年5月 ニューヨーク支店に昇格、1998年9月 ニューヨーク支店廃止)
1988年7月	新本店社屋完成
1989年5月	香港駐在員事務所開設(1993年9月 香港支店に昇格)
1991年4月	株式会社しがぎんジェーシービー(現・連結子会社)を設立
1998年12月	国内において証券投資信託の窓口販売業務取扱開始
2001年4月	国内において保険商品の窓口販売業務取扱開始
2001年10月	「国連環境計画(UNEP)金融機関声明」に署名
2003年12月	上海駐在員事務所開設
2004年4月	滋賀保証サービス株式会社(現・連結子会社)を設立
2006年12月	事務センター完成
2008年1月	基幹系システム(現行)稼働
2008年7月	環境省「エコ・ファースト企業」に認定
2009年2月	浜町研修センター完成
2012年2月	バンコク駐在員事務所開設
2018年7月	T C F D(気候関連財務情報開示タスクフォース)への賛同を表明
2020年2月	国連「責任銀行原則(PRB)」に署名
2020年4月	信託業務取扱開始
2022年4月	東京証券取引所(プライム市場)へ移行
2024年1月	T N F D(自然関連財務情報開示タスクフォース)に賛同し、開示提言の採用者(TNFD Adopter)として登録

3 【事業の内容】

(1) 企業集団の事業の内容

当行及び当行の関係会社は、当行及び連結子会社7社、非連結子会社(持分法非適用)1社で構成され、銀行業を中心とした金融サービスを提供しております。

当行及び当行の関係会社の事業は次のとおりであります。なお、当行グループは「銀行業」の単一セグメントであります。

[銀行業]

当行の本支店95か店(うち国内94か店、香港1か店)、出張所5か店、代理店33か店においては、預金、貸出、内国為替、外国為替、有価証券投資等の業務又はその取次ぎ業務を行い、地域に根ざした営業を展開するなかで、コンサルティング機能を発揮した営業力強化に特に注力しております。

なお、代理店33か店は、全て連結子会社である「しがぎん代理店株式会社」の営業所であります。

その他、銀行業を補完するため、連結子会社で以下の業務を行っております。

ファイナンス・リース、割賦販売等の業務及びベンチャー企業への投資業務等

クレジットカード、キャッシング等の業務

文書等の保管・管理、店舗外現金自動設備の管理、担保不動産の評価、データ処理等銀行業務の周辺業務

当行の住宅ローン等の保証業務

企業経営等に関するコンサルティング業務等

(2) 企業集団の事業系統図

以上述べた事項を事業系統図によって示すと次のとおりであります。

子会社は連結子会社7社、非連結子会社(持分法非適用)1社であります。また、関連会社はありません。

滋賀銀行グループ	
滋賀銀行 本支店 95か店 (うち、国内 94か店、香港 1か店) 出張所 5か店 代理店 33か店(しがぎん代理店株式会社の営業所)	連結子会社 7社 しがぎんビジネスサービス株式会社 株式会社しがぎん経済文化センター 株式会社滋賀ディーシーカード しがぎんリース・キャピタル株式会社 しがぎん代理店株式会社 株式会社しがぎんジェーシービー 滋賀保証サービス株式会社 非連結子会社 1社 しがぎん本業支援ファンド2号投資事業有限責任組合

4 【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 又は 出資金 (百万円)	主要な事業 の内容	議決権の 所有割合 (%)	当行との関係内容				
					役員の 兼任等 (人)	資金援助	営業上の取引	設備の賃貸借	業務 提携
(連結子会社) しがぎんビジネス サービス株式会社	滋賀県大津市	40	事務計算受託 業務、事務代 行業務、不動 産管理業務、 現金精査・整 理業務、A T M管理業務	100.00	(3) 5		業務受託関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	
株式会社しがぎん 経済文化センター	滋賀県大津市	10	コンサルティ ング業務、有 料職業紹介事 業	100.00	(2) 3		業務受託関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	
株式会社滋賀 ディーシーカード	滋賀県大津市	30	クレジット カード業務、 信用保証業務	100.00	(3) 4		金銭貸借関係 保証取引関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	
しがぎんリース ・キャピタル 株式会社	滋賀県大津市	31	リース・投資 業務	100.00	(3) 5		金銭貸借関係 預金取引関係 リース取引関 係	当行より建物の 一部を賃借	
しがぎん代理店 株式会社	滋賀県大津市	40	銀行代理店業 務	100.00	(3) 5		業務受託関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	
株式会社しがぎん ジェシービー	滋賀県大津市	30	クレジット カード業務	100.00	(2) 3		金銭貸借関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	
滋賀保証サービス 株式会社	滋賀県大津市	60	信用保証業 務、貸出担保 評価・管理業 務	100.00	(3) 4		保証取引関係 業務受託関係 預金取引関係	当行より建物の 一部を賃借	

(注) 1. 「当行との関係内容」の「役員の兼任等」欄の()内は、当行の役員(内書き)であります。
2. 2024年4月1日付で、株式会社しがぎんエナジー(当行100%出資子会社)を設立いたしました。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社における従業員数

2024年3月31日現在

セグメントの名称	銀行業
従業員数(人)	2,154 〔1,002〕

- (注) 1 従業員数は、出向者を除いた就業人員(ただし、連結会社間の出向者を含む)であります。
2 従業員数は、海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員967人を含んでおりません。
3 臨時従業員数は、〔 〕内に嘱託及び臨時従業員の年間の平均人員を外書きで記載しております。
4 当行グループは「銀行業」の単一セグメントであります。

(2) 当行の従業員数

2024年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(千円)
1,875 〔774〕	38.16	15.25	6,793

- (注) 1 従業員数は、出向者を除いた就業人員であります。
2 当行の従業員は、すべて銀行業のセグメントに属しております。
3 従業員数は、海外の現地採用者を含み、嘱託及び臨時従業員749人を含んでおりません。
4 臨時従業員数は、〔 〕内に嘱託及び臨時従業員の年間の平均人員を外書きで記載しております。
5 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。
6 当行の労働組合は、滋賀銀行労働組合と滋賀銀行従業員組合の2つあり、組合員数は滋賀銀行労働組合1,638人、滋賀銀行従業員組合2人です。なお、双方の組合とも労使間においては特記すべき事項はありません。

(3) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

当行

当事業年度	
管理職に占める女性労働者の割合(%) (注1)	男性労働者の育児休業取得率(%) (注2)
17.6	95.4

当事業年度		
労働者の男女の賃金の差異(%) (注1)		
全労働者	正規雇用労働者	非正規雇用労働者
48.5	68.2	43.2
	内訳	
	嘱託	パート
	81.1	77.0

- (注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。
2 「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。

(補足説明)

1. 管理職に占める女性労働者の割合は2024年3月31日時点を基準日として、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異は2024年3月期事業年度を対象期間として、それぞれ算出しております。
2. 管理職に占める女性労働者の割合における管理職とは、課店長代理級以上の役職としております。当行は行員を役席者(課店長代理級以上)、主任、一般行員に分類しており、役席者は人事考課と労務管理の権限を有しております。
3. 労働者の男女の賃金の差異における正規雇用労働者及び非正規雇用労働者の定義は以下のとおりであります。

正規雇用労働者 ... 行員、専任行員(役員、理事、海外赴任者、育児休業者等の無給者は対象外)

非正規雇用労働者 ... 嘱託(再雇用者を含む)、パートタイマー

4. 労働者の男女の賃金の差異の算出における賃金には通勤手当を含んでおりません。
5. 正規雇用労働者の男女の賃金の差異は男女間の平均年齢差や職制割合の違いにより、乖離幅が大きくなっておりますが、職位・職務等が同等であれば男女間で賃金の差異が生じることはありません。

平均年齢は男性39.5歳、女性36.2歳であります。

当行は入行後一定期間経過後に、行員が自らの働き方にあわせて職の選択(「総合職」及び「特定職」)を実施しております。「特定職」は「総合職」と比較して、職務や勤務希望エリアを限定した働き方になります。なお、男性と女性の総合職及び特定職の割合は以下のとおりであります。

	総合職	特定職
男性	98.1%	1.9%
女性	51.8%	48.2%

6. 非正規雇用労働者の男女の賃金の差異は嘱託とパートタイマーの雇用形態や契約時間の違いにより、乖離幅が大きくなっております。

連結子会社

女性活躍推進法に基づき管理職に占める女性労働者の割合等を公表している連結子会社は以下のとおりであります。

当事業年度	
名称	管理職に占める女性労働者の割合(%) (注1)
しがぎんビジネスサービス株式会社	15.0
しがぎん代理店株式会社	23.8

(注) 1 「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。

- 2 管理職に占める女性労働者の割合は2024年3月31日時点を基準日として算出しております。
- 3 管理職に占める女性労働者の割合における管理職とは、課長級以上の役職としております。

第2 【事業の状況】

1 【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

当行グループの経営方針、経営環境及び対処すべき課題等は、次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当行グループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当行グループは、創立90周年に際し、100周年、その先の未来に向けて、役職員が心を一つに歩み続けるために、2024年4月1日に「『三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）』で地域を幸せにする」とのパーパス（存在意義）を制定するとともに、理念等を体系的に整理いたしました。

パーパス（存在意義）のもと、伝統ある近江商人の商人道徳である「三方よし」の精神を継承した行是「自分にきびしく 人には親切 社会につくす」を活動の原点とし、経営理念に掲げた「地域社会」「役職員」「地球環境」との「共存共栄」の実現に努めることを通じて、企業価値の向上に取り組んでおります。

（当行グループの理念体系）



(2) 第7次中期経営計画の達成度

2019年4月よりスタートした第7次中期経営計画（期間5年間：2019年4月～2024年3月）では、次の経営指標を掲げ、その実現に向け取り組んでまいりました。達成度は次の表のとおりであります。

第7次中期経営計画期間中の挑戦指標	計画	実績
< S D (Sustainable Development) 目標 >		
Sustainable Development推進投融资 (格付CS先への新規融資額、SDGs型商品新規投融资額、ESG新規投資額5年間累計)	7,000億円	8,989億円
地域顧客の価値向上サポート (年間コンサルティング相談件数)	2,000件	2,070件
地域顧客の資産形成サポート (預り資産残高「投資信託+金融商品仲介」)	3,000億円	2,525億円
温室効果ガス排出量削減 (2013年度比較の削減率)	50%削減	(1) 66.80%削減
SDGs・金融リテラシーの普及・向上活動、次世代人材の育成活動 (研修等の実施人数5年間累計)	15,000人	21,943人
< 収益目標 >		
親会社株主に帰属する当期純利益（連結）	100億円以上	159億円
顧客向けサービス業務利益（単体） (貸出残高×預貸金利回り差+役務取引等利益-営業経費)	30億円	48億円

長期的挑戦指標

	長期的挑戦指標	2024年3月期 (実績)
ROE(連結)	5%以上	3.42%
OHR(単体)	65%未満	(2) 82.76%

- (1) 2023年3月末実績。2024年3月末実績については、開示情報の透明性確保に向けて第三者検証を受ける予定であります。検証を受けた後、当行ホームページで公表いたします。
- (2) 次世代基幹系システム関連費用を除くOHRは64.19%となっております。

(3) 中長期的な経営戦略及び目標とする経営指標

(長期戦略)

地域や当行グループをとりまく環境が大きな転換期を迎える中、「実現したい地域社会の姿：自分らしく未来を描き、誰もが幸せに暮らせる社会」を目指し、バックカスティングで策定した今後5年間の実行戦略が第8次中期経営計画(期間5年間：2024年4月～2029年3月)であります。



(価値創造ストーリー「地域を幸せにする好循環」)

当行グループ内外のさまざまな資本を活用し、お客さまの課題解決や地域の成長に資する投資を行い、経済活動を活性化させることで、ビジネス機会は拡大します。そのなかで、当行グループの稼ぐ力を向上させ、さらなる地域への投資につなげるとの価値創造ストーリーに掲げた「地域を幸せにする好循環」を生み出していきます。



(第8次中期経営計画の基本戦略)

第8次中期経営計画では、お客さま・地域の持続可能な成長をデザインする「インパクトデザイン」、成長のための経営基盤の強化に取り組む「ベースforグロース」、人的資本の最大化を進める「ヒューマンファースト」の3つの基本戦略を中心に、お客さまや地域・社会の課題解決につなげ、「地域を幸せにする好循環」を生み出してまいります。第8次中期経営計画の基本戦略、目標とする経営指標は下表のとおりであります。

第8次中期経営計画 基本戦略



お客さま・地域の持続可能な成長をデザイン

- 付加価値の高い金融取引・コンサルティングの提供によるお客さまの課題解決
- 社会的課題の解決を通じた地域の発展、活性化
- 新規事業へのチャレンジによる新たな価値創造

経営基盤の強化

- 収益の多様化 (有価証券運用・ファイナンス戦略)
- データドリブン経営の実践
- 経営インフラの強化 (AI活用、DX化、店舗・チャネルの最適化)

人的資本の最大化

- Design人材の育成
- ワークライフインテグレーションの実現
- 「挑戦」と「称賛」の企業文化の醸成

(第8次中期経営計画の達成指標)

		達成指標	2029.3 計画
サステナビリティ 達成指標	インパクト デザイン	地域の成長を支える投融資額	(期間累計) 1兆2,000億円
		お客様の夢や事業をサポートする件数	(期間累計) 30,000件
		地域や社会の持続可能性を高める サステナブルファイナンス実行額	(期間累計) 7,000億円
	ベース for グロース	稼ぐ力の向上に向けた新たな ファイナンス手法による投融資残高	7,500億円
		お客様価値の創造と当行グループの 業務変革につなげるDXへの取り組み	定性評価
		カーボンニュートラル社会の実現に向けた GHG排出量削減 (Scope1,2)	ネットゼロの達成
	ヒューマン ファースト	人的資本最大化のための 従業員エンゲージメント向上 (構造的割合)	持続的向上
		価値創造の主役として、地域の未来へ 挑戦できる人材を育成するための投資額	2023年度対比倍増 (従業員一人当たり30万円/年)
		スキルアップやキャリア形成に向けて 自律的に挑戦した人数	(期間累計) 2,000名
財務指標		ROE (連結)	5%以上
長期的挑戦指標		ROE (連結)	8%以上

(4) 経営環境及び対処すべき課題

国内の景気については緩やかに回復しておりますが、物価上昇や海外景気の動向など、先行きは不透明な状況が続いております。そのような中、当行はお客様と課題を共有し、細やかなコンサルティングを通じて、資金繰り支援や経営支援・再生支援、デジタル化支援などに迅速かつ丁寧に対応しております。

人口減少や気候変動などの社会的課題の深刻化に加え、ライフスタイルの変化や生成AIの革新的な進歩などによる社会構造の変化に伴い、とりまく環境は大きな転換期を迎えており、地方銀行の経営も変革が求められております。また、日本銀行による金融政策の変更等により「金利のある世界」が到来しております。

このような時代だからこそ、当行グループは第8次中期経営計画を基に、これまで強化してきた経営基盤を活用してさらなる成長に向けた変革に取り組むとともに、お客様や社会へ提供する価値（インパクト）を最大化し、「地域を幸せにする好循環」を生み出してまいります。

次世代基幹系システムについて、銀行サービスの安定的な提供という公共性の高さに鑑み、2025年1月以降と公表しておりました利用開始時期を十分な開発・検証時間を確保するため見直すことといたしました。

また、プライム市場に上場する企業として市場からの期待リターンである株主資本コストを意識し、成長戦略を描くとともに資本効率を高め、ROE向上に取り組んでまいります。

地域とともに歩む企業として、お客様・地域の持続可能な成長をデザインし、「三方よし」で誰もが幸せに暮らせる社会を実現してまいります。

2 【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当行グループのサステナビリティに関する考え方及び取組は、次のとおりであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において、当行グループが判断したものであります。

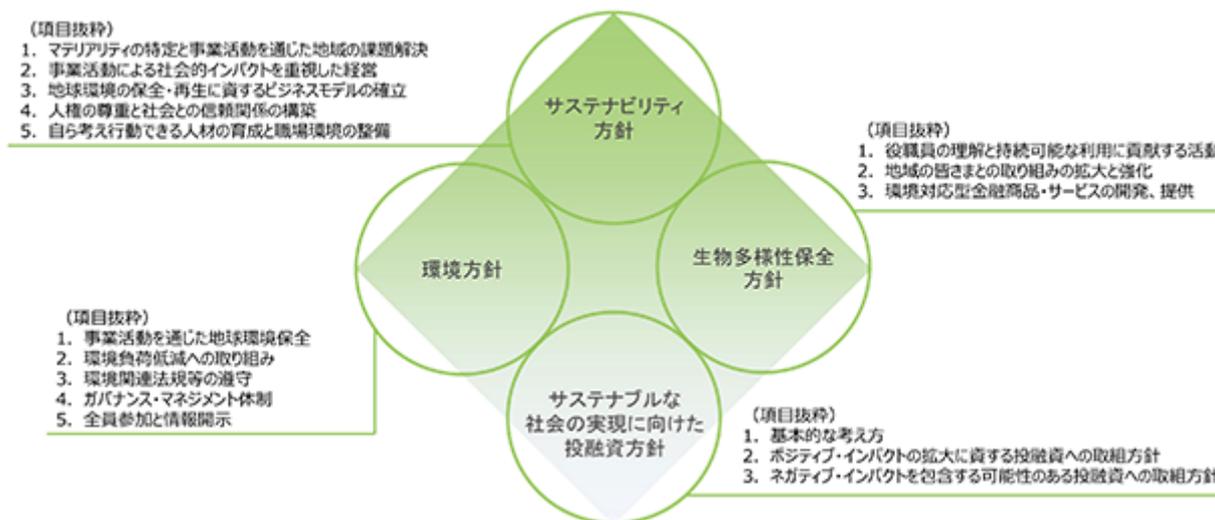
当行は、近江商人をルーツに持つ地方銀行として、「『三方よし』で地域を幸せにする」というパーパスのもと、「地域社会」「役職員」「地球環境」のサステナビリティを意識した経営理念を掲げ、事業活動を通じた社会的課題解決に重点的に取り組んでおります。

特に環境の取り組みにおいては、1999年に「環境方針」、2010年に「生物多様性保全方針」を制定し、本業を通じて環境問題を解決する「環境経営」の取り組みを先駆的に進めてまいりました。また、2020年2月には、SDGsやパリ協定に整合した銀行経営のフレームワークである、国連の「責任銀行原則（PRB）」に地方銀行で初めて署名いたしました。同年10月に制定した「サステナビリティ方針」では、経営理念の実践を通じて企業価値の向上を目指すとともに、地域との共創により持続可能な社会の実現に貢献することを表明しております。

さらに、2023年1月には、「サステナブルな社会の実現に向けた投融資方針」を制定し、ポジティブ・インパクトの拡大に向けて積極的に支援する取り組みや、ネガティブ・インパクトの軽減・回避に向けて慎重に検討するセクターを明示しております。

当行は、第7次中期経営計画で策定した実現したい地域社会の姿「自分らしく未来を描き、誰もが幸せに暮らせる社会」を、2024年4月からスタートした第8次中期経営計画においても長期戦略に掲げ、達成イメージを示しました。近江商人から受け継いだ「三方よし」を実践し、このイメージを具現化させていくことで、地域で暮らす誰もが幸福を感じられる社会の実現に貢献してまいります。

<サステナビリティに関連する基本方針>



滋賀銀行 サステナビリティ方針

私たちは、行是「自分にきびしく 人には親切 社会につくす」を原点とする経営理念の実践を通じて企業価値の向上を目指すとともに、地域との共創により持続可能な社会の実現に貢献します。

1. マテリアリティ（重要課題）の特定と事業活動を通じた地域の課題解決

滋賀銀行と地域社会の双方にとって持続可能な発展・繁栄につながるマテリアリティを特定し、社会的課題の解決に資する商品・サービスを開発・提供するとともに、地域社会のデジタル化を促進し、課題解決型ビジネスの創出を支援することで持続可能な社会の実現に貢献します。

2. 事業活動による社会的インパクトを重視した経営

事業活動から生じる人や環境へのネガティブ・インパクト（悪影響）を軽減しつつ、継続的にポジティブ・インパクト（好影響）を拡大するよう努めます。金融仲介によって生み出す社会的インパクトを特に重視し、お客さまとの対話を通じて持続可能な社会に向けたお金の好循環を創出します。

3. 地球環境の保全・再生に資するビジネスモデルの確立

当行の存立基盤である地域社会の繁栄は、琵琶湖をはじめとする自然の恩恵を受け、地球環境の持続可能性のもとで成り立っていることを理解し、脱炭素社会の実現、循環経済の構築、生物多様性の保全等に資するビジネスモデルを確立します。

4. 人権の尊重と社会との信頼関係の構築

人権を尊重し、高い倫理観に則った誠実かつ公正な企業活動を遂行します。また、法令等を遵守し、ステークホルダーへの公平かつ正確な情報開示と双方向の対話を行い、社会からの期待や要請に真摯に対応することで強固な信頼関係を構築します。

5. 自ら考え行動できる人材の育成と職場環境の整備

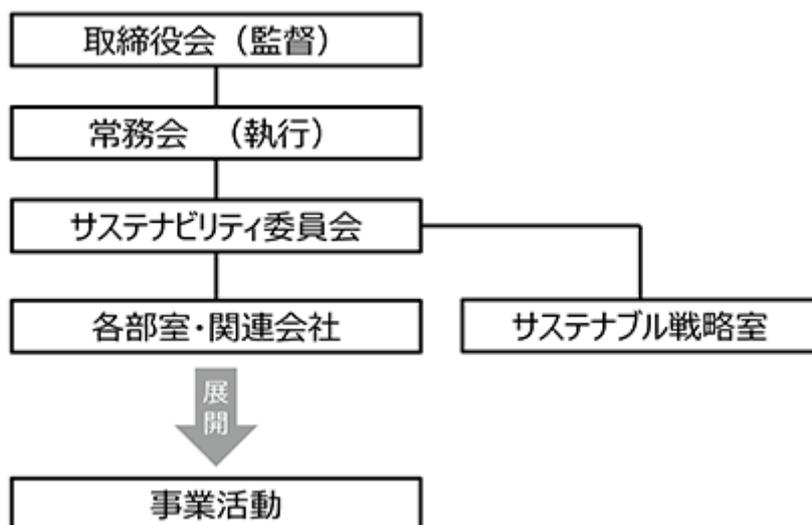
SDGsや地域の社会的課題を「自分ごと」として捉え、自ら考え行動できる人材の育成に努めるとともに、多様な個性や働き方が尊重され、ワーク・ライフ・バランスが充実し、一人ひとりが個々の能力を最大限に発揮できる職場環境づくりを目指します。

(1) ガバナンス

当行では、サステナビリティを事業活動の中核的なテーマとして認識し、取締役会において議論し、経営戦略やリスク管理に反映しております。具体的な対応や取り組みは、取締役頭取を委員長として設置したサステナビリティ委員会で協議し、委員会での議論の内容は、少なくとも年1回の頻度で取締役会に報告されます。また、取締役会は、報告された内容に対し適切に監督する態勢を構築しております。

サステナビリティ委員会は、常勤役員、全部室長、連結子会社社長をメンバーに年3回開催しております。委員会では、地域の脱炭素化をはじめとする中長期的な経営課題をテーマとして、責任銀行原則が定めるインパクト分析やTCFD（気候関連財務情報開示タスクフォース）が推奨するシナリオ分析等の結果、ISO14001に基づいた環境マネジメントシステムなどを活用しながら、対応方針や取組計画等を審議しており、重要な事項については経営会議（常務会）や取締役会へ内容を報告しております。

< 当行グループのサステナビリティ経営体制 >



(2) 戦略

気候変動

当行は、2004年4月から中期経営計画に温室効果ガス排出量の削減目標を設定し、2007年4月には「地球環境との共存共栄」を掲げた経営理念を制定するなど、気候変動の原因となる地球温暖化への対応を重要な経営課題の一つと認識してまいりました。

また、2018年7月にTCFD提言への賛同を表明し、株主・投資家をはじめとする幅広いステークホルダーとのエンゲージメントにつなげることを目的として、2019年度からTCFD提言に基づく情報開示を実施しております。

<リスク及び機会と影響の認識>

当行では、短期（5年）、中期（10年）、長期（30年）の時間軸で気候変動に伴うリスク（移行リスク・物理的リスク）と機会を1.5 シナリオ及び4 シナリオを前提に評価しております。認識した気候変動リスク及び機会については、CO2排出量削減に関する取り組みを進めているほか、投融資に係る戦略への反映を検討しております。

リスク・機会の種類		事業へのインパクト	顕在時期
移行リスク	政策・規制 市場 技術	1.5 シナリオの達成に向けた脱炭素政策や規制への対応、又は低炭素志向への市場の変化等が投融資先の事業や業績へ及ぼす影響が当行の与信コストに及ぼす影響	中期～長期
	政策	国際的な気候変動対応の高まりを受けた規制導入や変更	短期
	評判	気候変動への対応や情報開示が不足した場合の風評悪化	短期
物理的リスク	急性リスク	洪水等の自然災害の増加が投融資先の事業や業績に及ぼす影響が当行の与信コストに及ぼす影響	短期～中期～長期
		洪水等の自然災害により当行資産が毀損するリスク	短期～中期～長期
	慢性リスク	感染症や熱中症の増加が投融資先の事業や業績に及ぼす影響が当行の与信コストに及ぼす影響	短期～中期～長期
機会	商品・サービス	低炭素製品やサービスの開発に係る企業の資金需要の増加	短期～中期～長期
	資源効率化・エネルギー源	脱炭素社会への移行に向けた取り組みによる企業のコスト低減や移行に係る資金需要の増加	短期～中期～長期
	評判	地域の脱炭素化に貢献する金融機関として社会的評価が高まることによるビジネス機会の増加	中期～長期

<炭素関連資産>

当行の貸出金残高に占める炭素関連資産の割合は、31.4%となっております。

（「エネルギー」「運輸」「素材・建築物」「農業・食料・林産物」セクター向け貸出金残高。ただし、再生可能エネルギー発電事業を除く。）

<シナリオ分析>

シナリオ分析では、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）や国際エネルギー機関（IEA）等が公表している複数のシナリオを参照の上、パリ協定や2021年11月の国連気候変動枠組条約締約国会議（COP26）における合意内容等をふまえ、2つのシナリオ分析を実施いたしました。与信コストの増加については、中長期的な取り組みにより低減を図ることが可能であることから、影響は限定的と考えられます。

<分析プロセス>

- ・セクター毎のリスク（移行リスク・物理的リスク）と機会を分析
- ・移行リスクのシナリオ分析対象セクターを決定
- ・移行リスク、物理的リスクともに分析対象に応じたシナリオを設定し、与信コストへの影響を分析

<移行リスク>	内容等
シナリオ	NGFS（気候変動リスク等に係る金融当局ネットワーク）のシナリオのうち、「Delayed transition」「Current Policies」「Net Zero 2050」を使用
対象セクター	電力セクター 石油・石炭・ガス 運輸セクター（陸運）
対象期間	2023年3月末を基準として2050年まで
指標	与信関連費用（与信コスト） 債務者区分判定に基づく与信コスト
分析結果	累計 55億円～120億円程度の与信コスト増加

<物理的リスク>	内容等	
シナリオ	IPCCの「RCP8.5 シナリオ」（4 シナリオ） 100年に1度規模の洪水発生	
対象地域	滋賀県全域及び京都府全域	日本国内
対象先	事業性融資先（大企業を除く）	当行店舗
指標	与信関連費用（与信コスト） 与信取引先の営業停止に伴う売上減少を踏まえた債務者区分の悪化 不動産担保の毀損による保全率の低下	当行の店舗を出店している日本国内 106拠点における浸水リスク
分析結果	およそ25億円程度の与信コスト増加	国内拠点のうち、38拠点（35.8%） で浸水が発生する

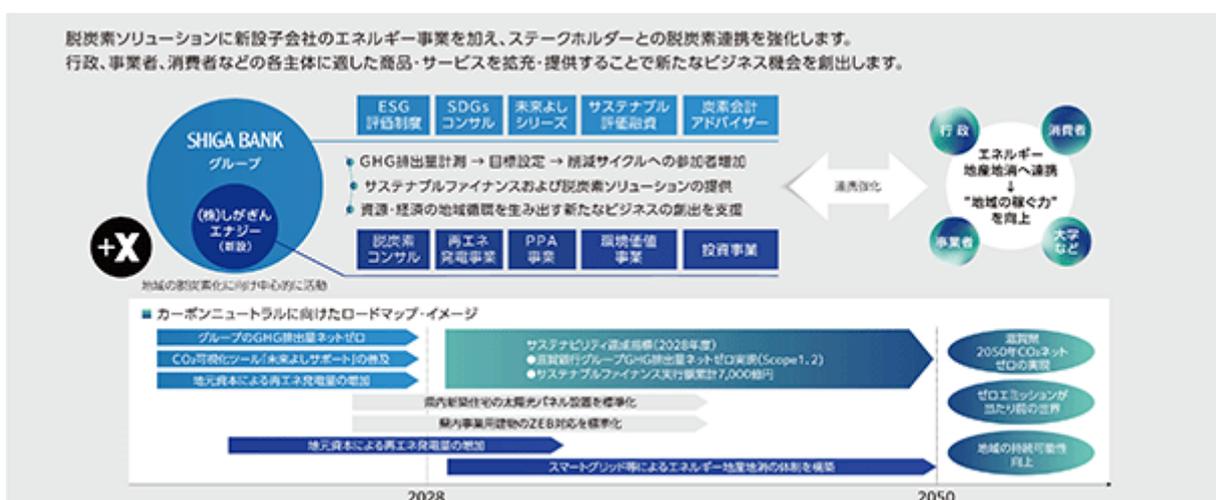
<地域の脱炭素化に向けた取り組み>

2050年に脱炭素社会を実現するためには一刻も早い対策が必要となっており、脱炭素化の潮流は急激に加速しております。産業構造の転換も予想される中、大企業に比べて取り組みが遅れている中堅・中小企業においても脱炭素化に向けた対策を講じていくことが地域経済を守っていく観点からも重要となっております。一方、当行が本拠を置く滋賀県では多額のエネルギーコストが域外へ流出していることから、脱炭素化に向けて再生可能エネルギーの地産地消を進めることで、CO₂排出量の削減はもちろん、資金の域内循環による経済効果、新たな産業・雇用の創出、自然災害に対する地域社会のレジリエンス向上などが期待できます。

このような考えのもと、当行は2024年4月、近畿エリアに本店を置く銀行として初めてエネルギー事業会社「株式会社しがぎんエナジー」を100%出資により設立いたしました。GX（グリーン・トランスフォーメーション）の取り組みを通じて地域の課題をエネルギーの観点から解決し、経済と環境の好循環を生み出すことを目指してまいります。

このほか、脱炭素化に向けた主体を自治体、企業、一般消費者のカテゴリーに分け、それぞれの脱炭素化を促進する取り組みを拡充し、本業を通じた地域の脱炭素化に貢献しております。

<地域の脱炭素化に向けた戦略（「第8次中期経営計画」より抜粋）>



（株式会社しがぎんエナジーの取り組み）

- ・企業及び行政のGX、SXに向けたコンサルティング事業
- ・太陽光発電設備を活用したオンサイト・オフサイトPPA事業
- ・太陽光発電所の取得・運営事業
- ・環境価値に関する事業（環境価値の創出、売買、仲介等）
- ・脱炭素、資源循環に関連する事業会社への投資事業

（自治体等と連携した取り組み）

- ・環境省「脱炭素先行地域」への連携
 湖南省との共同提案により、「脱炭素先行地域」の選定を受けております。他の自治体とも連携し、共同提案者として申請を行っております。
- ・サステナブル・ファイナンスの連携
 滋賀県とのコラボレーションにより、「しがぎんサステナビリティ・リンク・ローン“しがCO₂ネットゼロ”プラン」を取り扱っております。

(法人・個人事業主のお客さまへの取り組み)

・「未来よしサポート」

脱炭素経営の第一歩となるCO₂排出量の“見える化”をサポートするクラウドツールを提供しております。

株式会社日立製作所との共同開発により、中小企業にも使いやすい設計としております。

・ESG評価制度

E(環境)・S(社会)・G(ガバナンス)の3要素について、各10項目の取り組み状況をお取引先にヒアリングし、対話することで事業性を評価し、経営課題の共有化につなげております。

・SDGsコンサルティング

お取引先の経営戦略にSDGsを取り入れ、サステナビリティ経営を通じて企業価値向上につなげるためのコンサルティングを実施しております。

・サステナブル・ファイナンス

お取引先のサステナビリティ経営を支援するため、サステナビリティ・リンク・ローン(SLL)、ポジティブ・インパクト・ファイナンス(PIF)、グリーンローン/ボンドなど、さまざまな資金調達手法を提供しております。

・カーボンニュートラルローン未来よし

脱炭素につながる設備投資を対象とする融資商品であり、ESG評価制度の評価に応じた金利優遇を行うことで、企業の脱炭素化とESG経営への取り組みを促します。

(個人のお客さまへの取り組み)

・『しがぎん』スーパー住宅ローン「未来よし」

脱炭素化の取り組みを一般家庭にも拡大していくための戦略商品として2023年4月より取り扱いを開始いたしました。太陽光パネル、蓄電池、エネファームのいずれかを設置することで、住宅ローンの金利を優遇。お客さまは光熱費の節約にもつながり、環境面でも経済面でもスマートな生活が実現できます。手続き面では「住宅ローンセンター」を設置して、申込から契約まで完全非対面で来店不要のスキームを構築。地域の住宅販売会社等とも連携し、脱炭素に向けた利用促進を図っております。

(洪水発生時の店舗の浸水を想定した取り組み)

洪水の発生時において、店舗の浸水被害を未然に防止するとともに、浸水発生時における営業停止から早期復旧するため、次のような取り組みを行っております。今後はより具体的な浸水リスクの可能性を検証して各拠点におけるBCP対策を行うなどして、地域に不可欠なインフラである金融機関としての機能維持に努めてまいります。

- ・店舗への浸水防止を目的として土のうを各店に備置
- ・浸水リスクが比較的高い店舗に止水版を設置
- ・停電発生時において業務を早期復旧するための非常用発電機を設置
- ・台風による大雨等を想定した全銀協BCP風水害訓練の実施
- ・システム障害の発生等を想定したBCP訓練(現金手払い等)の実施、など

自然資本

<ネイチャーポジティブ（自然再興）に向けた取り組み>

当行が本拠を置く滋賀県は、400万年以上の歴史があるとされている世界有数の古代湖“琵琶湖”を有しており、古くから琵琶湖を中心とした自然資本による恩恵（生態系サービス）を受けてまいりました。その恩恵は、滋賀県の歴史、産業、食文化、生活様式にまで幅広く及んでおり、かけがえのない存在となっております。一方で、土地開発や地球温暖化、特定外来種の影響などにより、生物多様性や生態系サービスの劣化が進んでおり、自然資本の適切な保全・回復に向けた取り組みは、地域経済のサステナビリティにおいても喫緊の課題となっております。

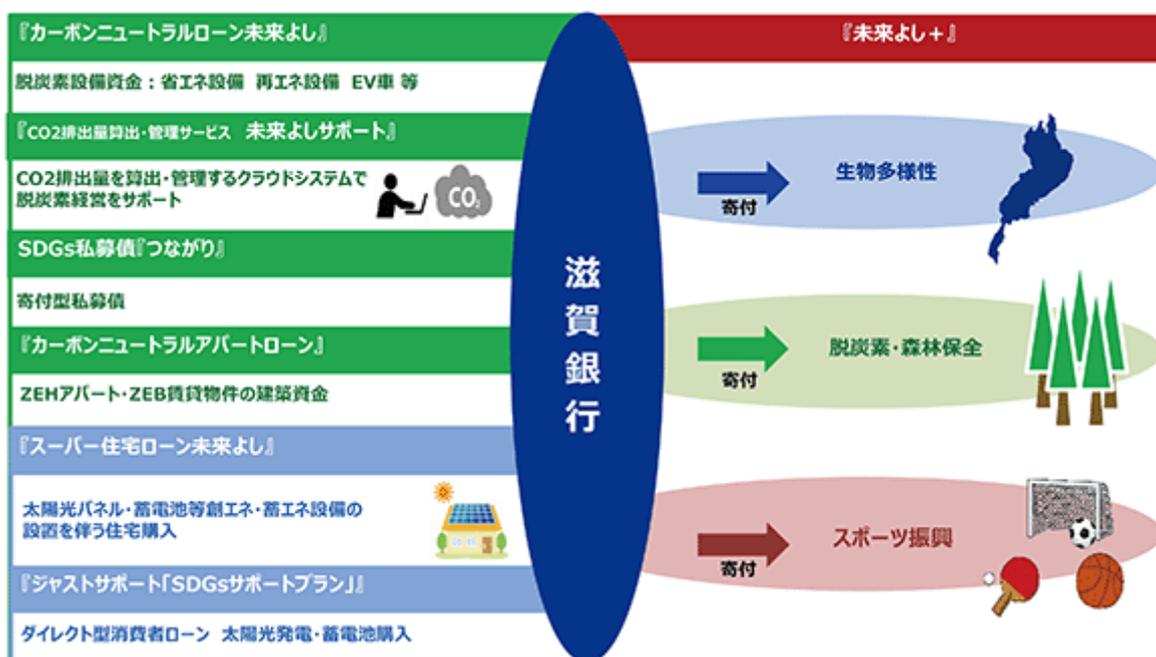
このような背景から、当行は生物多様性保全を重要な経営課題と認識し、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）で愛知目標が採択された2010年に、経営の基本方針として「生物多様性保全方針」を制定いたしました。また、2023年に制定した「サステナブルな社会の実現に向けた投融資方針」では、琵琶湖などのラムサール条約指定湿地、ユネスコ指定世界遺産、ワシントン条約の規制対象種のように、国際的に保護・保全が求められている人類の財産に重大な悪影響を及ぼす事業に対する投融資を行わない方針を定めております。

さらに、2024年1月には、自然関連財務情報開示タスクフォース（Taskforce on Nature-related Financial Disclosures：TNFD）が2023年9月に公表した開示提言（TNFD提言）に賛同し、開示提言の採用者（TNFD Adopter）として登録を行いました。自然環境に負の影響を与える資金の流れを、良い影響を与える「ネイチャーポジティブ（自然再興）」に転換していくため、ステークホルダーの皆さまと協力するとともに、TNFD提言に基づく取り組みを段階的に進め、進捗状況について開示してまいります。

（行政・環境保護団体等と連携した取り組み）

- ・地域のSDGsを推進する寄付スキーム「未来よし+」

脱炭素関連の融資商品の利用実績に応じて当行が資金を拠出し、地域のSDGsを推進する活動に寄付を行う独自のスキームであります。資金は、琵琶湖の絶滅危惧種であるニゴロブナやワタカの放流事業への寄付、森林保全事業の支援につながる「びわ湖カーボンクレジット」の購入などに充てられます。



- ・琵琶湖の環境を保全する“いきものがたり”活動

地域の環境保護団体等と連携し、琵琶湖の生態系保全に向けた、ストーリー性のある環境ボランティア活動を展開しております。春には「外来魚駆除・釣りボランティア」、夏は「森づくりサポート活動」、秋は「ヨシ苗植えボランティア」、冬は「ヨシ刈り」のほか、地域で実施されるさまざまな活動にも参加しております。活動にはお取引先企業にも参加いただいております。ステークホルダーを巻き込んだ取り組みを展開しております。

人的資本

(A) 第7次中期経営計画（計画期間：2019年4月1日～2024年3月31日）

当行は2019年4月にスタートした第7次中期経営計画において目指す姿を「Sustainability Design Company」とし、「Bank」の発想の枠を超え、お客さまや地域社会の持続可能な発展をデザインし、地域になくてはならない「Company」になるとしております。

この経営戦略を実現するために、求める人材像を「個性を磨き、価値創造の主演として、地域の未来へ挑戦できる人」と定義し、人材育成方針及び社内環境整備方針のもと、「課題解決型人材」及び「自律型人材」の育成に取り組んでおります。

<人材育成方針>

当行は、人材育成方針として「お客さま・地域社会から必要とされる行員の育成」を掲げ、以下のような行員の育成に取り組んでおります。

- ・社会人の良識と高い職業観を有している行員
- ・未来志向で物事を捉え、“真の答えはお客さまの中にある”を実践できる行員
- ・環境変化に柔軟に対応し、こだわりをもって物事をやり遂げることのできる行員
- ・いたわり、思いやりの心を持ち、チーム、組織として自ら考働できる行員

<社内環境整備方針>

当行は、2020年10月に制定したサステナビリティ方針において、「自ら考え行動できる人材の育成と職場環境の整備」を掲げております。多様な個性や働き方を尊重し、ワーク・ライフ・バランスが充実するなど、一人ひとりが個々の能力を最大限に発揮できる環境づくりに取り組んでおります。

また、当行は、職員が十分な能力を発揮するためには経済的に安定していることが重要と考え、ファイナンシャル・ウェルネスの取り組みを進めております。具体的には、金融リテラシー向上を目的とした金融教育を実施するとともに、従業員持株会や財産形成預金、確定拠出年金、従業員融資などの各種制度を整備し、経済面から職員を支援することで、従業員満足度や意欲の向上を図っております。

これまでの取り組みを受けて、第8次中期経営計画では下記のとおり定めております。

(B) 第8次中期経営計画（計画期間：2024年4月1日～2029年3月31日）

当行は2024年4月にスタートした第8次中期経営計画において、お客さま、地域の持続可能な成長をデザインする「インパクトデザイン」、成長のための経営基盤の強化に取り組む「ベース for グロース」、人的資本の最大化を進める「ヒューマンファースト」の3つの基本戦略を掲げております。そのような中、人材への投資が経営戦略の優先事項と考え、求める人材像を「個性を磨き、価値創造の主演として、地域の未来へ挑戦できる人」と定義し、人材育成方針及び社内環境整備方針のもと、従業員エンゲージメントの向上を図るべく、「個の能力向上」と「組織の活性化」に取り組んでおります。



<人材育成方針>

当行は、人材育成方針として「Design人材の育成」を掲げ、以下のような行員の育成に取り組んでおります。

- ・お客さま、地域の課題を創造し、解決策をデザインするとともに、実現まで結び付けられる人材
 預金、融資業務をリレーションの機会と捉え、お客さま、地域の価値創造をデザインし、ソリューションにつなげる能力とスキルの向上を図る。
- ・自らのキャリア（＝ありたい自分）をデザインし、その実現に向け挑戦し続ける人材
 変化が激しい時代において、自らの「ありたい姿」を描きながら、高い志を持ち挑戦し続ける人材を育成、支援する。

<社内環境整備方針>

当行は、2020年10月に制定したサステナビリティ方針において、「自ら考え行動できる人材の育成と職場環境の整備」を掲げております。多様な個性や働き方を尊重し、一人ひとりが個々の能力を最大限に発揮できる環境づくりに取り組んでおります。

また、当行は、職員が十分な能力を発揮するためには経済的に安定していることが重要と考え、ファイナンシャル・ウェルネスの取り組みを進めております。具体的には、金融リテラシー向上を目的とした金融教育を実施するとともに、従業員持株会や財産形成預金、確定拠出年金、従業員融資などの各種制度を整備し、経済面から職員を支援することで、従業員満足度や意欲の向上を図っております。

(3) リスク管理

銀行が業務を遂行するうえで直面するリスクは従来にも増して複雑化、多様化しております。

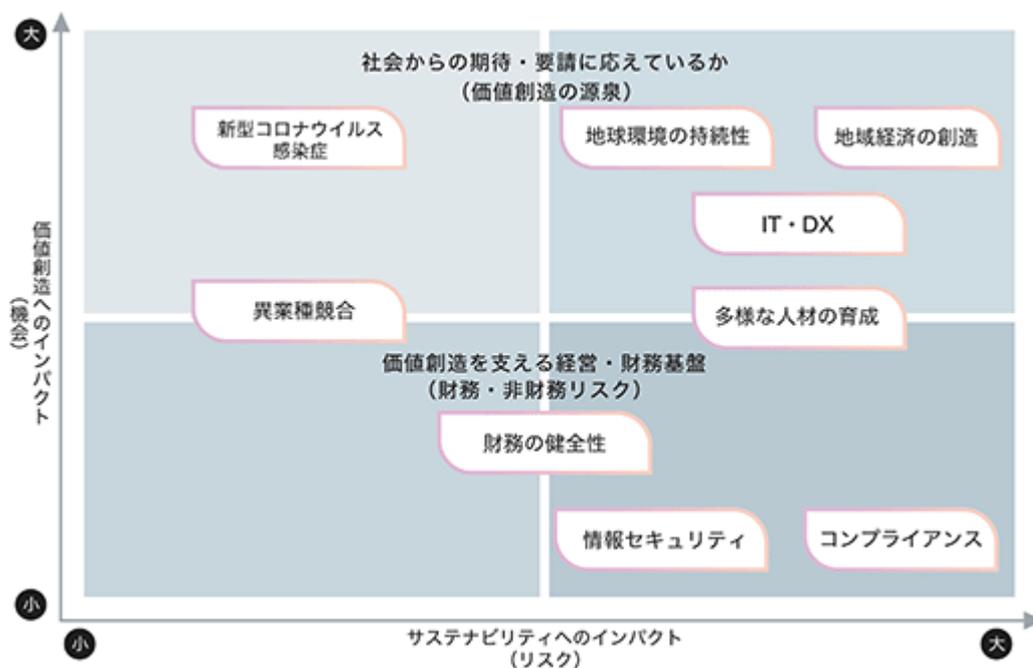
当行では、「勘や経験」に頼らない「合理的な尺度」を持って、リスクを正確に把握しコントロールするために「内部格付制度」や「統合的なリスク管理体制」を構築しております。また、合理的なリスクテイクのもと、継続的な収益確保のため、経営戦略と一体となったリスク管理を行う「リスク・アパタイト・フレームワーク」を導入しております。

また、サステナビリティの観点から、中長期的に企業価値に重大な影響をもたらす可能性があると考えられる事象を「リスクと機会」として捉え、「リスク・アパタイト・フレームワーク」を通じて経営陣が議論・共有することで、あらかじめ必要な対策を講じてリスクを抑制するとともに、当行の経営方針・目的と戦略・リスクの取り方が整合的であるか確認しております。

リスク管理においては、信用リスク、市場リスク、流動性リスク、風評リスクなどを総体的に捉え、金融機関の経営体力である自己資本と対比・検証することによって適切に管理しております。

2023年1月には「サステナブルな社会の実現に向けた投融資方針」を制定し、環境や社会に対してネガティブ・インパクトを含有する可能性がある投融資について、その影響を軽減・回避するための考え方と対応を明確に示すとともに、案件検討段階でチェックする体制を構築いたしました。

こうした方針をもとに、投融資先とのエンゲージメントを強化し、地域社会や地球環境のサステナビリティに資する取り組みに向けてお金の流れを生み出し、リスク管理にもつなげる「経済と環境の好循環」を目指してまいります。



(4) 指標及び目標

第7次中期経営計画の期間中(2019年4月～2024年3月)における指標

<マテリアリティ1：地域経済の創造>

地域やお取引先の持続可能な発展に向けた挑戦指標を次のように定めております。

Sustainable Development 推進投融资 実行額累計	挑戦指標	2024年3月末
中期指標(2024年3月期末)	7,000億円	8,989億円
長期指標(2030年3月期末)	1兆円	

<マテリアリティ2：地球環境の持続性>

環境負荷低減の目標を次のように定めております。(Scope1, Scope2 基準)

温室効果ガス排出量削減(2013年度比較)	挑戦指標	2023年3月末(注2)
中期指標(2024年3月期末)	50%削減	66.80%削減
長期指標(2030年3月期末)	75%削減	
2050年指標：滋賀県が提唱する“しがCO2ネットゼロ”(注1)の達成		

(注1) 滋賀県における二酸化炭素の排出量を実質ゼロにする取り組み。滋賀県が中心となり、県民、事業者等多様な主体と連携して取り組みを推進しております。

(注2) 当行グループの基準年及び2023年3月期における温室効果ガス排出量は次の通りであります。

2013年度(基準年)：9,245 t 2023年3月期：3,069 t

2024年3月末実績については、開示情報の透明性確保に向けて第三者検証を受ける予定であり、検証を受けた後、当行ホームページで公表いたします。なお、Scope3についても公表に向けた検討を進めております。

<マテリアリティ3：多様な人材の育成>

持続可能な社会の担い手となる多様な人材を育成するための挑戦指標を次のように定めております。

SDGs・金融リテラシーの普及・向上活動、次世代人材の育成活動 延べ実施人数	挑戦指標	2024年3月末
中期指標(2024年3月期末)	15,000人	21,943人
長期指標(2030年3月期末)	30,000人	

第8次中期経営計画（2024年4月～2029年3月）における指標＜再掲＞

		達成指標	2029.3 計画
サステナビリティ 達成指標	インパクト デザイン	地域の成長を支える投融資額	(期間累計) 1兆2,000 億円
		お客様の夢や事業をサポートする件数	(期間累計) 30,000 件
		地域や社会の持続可能性を高める サステナブルファイナンス実行額	(期間累計) 7,000 億円
	ベース for グロース	稼ぐ力の向上に向けた新たな ファイナンス手法による投融資残高	7,500 億円
		お客様価値の創造と当行グループの 業務変革につなげるDXへの取り組み	定性評価
		カーボンニュートラル社会の実現に向けた GHG排出量削減 (Scope1,2)	ネットゼロの達成
	ヒューマン ファースト	人的資本最大化のための 従業員エンゲージメント向上 (構造的割合)	持続的向上
		価値創造の主役として、地域の未来へ 挑戦できる人材を育成するための投資額	2023年度対比倍増 (従業員一人当たり30万円/年)
		スキルアップやキャリア形成に向けて 自律的に挑戦した人数	(期間累計) 2,000 名
財務指標		ROE (連結)	5% 以上
長期的挑戦指標		ROE (連結)	8% 以上

人的資本に対して設定するもの（当行単体）

事業内容が異なる連結グループ全体での設定が困難なため、当行単体で指標及び目標を設定しております。

人材育成方針に関する指標を次のように定めております。

指標	目標 第7次中期経営計画期間中	2024年3月末
一人あたり研修投資時間		13時間
課題解決型人材の育成研修（注）	延べ1,000人	1,161人
F P 1 級資格取得者数	300人	231人

（注）課題解決型ビジネスができる人材の育成研修であり、「コンサルタント（個人・法人向け課題解決ビジネス）」、「高度専門人材（M&A、IT・FinTech）」、「グローバル人材の育成」「資産運用担当者」の育成等を含んでおります。

社内環境整備方針に関する指標を次のように定めております。

なお、社内環境整備方針の指標につきましては目標を定めておりませんが、第7次中期経営計画の基本戦略（未来創造挑戦項目）に掲げる「考働改革」に取り組み、生きがい・働きがいを感じられる職場環境づくりに積極的に努めております。

指標	2024年3月末
中途採用者の管理職数（注1）	21人
障がい者雇用率	2.348%
有給休暇の平均取得日数（注2）	17日
銀行への満足度に関する肯定的割合（従業員エンゲージメント）	84.1%

（注1）中途採用者の管理職数とは、中途採用者の課店長代理級以上の人数を示しております。

（注2）有給休暇の総取得日数を行員、専任行員の平均人数で除して算出しております。

なお、2024年4月にスタートした第8次中期経営計画において、指標及び目標を以下の通り設定しております。

指 標		目標 第8次中期 経営計画期間中	ご参考 (2024年3月末)	
人材育成 「人」	Design人材の育成	一人当たり人材育成投資額	300千円	165千円
		外部企業への出向人数	累計100人	単年度20人
		F P 1 級取得者数	300人	231人
	マネジメント人材 の育成	外部研修への派遣	年間50人	23人
		管理職のマネジメントスコア (他者評価)	4.0以上 (5段階評価)	3.76
多様な人材の 活躍 「組織」	採用手法の多様化	新卒採用後3年以内の定着率	80%以上	85.7%
		中途採用者数		11人
		障がい者雇用率	2.7%以上	2.348%
	適正配置による成長とやりたい仕事の実現	管理職候補者の本部と営業店を両方経験した割合	70%以上	52.4%
		人材公募制度の活用人数	年間100人	50人
		女性管理職比率	23%以上	17.6%
働きがいと働きやすさ 「環境」	ワークライフインテグレーションの実現	有給休暇の平均取得日数	17日以上/年	17日
		定期健康診断(人間ドック含む)の再検査受診率	90%以上	90.2%
		健康経営優良法人認定	ホワイト500認定	健康経営優良法人は認定済
	“挑戦”と“称賛”の企業文化	エンゲージメントスコア	72以上	69
		コンプライアンスや人権等の研修を受けた割合	90%以上	92.6%
		自律的にキャリアに挑戦した人数	累計2,000人	

(注) 1. 管理職候補者とは当行の主任(役席者の1つ下の職階)を示しております。

2. 有給休暇の総取得日数を行員、専任行員の平均人数で除して算出しております。

3. 各指標における人件費の算出については、該当人数に平均年間給与を乗じて算出しております。

3 【事業等のリスク】

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を与える可能性があると認識している主要なリスク及び管理体制は、以下のとおりであります。なお、記載における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

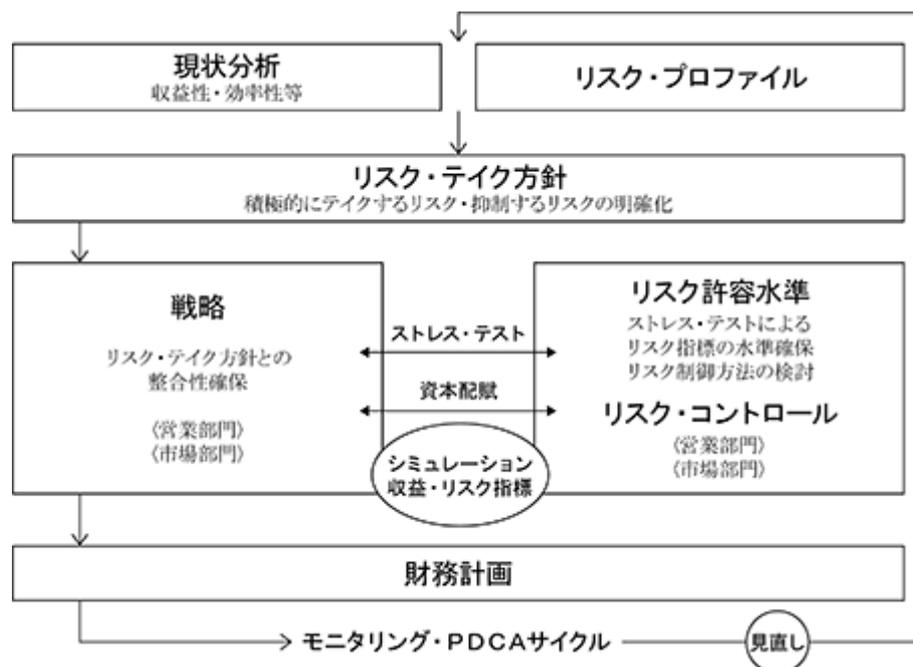
(リスク管理体制の概要)

当行では、リスクを適切に管理することが経営の健全性を維持し、収益性を向上するための本質的な業務であるとの認識のもと、取締役会等において、リスク管理に関する基本方針を策定するとともに、経営に重要な影響を与える事項の報告を受ける体制としております。

また、リスク管理に関して議論する会議体としてALM委員会等を定期的に開催し、各種リスクに関する報告を受けるとともに、当行全体のリスク管理の状況に係る問題点等について審議し、必要に応じて審議内容を取締役会へ報告する体制としております。(リスク管理体制図については、「第4 提出会社の状況 4 コーポレート・ガバナンスの状況等」をご参照ください)

(経営戦略とリスク管理)

当行は、銀行業を中心として地域を幸せにする好循環を生み出していくため、様々な経営戦略を実施し、企業価値の向上を目指しております。経営戦略や財務計画を達成するため、進んで引き受けようとするリスクの種類と水準を明確にする枠組みである「リスク・アペタイト・フレームワーク」の考え方にに基づき、健全性と効率性の両面から資本・資金を最大限活用すべく運営しております。



また、サステナビリティの観点から、人口動態やデジタル化等、中長期的に企業価値に重大な影響をもたらす可能性があると考えられる事象を「リスクと機会」として捉え、経営陣が議論・共有することで、あらかじめ必要な対策を講じてリスクを抑制するとともに、当行のパーパスと戦略・リスクの取り方が整合的であるか確認しております。

経営戦略の策定及びモニタリングに際してはフォワードルッキングな観点から、「金利のある世界」での景気循環を考慮した蓋然性の高いシナリオ策定等各種シミュレーションを実施しております。ただし、様々な要因により戦略が奏功せず、想定していた結果をもたらさない可能性があります。また、リスク管理手法の一部には過去の市場動向や経験などに基づいているものがあることから、将来発生するリスクを正確に予測することができず、リスク管理が有効に機能しない可能性があります。

このような認識のもと、半期毎に経営戦略にあわせてリスク管理の方針を見直すとともに、リスク管理においては、特定の手法によらず個別様々な方法を用いることにより、戦略の実現と適切なリスク管理体制の構築に努めております。

(重要なリスクへの対応)

当行は地域の持続可能な発展を支える地域金融機関として、お客さまからお預かりした預金を貸出金や有価証券等で運用していることから、信用リスク及び市場リスクに晒されております。

具体的には、ゼロゼロ融資返済の本格化や物価高等の影響から、お取引先の返済能力の悪化による追加的な与信関係費用の増加(信用リスクの顕在化)や、日本銀行の金融政策変更等による国内外の金利情勢の転換をはじめとした市況の変化から、有価証券運用における評価損や減損の発生(市場リスクの顕在化)などの事象が当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

このため当行では、お取引先の実態把握に努め円滑な資金繰り支援に取り組んでいくほか、当行独自の内部格付制度を構築・活用するなどリスク管理の高度化に努めるとともに、統計的手法であるVaRを用いて、ある確率(信頼水準99%)のもと一定期間(例えば1年間)に被る可能性のある最大損失額(リスク量)を見積もり、把握しております。

これらのリスクが顕在化した場合に備え、当行では業務の継続性を確保する観点から、事業を行ううえで生じるリスクに対して、自己資本を業務部門別・リスクカテゴリー別に配賦し、リスク量が自己資本の範囲内に収まるよう業務運営を行っております。

また、各種法令等違反を含め社会規範から逸脱した行為を行う等社会からの期待に沿えない場合、当行の信用や業績、業務運営に影響を及ぼす可能性があることから、継続して各役職員のコンプライアンス・マインドの醸成に取り組んでおります。

さらに、自然災害の発生や感染症の流行、大規模システム障害等が発生することで、当行の施設の被災や必要な人的資源の不足等により業務停止を余儀なくされ、地域経済の金融インフラとしての機能を提供し続けることができない可能性があります。この場合、経営戦略等が想定どおり遂行できず、当行の事業及び財務状況に影響を及ぼす可能性があります。

これらリスク・課題については、銀行経営の根幹をなすものであるとの認識に基づき、お客さま目線に立って影響範囲の最小化を最優先に、経営陣の主導的な関与のもと事業の継続性を高める管理態勢を強化しております。

(個別のリスク)

(1) 信用リスク

予想を上回る貸倒の発生

当行は、法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)以外の債務者に係る債権については、貸出先の状況に応じて、過去の一定期間における貸倒実績から算出した貸倒実績率等に基づき見積もった貸倒引当金を計上しております。

しかしながら、今後の景気の動向や貸出先の経営状況の変動によっては、実際の貸倒が当該見積りを大幅に上回り、多額の貸倒償却又は引当負担が発生し、当行の与信関係費用が増加する可能性があります。

担保価値の下落

当行は、破綻先・実質破綻先等に係る債権については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除して貸倒引当金を計上又は債権額から直接減額(以下「部分直接償却」という。)しております。したがって、当行が貸出金等の担保として取得している不動産や有価証券などの担保価値が下落すると、貸倒引当金の積み増しや部分直接償却の追加が必要となり、当行の与信関係費用が増加する可能性があります。また、当行ではバランスシートの健全性の観点から、独自に不良債権のオフバランス化をはじめ、不良債権に対する処置や対応を進めております。この過程において、不良債権を想定外の時期若しくは方法により、又は想定を超えるディスカウント幅で売却するなどした場合には、多額の償却が発生し、当行の与信関係費用が増加する可能性があります。

貸出先への対応

当行のお取引先の中には、当該企業の属する業界が抱える固有の事情等の影響を受けている企業がありますが、国内外の経済環境及び特定業種の抱える固有の事情等の変化により、当該業種に属する企業の財政状態が悪化する可能性があります。

また、当行は、回収の効率・実効性その他の観点から、貸出先に債務不履行等が生じた場合においても、当行が債権者として有する法的な権利のすべてを必ずしも実行せず、これらの貸出先に対して債権放棄又は追加貸出を行って支援をすることもあり得ます。このような貸出先の信用状況の悪化や支援により、当行の与信関係費用が増加する可能性があります。

権利行使の困難性

不動産、有価証券における流動性の欠如又は価格の下落等の事情により、担保権を設定した不動産若しくは有価証券を換金し、又は貸出先の保有するこれらの資産に対して強制執行することが事実上できず、当行の与信関係費用が増加する可能性があります。

地域への依存

当行は、滋賀県を中心とした近畿圏並びに東京・東海地区を営業基盤としていることから、地域経済が悪化した場合には、信用リスクが増加するなどして当行の業績に影響を及ぼす可能性があるほか、業容の拡大を図れない可能性があります。

(2) 市場リスク

金利変動に関するリスク

当行の主たる収益源は、預金等による資金調達と貸出金や有価証券を中心とした資金運用による利鞘収入(資金利益)であります。これらの資金調達・運用に適用される金利は、契約時点、あるいは変動金利型の場合は契約後の予め定められた金利更改時点の約定期間別(1カ月、3カ月、1年等)の市場金利を基準に決定されますので、金融政策の変更あるいは当行の資金調達・運用の期間毎の残高構成によっては、金利変動が当行の収益にとってマイナスに作用する可能性があります。

また、当行では、資金運用の相当部分を国債、地方債等の債券で運用(会計上は「その他有価証券」に分類)しておりますが、金利の上昇(すなわち債券価格の下落)は、期末時点の時価評価により評価益の減少又は評価損の発生を通じて、当行の自己資本比率の低下を招くおそれがあります。

保有株式の株価下落リスク

当行は、市場性のある株式を相当額保有しておりますが、大幅な株価下落が発生した場合には、当行が保有する株式に減損又は評価損が発生し、当行の業績に影響を及ぼすとともに、自己資本比率の低下を招くおそれがあります。

為替リスク

当行は、資産及び負債の一部を外貨建てとしておりますが、為替相場の不利な変動によって当行の業績に影響を及ぼすとともに、自己資本比率の低下を招くおそれがあります。

(3) 流動性リスク

資金繰りリスク

経営環境の大きな変化や当行の信用力の低下等により、必要な資金が確保できず資金繰りが悪化することや、あるいは通常より著しく不利な条件での資金調達を余儀なくされることで、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

市場流動性リスク

保有する有価証券等の売買において、市場の混乱等により取引が困難になることや、通常よりも著しく不利な価格での取引を余儀なくされることで、当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

外貨流動性リスク

当行は、収益機会拡大のため、外貨預金に加えコール市場やレポ市場から外貨資金を調達し、貸出金や有価証券投資等の運用を行っております。市場変動等により外貨の調達コストが上昇すると、収益の縮小や通常より著しく不利な条件での資金調達を余儀なくされることで、当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 自己資本比率規制等に関するリスク

当行は、海外営業拠点を有しておりますので、連結自己資本比率及び単体自己資本比率は「銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準」(平成18年金融庁告示第19号)に定められた国際統一基準に基づく規制を満たす必要があります。

他にレバレッジ比率(自己資本比率規制の補完指標)や流動性力バレッジ比率・安定調達比率(流動性にかかる健全性の基準指標)においても最低水準が定められております。当行がこれらの比率を下回った場合には、当局による社外流出の制限、あるいは業務の全部又は一部の停止等を含む様々な命令を受けることとなり、その結果、業務運営に影響を及ぼす可能性があります。

また、当行が業務を行うにあたっては当該規制のほか、様々な法律、規制、政策、実務慣行、会計制度及び税制等を適用しております。これらが将来において変更された場合、若しくは新たな規制等が導入された場合には、その内容によっては、当行の業績又は財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

なお、当行の自己資本比率に影響を及ぼす要因には以下のものが含まれます。

- ・ 与信関係費用の増加による自己資本の毀損
- ・ 有価証券ポートフォリオの価値の低下
- ・ 退職給付債務の増加による自己資本の減少
- ・ 繰延税金資産の計上にかかる制限
- ・ 将来の自己資本比率の算定基準が変更されることにより、自己資本比率が変動する可能性
- ・ 債務者及び株式・債券等の発行体の信用力悪化による信用リスクアセット及び期待損失の増加
- ・ 本項記載のその他の不利益な展開

(5) オペレーショナル・リスク

事務リスク

当行では、堅確な事務が信用の基本であることを認識し、各業務の事務取扱要領を定め、本部の事務指導などにより事務品質の向上と牽制・検証機能の強化に努めております。しかしながら、仮に銀行業務運営の過程で故意又は過失による重大な事務事故等が発生した場合には、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

情報漏洩リスク

当行では、個人情報保護方針を制定するとともに、情報管理の規程等を整備し、また、情報セキュリティ委員会を設置して厳正な情報管理に努めております。しかし、万一情報の漏洩・紛失及び不正利用等が発生した場合には、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

システムリスク

当行は、コンピュータシステムの安全稼働及びシステムに関する情報保護と安全な利用に万全を尽くしております。しかしながら、想定外のコンピュータシステムの障害や誤作動、不正利用等の発生、また重要なシステムの新規開発・更改等により重大なシステム障害が発生した場合には、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

法務リスク

取引の法律関係の不確実性によって発生するリスクや将来的な法令等の変更によって、当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

人的リスク

当行は、多数の職員を雇用しており、有能な人材の確保や育成に努めておりますが、十分な人材の確保・育成ができない場合には、当行の競争力や効率性が低下し、業績又は財政状態に影響を及ぼす可能性があります。また、人事処遇や勤務管理などの人事労務上の問題等に関連する訴訟等が発生した場合、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

(6) その他

金融犯罪に係るリスク

キャッシュ・カードの偽造・盗難や振り込み詐欺、あるいはインターネットバンキングを標的とした預金の不正な払戻し等の金融機関を狙った犯罪が多発しております。また、外部からのサイバー攻撃や不正アクセス、コンピュータウィルス感染等により、顧客情報の流出や情報システム等の誤作動が生じる可能性があります。

このような状況を踏まえ、当行では、金融犯罪による被害発生を未然に防止するため、セキュリティ強化に向けた取り組みを行っております。しかしながら、高度化する金融犯罪の発生により、被害に遭われたお客さまに対する補償や、新たな未然防止対策に係る費用等経費負担の増大、又は信用の失墜等により、当行の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

マネー・ローンダリング、テロ資金供与、拡散金融及び制裁違反に係るリスク

当行では、マネー・ローンダリング、テロ資金供与、拡散金融及び制裁違反防止のための態勢整備を経営上の重要な課題と位置づけ、リスクベース・アプローチに基づく適切な管理態勢の構築に取り組んでおります。

しかしながら、何らかの原因により犯罪者等に当行の金融機能（商品・サービス）を不正に利用された場合には、当行の信用や業績、業務運営に影響を及ぼす可能性があります。

コンプライアンス・リスク

当行は、各種法令等が遵守されるよう役職員にコンプライアンスを徹底しておりますが、万一法令等が遵守されなかった場合、あるいは、社会規範から逸脱した行為が顕在化する（コンダクト・リスク）ことにより、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

大規模自然災害の発生、感染症の流行等に関するリスク

大規模自然災害や感染症の流行等の外的要因により、社会インフラに障害が発生し、当行の役職員や店舗等の施設が被害を受けた場合には、業務継続に支障をきたす可能性があります。加えて、これらの事象による悪影響が経済・市場全体に波及し、各種リスクが増加あるいは顕在化した場合には、当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

風評リスク

当行に対する中傷や風評等が流布し拡大した場合、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

気候変動に係るリスク

異常気象による洪水など自然災害の激甚化、あるいは災害の発生頻度の増加によるお取引先の事業停滞や当行担保物件の毀損等が当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。また、脱炭素社会への移行に伴う政策や規制対応がお取引先の事業や業績に及ぼす影響により、当行の信用や業績にも影響が及ぶ可能性があります。

業務範囲拡大・業務委託に伴うリスク

当行は、法令等の規制緩和に伴い、新たな収益機会を得るために業務範囲を拡大することがあります。

当行が業務範囲を拡大することに伴い、新たなリスクに晒されるほか、当該業務の拡大が予想通りに進展せず、当初想定した結果をもたらさない可能性があります。

また、効率的な業務運営を行うため、当行の業務の一部を他社に委託する場合があります。

当行業務の委託先において、委託した業務に係る事務事故、システム障害、情報漏洩等の事故が発生した場合には、当行の信用や業績に影響を及ぼす可能性があります。

競争に関するリスク

金融制度の規制緩和の進展に伴い、銀行・証券・保険などの業態を越えた競争や他業種から金融業界への参入などにより、金融業界の競争は一段と激化しております。その結果、当行が他金融機関等との競争において優位性を得られない場合、当行の業績や財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

退職給付債務に係るリスク

当行の退職給付費用及び債務は、年金資産の期待運用利回りや将来の退職給付債務算出に用いる年金数理上の前提条件に基づいて算出しておりますが、市場環境の急変等により、実際の結果が前提条件と異なる場合、又は前提条件に変更があった場合には、退職給付費用及び債務が増加する可能性があります。

固定資産の減損に係るリスク

当行は、営業拠点等の固定資産を保有しておりますが、今後の経済環境や不動産価格の変動あるいは当該固定資産の用途変更等によって、当該固定資産の収益性が低下し、減損損失が発生した場合には、当行の業績に影響を及ぼす可能性があります。

4 【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

(1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当行グループ（当行、連結子会社）の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下「経営成績等」という。）の状況の概要は次のとおりであります。

（経営成績等の概要）

・財政状態・経営成績

当連結会計年度における我が国経済は、コロナ禍を乗り越え、緩やかに回復しており、今年2月には日経平均株価が34年ぶりに史上最高値を更新しました。企業全体の収益が改善するなか、一部自動車メーカーの生産・出荷停止の影響はありましたが、設備投資は緩やかな増加傾向にあります。また、個人消費は物価上昇の影響等があるものの、底堅く推移している状況となっております。

滋賀県の経済は、持ち直しの動きが継続しております。一方で、輸送機械をはじめ製造業全体の生産活動は低下しており、需要面では、実質個人消費の伸びは緩やかな上昇にとどまっております。投資面では、民間設備投資や住宅投資、公共投資が減少している状況となっております。

このような状況のなか、当行は、企業価値・存在価値をさらに高めるため、2019年度より第7次中期経営計画「未来を描き、夢をかなえる」（期間：5年間：2019年4月～2024年3月）をスタートし、グループの総力をあけて、「お取引先や地域社会の持続可能な発展を企画して創る、従来の枠組み・発想を超える」という強い想いを込めた「Sustainability Design Company」の実現に向けて取り組んでまいりました。

第7次中期経営計画最終年度となる当連結会計年度の財政状態・経営成績は、以下のとおりとなりました。

財政状態につきましては、総資産残高は、7,970,551百万円で前連結会計年度末に比べ664,852百万円の増加となりました。

資産項目の主要な勘定残高は、有価証券が1,857,431百万円（前連結会計年度末比341,853百万円の増加）、貸出金が4,475,442百万円（同131,801百万円の増加）であります。

一方、負債の部の合計は、7,479,663百万円で前連結会計年度末に比べ615,186百万円の増加となりました。

負債項目の主要な勘定残高は、預金が5,803,032百万円（前連結会計年度末比88,664百万円の増加）、譲渡性預金が25,360百万円（同4,971百万円の減少）、コールマネー及び売渡手形が346,092百万円（同108,186百万円の増加）、債券貸借取引受入担保金が241,330百万円（同35,757百万円の増加）、借入金882,628百万円（同344,172百万円の増加）等であります。

純資産の部の合計は、490,887百万円で前連結会計年度末比49,665百万円の増加となりました。これは、その他有価証券評価差額金が前連結会計年度末比24,082百万円増加したことが主因であります。

経営成績につきましては、経常収益は、122,630百万円で前期比7,341百万円の増収となりました。これは、貸出金利息ならびに有価証券利息配当金の増加等による資金運用収益の増加（前期比16,138百万円の増加）を主因としております。

一方、経常費用は、98,663百万円で前期比3,415百万円の増加となりました。これは、借入金利息の増加等による資金調達費用の増加（前期比9,980百万円の増加）を主因としております。

その結果、当連結会計年度の経常利益は前期比3,925百万円増益の23,967百万円、親会社株主に帰属する当期純利益は同1,082百万円増益の15,940百万円となりました。

また、包括利益はその他有価証券評価差額金の増加幅が拡大したことを主因として、前連結会計年度比70,997百万円増加の55,925百万円となりました。

なお、当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、セグメントの業績は記載しておりません。

・キャッシュ・フロー

当行グループの当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況は以下の通りであります。

営業活動によるキャッシュ・フローにおいては、借入金、コールマネー、債券貸借取引受入担保金の増加等により、453,292百万円の収入（以下「キャッシュ・イン」という。）となりました。前期との比較でも、主として借入金が増加したことから、936,726百万円のキャッシュ・インの増加となりました。

また、投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得による支出が有価証券の売却および償還による収入を上回り、288,586百万円の支出（以下「キャッシュ・アウト」という。）となりました。前期との比較では、有価証券の売却による収入の減少等により、230,597百万円のキャッシュ・アウトの増加となりました。

さらに、財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払ならびに自己株式の取得による支出により6,280百万円のキャッシュ・アウトとなりました。前期との比較では、自己株式の取得による支出や配当金の支払の減少により、1,673百万円のキャッシュ・アウトの減少となりました。

これらの結果、現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ158,425百万円増加し、当連結会計年度末残高は1,359,724百万円となりました。

(参考)

(1) 国内・海外別収支

当連結会計年度の資金運用収支は、国内では前連結会計年度と比べ6,256百万円増加し54,539百万円、海外では同98百万円減少し648百万円、合計では同6,158百万円増加し55,187百万円となりました。また、信託報酬は合計で前連結会計年度と比べ0百万円減少し0百万円、役務取引等収支は合計で同1,488百万円増加し14,265百万円、その他業務収支は合計で同8,709百万円増加し 4,890百万円となりました。

種類	期別	国内	海外	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
資金運用収支	前連結会計年度	48,282	746	49,029
	当連結会計年度	54,539	648	55,187
うち資金運用収益	前連結会計年度	57,195	1,654	811 58,038
	当連結会計年度	73,401	3,494	2,717 74,177
うち資金調達費用	前連結会計年度	8,912	907	811 9,009
	当連結会計年度	18,861	2,846	2,717 18,989
信託報酬	前連結会計年度	0		0
	当連結会計年度	0		0
役務取引等収支	前連結会計年度	12,739	37	12,777
	当連結会計年度	14,216	48	14,265
うち役務取引等収益	前連結会計年度	17,603	47	17,651
	当連結会計年度	19,934	60	19,995
うち役務取引等費用	前連結会計年度	4,863	10	4,873
	当連結会計年度	5,718	11	5,730
その他業務収支	前連結会計年度	13,610	11	13,599
	当連結会計年度	4,889	1	4,890
うちその他業務収益	前連結会計年度	20,177	11	20,188
	当連結会計年度	13,181	0	13,181
うちその他業務費用	前連結会計年度	33,788	0	33,788
	当連結会計年度	18,070	1	18,072

(注) 1 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。なお、特別国際金融取引勘定分は国内に含めております。(以下、同。)

2 「海外」とは、当行の海外店であります。

3 資金調達費用は、金銭の信託運用見合費用(前連結会計年度1百万円、当連結会計年度1百万円)を控除して表示しております。

4 資金運用収益及び資金調達費用の合計欄の上段の計数は、国内と海外の間の資金貸借の利息であります。

(2) 国内・海外別資金運用 / 調達状況

国内では、当連結会計年度の資金運用勘定平均残高は貸出金を中心に6,540,238百万円となり、利回りは1.12%となりました。一方、資金調達勘定平均残高は預金等を中心に7,100,981百万円、利回りは0.26%となりました。前連結会計年度との比較では、資金運用勘定平均残高は200,801百万円の増加で利回りは0.22%の上昇、資金調達勘定平均残高は561,287百万円の増加で利回りは0.13%の上昇となりました。

海外では、当連結会計年度の資金運用勘定平均残高は貸出金と有価証券を中心に71,800百万円となり、利回りは4.86%となりました。一方、資金調達勘定平均残高は預金等で71,830百万円となり、利回りは3.96%となりました。前連結会計年度との比較では、資金運用勘定平均残高は14,860百万円の増加で利回りは1.96%の上昇、資金調達勘定平均残高は15,072百万円の増加で利回りは2.37%の上昇となりました。

国内

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	(51,710) 6,339,436	(811) 57,195	0.90
	当連結会計年度	(68,235) 6,540,238	(2,717) 73,401	1.12
うち貸出金	前連結会計年度	4,182,994	37,199	0.88
	当連結会計年度	4,347,518	42,654	0.98
うち商品有価証券	前連結会計年度	492	1	0.36
	当連結会計年度	514	1	0.29
うち有価証券	前連結会計年度	1,367,338	18,222	1.33
	当連結会計年度	1,481,055	23,303	1.57
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	20,872	139	0.66
	当連結会計年度	9,318	170	1.82
うち預け金	前連結会計年度	699,787	711	0.10
	当連結会計年度	620,451	1,493	0.24
資金調達勘定	前連結会計年度	() 6,539,693	() 8,912	0.13
	当連結会計年度	() 7,100,981	() 18,861	0.26
うち預金	前連結会計年度	5,618,541	1,090	0.01
	当連結会計年度	5,714,119	1,909	0.03
うち譲渡性預金	前連結会計年度	37,354	9	0.02
	当連結会計年度	25,102	7	0.02
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	133,835	1,711	1.27
	当連結会計年度	404,713	4,651	1.14
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	154,596	3,072	1.98
	当連結会計年度	261,376	5,124	1.96
うち借入金	前連結会計年度	596,137	3,034	0.50
	当連結会計年度	695,171	7,095	1.02

- (注) 1 平均残高は、原則として日々の残高の平均に基づいて算出しておりますが、連結子会社については期首・期末残高の平均を利用してあります。
- 2 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。
- 3 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度393,753百万円、当連結会計年度766,349百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度21,021百万円、当連結会計年度30,504百万円)及び利息(前連結会計年度1百万円、当連結会計年度1百万円)を、それぞれ控除して表示しております。
- 4 ()内は、国内と海外の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

海外

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	() 56,940	() 1,654	2.90
	当連結会計年度	() 71,800	() 3,494	4.86
うち貸出金	前連結会計年度	28,070	853	3.04
	当連結会計年度	36,224	1,772	4.89
うち商品有価証券	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち有価証券	前連結会計年度	28,438	800	2.81
	当連結会計年度	35,373	1,721	4.86
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち預け金	前連結会計年度	32	0	1.04
	当連結会計年度			
資金調達勘定	前連結会計年度	(51,710) 56,757	(811) 907	1.59
	当連結会計年度	(68,235) 71,830	(2,717) 2,846	3.96
うち預金	前連結会計年度	5,047	95	1.89
	当連結会計年度	3,594	128	3.56
うち譲渡性預金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			
うち借入金	前連結会計年度			
	当連結会計年度			

- (注) 1 平均残高は、日々の残高の平均に基づいて算出しております。
2 「海外」とは、当行の海外店であります。
3 ()内は、国内と海外の間の資金貸借の平均残高及び利息(内書き)であります。

合計

種類	期別	平均残高	利息	利回り
		金額(百万円)	金額(百万円)	(%)
資金運用勘定	前連結会計年度	6,344,666	58,038	0.91
	当連結会計年度	6,543,803	74,177	1.13
うち貸出金	前連結会計年度	4,211,064	38,053	0.90
	当連結会計年度	4,383,743	44,427	1.01
うち商品有価証券	前連結会計年度	492	1	0.36
	当連結会計年度	514	1	0.29
うち有価証券	前連結会計年度	1,395,777	19,022	1.36
	当連結会計年度	1,516,429	25,024	1.65
うちコールローン 及び買入手形	前連結会計年度	20,872	139	0.66
	当連結会計年度	9,318	170	1.82
うち預け金	前連結会計年度	699,819	711	0.10
	当連結会計年度	620,451	1,493	0.24
資金調達勘定	前連結会計年度	6,544,741	9,009	0.13
	当連結会計年度	7,104,576	18,989	0.26
うち預金	前連結会計年度	5,623,588	1,185	0.02
	当連結会計年度	5,717,714	2,037	0.03
うち譲渡性預金	前連結会計年度	37,354	9	0.02
	当連結会計年度	25,102	7	0.02
うちコールマネー 及び売渡手形	前連結会計年度	133,835	1,711	1.27
	当連結会計年度	404,713	4,651	1.14
うち債券貸借取引 受入担保金	前連結会計年度	154,596	3,072	1.98
	当連結会計年度	261,376	5,124	1.96
うち借入金	前連結会計年度	596,137	3,034	0.50
	当連結会計年度	695,171	7,095	1.02

(注) 1 資金運用勘定は無利息預け金の平均残高(前連結会計年度393,753百万円、当連結会計年度766,349百万円)を、資金調達勘定は金銭の信託運用見合額の平均残高(前連結会計年度21,021百万円、当連結会計年度30,504百万円)及び利息(前連結会計年度1百万円、当連結会計年度1百万円)を、それぞれ控除して表示しております。

2 国内と海外の間の資金貸借の平均残高及び利息は、相殺して記載しております。

(3) 国内・海外別役務取引の状況

当連結会計年度の役務取引等収益は、預金・貸出業務、為替業務、カード業務、投資信託・保険販売業務を中心としておりますが、国内と海外の合計で前連結会計年度に比べ2,344百万円増加し19,995百万円となりました。また、役務取引等費用は合計で前連結会計年度に比べ856百万円増加し5,730百万円となりました。

種類	期別	国内	海外	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
役務取引等収益	前連結会計年度	17,603	47	17,651
	当連結会計年度	19,934	60	19,995
うち預金・貸出業務	前連結会計年度	4,003		4,003
	当連結会計年度	5,812		5,812
うち為替業務	前連結会計年度	2,795	47	2,843
	当連結会計年度	2,956	60	3,017
うち信託関連業務	前連結会計年度	135		135
	当連結会計年度	160		160
うち証券関連業務	前連結会計年度	234		234
	当連結会計年度	131		131
うち代理業務	前連結会計年度	313		313
	当連結会計年度	298		298
うち保護預り・貸金庫業務	前連結会計年度	113		113
	当連結会計年度	108		108
うち保証業務	前連結会計年度	1,007		1,007
	当連結会計年度	951		951
うちカード業務	前連結会計年度	3,228		3,228
	当連結会計年度	3,324		3,324
うち投資信託・保険販売業務	前連結会計年度	4,100		4,100
	当連結会計年度	4,359		4,359
役務取引等費用	前連結会計年度	4,863	10	4,873
	当連結会計年度	5,718	11	5,730
うち為替業務	前連結会計年度	302	5	307
	当連結会計年度	316	5	321

(注) 1 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。

2 「海外」とは、当行の海外店であります。

(4) 国内・海外別預金残高の状況

預金の種類別残高(期末残高)

種類	期別	国内	海外	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
預金合計	前連結会計年度	5,709,382	4,985	5,714,368
	当連結会計年度	5,800,300	2,732	5,803,032
うち流動性預金	前連結会計年度	3,672,562	997	3,673,559
	当連結会計年度	3,839,028	893	3,839,921
うち定期性預金	前連結会計年度	1,951,973	3,987	1,955,961
	当連結会計年度	1,896,014	1,838	1,897,853
うちその他	前連結会計年度	84,847		84,847
	当連結会計年度	65,257		65,257
譲渡性預金	前連結会計年度	30,332		30,332
	当連結会計年度	25,360		25,360
総合計	前連結会計年度	5,739,715	4,985	5,744,700
	当連結会計年度	5,825,660	2,732	5,828,393

(注) 1 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。

2 「海外」とは、当行の海外店であります。

3 流動性預金 = 当座預金 + 普通預金 + 貯蓄預金 + 通知預金

定期性預金 = 定期預金 + 定期積金

(5) 国内・海外別貸出金残高の状況

業種別貸出状況(期末残高・構成比)

業種別	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
国内 (除く特別国際金融取引勘定分)	4,311,190	100.00	4,437,417	100.00
製造業	561,724	13.03	564,653	12.73
農業、林業	8,416	0.20	8,506	0.19
漁業	533	0.01	638	0.01
鉱業、採石業、砂利採取業	5,289	0.12	5,516	0.12
建設業	138,757	3.22	141,311	3.18
電気・ガス・熱供給・水道業	138,608	3.22	155,986	3.52
情報通信業	15,813	0.37	14,760	0.33
運輸業、郵便業	170,943	3.97	181,795	4.10
卸売業、小売業	456,272	10.58	451,164	10.17
金融業、保険業	149,660	3.47	166,415	3.75
不動産業、物品賃貸業	728,665	16.90	775,970	17.49
その他のサービス業	296,800	6.88	287,104	6.47
地方公共団体	526,818	12.22	472,876	10.66
その他	1,112,887	25.81	1,210,715	27.28
海外及び特別国際金融取引勘定分	32,450	100.00	38,025	100.00
政府等				
金融機関	7,870	24.26	8,871	23.33
その他	24,579	75.74	29,153	76.67
合計	4,343,641		4,475,442	

(注) 1 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。
2 「海外」とは、当行の海外店であります。

外国政府等向け債権残高(国別)

「外国政府等」とは、外国政府、中央銀行、政府関係機関又は国営企業及びこれらの所在する国の民間企業等であり、「銀行等金融機関の資産の自己査定並びに貸倒償却及び貸倒引当金の監査に関する実務指針」(日本公認会計士協会銀行等監査特別委員会報告第4号 令和4年4月14日)に規定する特定海外債権引当勘定を計上している国の外国政府等の債権残高を掲げることとしておりますが、前連結会計年度末(2023年3月31日)、当連結会計年度末(2024年3月31日)とも、該当事項はありません。

(6) 国内・海外別有価証券の状況

有価証券残高(期末残高)

種類	期別	国内	海外	合計
		金額(百万円)	金額(百万円)	金額(百万円)
国債	前連結会計年度	324,224		324,224
	当連結会計年度	538,190		538,190
地方債	前連結会計年度	228,191		228,191
	当連結会計年度	231,788		231,788
社債	前連結会計年度	310,074		310,074
	当連結会計年度	300,895		300,895
株式	前連結会計年度	284,360		284,360
	当連結会計年度	345,625		345,625
その他の証券	前連結会計年度	337,297	31,429	368,726
	当連結会計年度	406,227	34,703	440,931
合計	前連結会計年度	1,484,148	31,429	1,515,578
	当連結会計年度	1,822,727	34,703	1,857,431

- (注) 1 「国内」とは、当行(海外店を除く)及び連結子会社であります。
2 「海外」とは、当行の海外店であります。
3 「その他の証券」には、外国債券及び外国株式を含んでおります。

(7) 「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づく信託業務の状況

連結会社のうち、「金融機関の信託業務の兼営等に関する法律」に基づき信託業務を営む会社は、当行1社であります。

信託財産の運用 / 受入状況(信託財産残高表)

資産				
科目	前連結会計年度 (2023年3月31日)		当連結会計年度 (2024年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
銀行勘定貸	187	100.00	184	100.00
合計	187	100.00	184	100.00

負債				
科目	前連結会計年度 (2023年3月31日)		当連結会計年度 (2024年3月31日)	
	金額(百万円)	構成比(%)	金額(百万円)	構成比(%)
金銭信託	187	99.99	184	99.99
仮受金	0	0.01	0	0.01
合計	187	100.00	184	100.00

- (注) 共同信託他社管理財産については、前連結会計年度(2023年3月31日)及び当連結会計年度(2024年3月31日)のいずれも取扱残高はありません。

元本補填契約のある信託の運用 / 受入状況(期末残高)

科目	前連結会計年度 (2023年3月31日)			当連結会計年度 (2024年3月31日)		
	金銭信託 (百万円)	貸付信託 (百万円)	合計 (百万円)	金銭信託 (百万円)	貸付信託 (百万円)	合計 (百万円)
銀行勘定貸	187		187	184		184
資産計	187		187	184		184
元本	187		187	184		184
その他	0		0	0		0
負債計	187		187	184		184

(自己資本比率等の状況)

(参考)

自己資本比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準(平成18年金融庁告示第19号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

当行は、国際統一基準を適用のうえ、信用リスク・アセットの算出においては基礎的内部格付手法を、オペレーショナル・リスク相当額の算出においては標準的計測手法を採用しております。また、当行はマーケット・リスク規制を導入しておりません。

自己資本比率の補完的指標であるレバレッジ比率は、銀行法第14条の2の規定に基づき、銀行がその保有する資産等に照らし自己資本の充実の状況が適当であるかどうかを判断するための基準の補完的指標として定めるレバレッジに係る健全性を判断するための基準(平成31年金融庁告示第11号)に定められた算式に基づき、連結ベースと単体ベースの双方について算出しております。

連結自己資本比率(国際統一基準)

(単位: 億円、%)

	2023年3月31日	2024年3月31日
1. 連結総自己資本比率(4/7)	15.80	15.70
2. 連結Tier 1比率(5/7)	15.79	15.70
3. 連結普通株式等Tier 1比率(6/7)	15.79	15.70
4. 連結における総自己資本の額	4,119	4,624
5. 連結におけるTier 1資本の額	4,119	4,623
6. 連結における普通株式等Tier 1資本の額	4,119	4,623
7. リスク・アセットの額	26,070	29,446
8. 連結総所要自己資本額	2,085	2,355

連結レバレッジ比率(国際統一基準)

(単位：%)

	2023年3月31日	2024年3月31日
連結レバレッジ比率	6.66	6.91

単体自己資本比率(国際統一基準)

(単位：億円、%)

	2023年3月31日	2024年3月31日
1. 単体総自己資本比率(4/7)	15.52	15.46
2. 単体Tier 1比率(5/7)	15.52	15.46
3. 単体普通株式等Tier 1比率(6/7)	15.52	15.46
4. 単体における総自己資本の額	3,985	4,486
5. 単体におけるTier 1資本の額	3,985	4,486
6. 単体における普通株式等Tier 1資本の額	3,985	4,486
7. リスク・アセットの額	25,677	29,013
8. 単体総所要自己資本額	2,054	2,321

単体レバレッジ比率(国際統一基準)

(単位：%)

	2023年3月31日	2024年3月31日
単体レバレッジ比率	6.46	6.73

(資産の査定)

(参考)

資産の査定は、「金融機能の再生のための緊急措置に関する法律」(平成10年法律第132号)第6条に基づき、当行の貸借対照表の社債(当該社債を有する金融機関がその元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が金融商品取引法(昭和23年法律第25号)第2条第3項に規定する有価証券の私募によるものに限る。)、貸出金、外国為替、その他資産中の未収利息及び仮払金、支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに貸借対照表に注記することとされている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)について債務者の財政状態及び経営成績等を基礎として次のとおり区分するものであります。

1 破産更生債権及びこれらに準ずる債権

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権をいう。

2 危険債権

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権をいう。

3 要管理債権

要管理債権とは、三月以上延滞債権及び貸出条件緩和債権をいう。

4 正常債権

正常債権とは、債務者の財政状態及び経営成績に特に問題がないものとして、上記1から3までに掲げる債権以外のものに区分される債権をいう。

資産の査定額

債権の区分	2023年3月31日	2024年3月31日
	金額(百万円)	金額(百万円)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権	2,697	2,762
危険債権	48,314	51,666
要管理債権	33,405	30,095
正常債権	4,317,864	4,451,794

(2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当行グループの経営成績等の状況に関する分析・検討内容は次のとおりであります。なお、以下の記載における将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において判断したものであります。

当連結会計年度の財政状態及び経営成績の状況に関する認識及び分析・検討内容

(財政状態)

当連結会計年度の預金等(譲渡性預金を含む)の期中平均残高は、法人、個人預金を中心に前連結会計年度に比べ、81,875百万円増加(増加率1.44%)して5,742,817百万円(うち預金は5,717,714百万円)となりました。

一方、資金運用の要である貸出金の期中平均残高は、事業性貸出・消費者向け貸出が増加し、前連結会計年度に比べ、172,678百万円増加(増加率4.10%)して4,383,743百万円となりました。

これらは、「お取引先や地域社会の持続可能な発展を企画して創る」との思いを込めた第7次中期経営計画の目標(Sustainable Development推進投融资への取り組み、地域顧客の価値向上や資産形成サポート等)の達成に向けて、個人・中堅中小企業等の多様なニーズへの対応に努めた結果であります。

なお、第7次中期経営計画期間中の挑戦指標と2024年3月期末実績については、「第2 事業の状況 1 . 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等 (2)第7次中期経営計画の達成度」に記載しております。

また、有価証券の期中平均残高は、前連結会計年度比120,652百万円増加(増加率8.64%)の1,516,429百万円となりました。これは、自社の体力に応じて国内外の債券や株式、投資信託等に分散投資を行った結果であります。

主要勘定の期中平均残高	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
預金等	5,660,942	5,742,817	81,875
うち預金	5,623,588	5,717,714	94,126
貸出金	4,211,064	4,383,743	172,678
有価証券	1,395,777	1,516,429	120,652

なお、「金融再生法開示債権額」については、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1)連結財務諸表『注記事項』(連結貸借対照表関係)」に記載しておりますのでご参照ください。

(経営成績)

連結業務粗利益〔資金利益＋役務取引等利益＋その他業務利益〕

連結業務粗利益は、資金利益、役務取引等利益、その他業務利益がともに増加し、前連結会計年度比16,355百万円増加の64,562百万円となりました。

資金利益は、前連結会計年度比6,158百万円増加し55,187百万円となりました。これは、貸出金利息や有価証券利息配当金の増加等により、資金運用収益が16,138百万円増加したことが主因であります。貸出金利息収入の源泉である「中小企業向け貸出」は地域金融機関の本来業務であり、引き続き良質な貸出金の増強に努力してまいります。

役務取引等利益（信託報酬を含む）は、前連結会計年度比1,487百万円増加し、14,265百万円となりました。これは、役務取引等収益が2,344百万円増加した一方で役務取引等費用が856百万円の増加にとどまったことが主因であります。当行グループは伝統的な預貸金ビジネスに加え「課題解決型金融情報サービス業」への進化を目指し、法人向け・個人向けサービスの強化に努めております。法人向けサービスにおいては、M & A・事業承継・ビジネスマッチング等に取り組み、非金利収入のコア収益化を目指しております。また、個人向けサービスにおいては、資産運用相談への確に対応して顧客の資産形成に資するとともに、預り資産残高を着実に増加させ、相場環境に左右されず安定して収益を得られる体制を目指しております。

その他業務利益は、国債等債券売却損の計上が前連結会計年度比16,738百万円減少したことを主因に、前連結会計年度比8,709百万円改善し、4,890百万円となりました。

連結業務粗利益の内訳	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
連結業務粗利益	48,207	64,562	16,355
資金利益	49,029	55,187	6,158
資金運用収益	58,038	74,177	16,138
うち貸出金利息	38,053	44,427	6,373
うち有価証券利息配当金	19,024	25,026	6,002
資金調達費用 ()	9,010	18,990	9,980
うち預金等利息 ()	1,194	2,045	850
金銭の信託運用見合費用	1	1	0
役務取引等利益	12,777	14,265	1,487
信託報酬	0	0	0
役務取引等収益	17,651	19,995	2,344
役務取引等費用 ()	4,873	5,730	856
その他業務利益	13,599	4,890	8,709
その他業務収益	20,188	13,181	7,006
その他業務費用 ()	33,788	18,072	15,715

(注) 連結業務粗利益 = 資金利益(資金運用収益 - 資金調達費用 + 金銭の信託運用見合費用) + 役務取引等利益(信託報酬 + 役務取引等収益 - 役務取引等費用) + その他業務利益(その他業務収益 - その他業務費用)

連結実質業務純益〔連結業務粗利益 - 営業経費(臨時費用処理分を除く)〕

営業経費(臨時費用処理分を除く)は、次世代基幹系システム関連費用の増加による物件費の増加を主因に、全体で前連結会計年度に比べて6,770百万円増加し、52,924百万円となりました。この結果、連結実質業務純益は11,638百万円となり、前連結会計年度に比べて9,585百万円の増益となりました。

連結実質業務純益の内訳	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
連結業務粗利益	48,207	64,562	16,355
営業経費(臨時費用処理分を除く) ()	46,153	52,924	6,770
連結実質業務純益	2,053	11,638	9,585

(注) 連結実質業務純益 = 連結業務粗利益 - 営業経費(臨時費用処理分を除く)

経常利益〔連結実質業務純益 - その他経常費用中一般貸倒引当金繰入額 + その他経常損益(不良債権処理額・株式等関係損益等)〕

当連結会計年度の与信コスト(=その他経常費用中一般貸倒引当金繰入額 + 不良債権処理額 - 貸倒引当金等戻入益)は、前連結会計年度に比べて1,434百万円増加の3,319百万円となりました。

また、株式等関係損益(=売却益 - 売却損 - 償却)は、株式等売却益の減少を主因として前連結会計年度に比べ4,625百万円減少の12,706百万円となりました。

これらの結果、経常利益は、前連結会計年度比3,925百万円増益の23,967百万円となりました。

経常利益の内訳	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
連結実質業務純益	2,053	11,638	9,585
その他経常費用中 一般貸倒引当金繰入額 ()	2,286	635	1,650
その他経常損益	15,701	11,693	4,008
うち不良債権処理額 ()	4,171	3,955	216
うち貸倒引当金等戻入益			
うち株式等関係損益	17,331	12,706	4,625
経常利益	20,041	23,967	3,925
[ご参考] 与信コスト ()	1,885	3,319	1,434

- (注) 1 経常利益 = 連結実質業務純益 - その他経常費用中一般貸倒引当金繰入額 + その他経常損益(その他経常収益 - (その他経常費用 - 一般貸倒引当金繰入額 + 営業経費中臨時費用処理分 + 金銭の信託運用見合費用))
- 2 不良債権処理額 = 貸出金償却 + 貸倒引当金繰入額(一般貸倒引当金繰入額を除く) + その他債権売却損等
- 3 株式等関係損益 = 株式等売却益 - 株式等売却損 - 株式等償却
- 4 与信コスト = 一般貸倒引当金繰入額 + 不良債権処理額 - 貸倒引当金等戻入益

親会社株主に帰属する当期純利益〔経常利益＋特別損益－法人税等合計－非支配株主に帰属する当期純利益〕

特別損益は、固定資産処分損益の減少を主因として前連結会計年度比358百万円減少して 231百万円となりました。また、法人税等合計は前連結会計年度に比べて2,484百万円増加し7,794百万円となりました。

以上の結果、親会社株主に帰属する当期純利益は、前連結会計年度に比べて1,082百万円増益の15,940百万円となりました。

親会社株主に帰属する当期純利益の内訳	前連結会計年度 (百万円)(A)	当連結会計年度 (百万円)(B)	増減(百万円) (B) - (A)
経常利益	20,041	23,967	3,925
特別損益	126	231	358
うち固定資産処分損益	126	84	211
うち減損損失 ()		146	146
税金等調整前当期純利益	20,168	23,735	3,567
法人税等合計 ()	5,309	7,794	2,484
非支配株主に帰属する当期純利益 ()			
親会社株主に帰属する当期純利益	14,858	15,940	1,082

(注) 1 税金等調整前当期純利益＝経常利益＋特別損益(特別利益－特別損失)

2 親会社株主に帰属する当期純利益＝税金等調整前当期純利益－法人税等合計－非支配株主に帰属する当期純利益

キャッシュ・フローの状況の分析・検討内容並びに資本の財源及び資金の流動性に係る情報

当行グループの当連結会計年度のキャッシュ・フローの状況は以下の通りであります。

営業活動によるキャッシュ・フローにおいては、借入金、コールマネー、債券貸借取引受入担保金の増加等により、453,292百万円の収入(以下「キャッシュ・イン」という。)となりました。前期との比較でも、主として借入金が増加したことから、936,726百万円のキャッシュ・インの増加となりました。

また、投資活動によるキャッシュ・フローは、有価証券の取得による支出が有価証券の売却および償還による収入を上回り、288,586百万円の支出(以下「キャッシュ・アウト」という。)となりました。前期との比較では、有価証券の売却による収入の減少等により、230,597百万円のキャッシュ・アウトの増加となりました。

さらに、財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払ならびに自己株式の取得による支出により6,280百万円のキャッシュ・アウトとなりました。前期との比較では、自己株式の取得による支出や配当金の支払の減少により、1,673百万円のキャッシュ・アウトの減少となりました。

これらの結果、現金及び現金同等物は、前連結会計年度末に比べ158,425百万円増加し、当連結会計年度末残高は1,359,724百万円となりました。

当行グループの投資の財源及び資金の流動性については以下の通りであります。

当面の設備投資、成長分野への投資並びに株主還元等は自己資金で対応する予定であります。

また、当行グループは正確な資金繰りの把握及び資金繰りの安定に努めるとともに、適切なリスク管理体制の構築を図っております。貸出金や有価証券の運用については、大部分を顧客からの預金にて調達するとともに、必要に応じて日銀借入金やコールマネー等により資金調達を行っております。なお、資金の流動性の状況等については定期的にALM委員会・取締役会に報告しております。

重要な会計上の見積り及び当該見積りに用いた仮定

当行グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成しております。この連結財務諸表を作成するにあたって、資産、負債、収益及び費用の報告額に影響を及ぼす見積り及び仮定を用いておりますが、これらの見積り及び仮定に基づく数値は実際の結果と異なる可能性があります。

連結財務諸表の作成にあたって用いた会計上の見積り及び仮定のうち、重要なものは「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表『注記事項』(重要な会計上の見積り)」に記載しております。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当行は、将来のデジタル戦略の実現に向けた次世代基幹系システムの導入を予定しており、同システムに関する研究開発を行っております。

その結果、研究開発費として、前連結会計年度は4,888百万円計上しております。当連結会計年度は研究開発費の計上はありません。

第3 【設備の状況】

1 【設備投資等の概要】

当行及び連結子会社では、経営資源の強化を主眼に全体で1,182百万円の設備投資を実施いたしました。

上記は会計上、有形固定資産又は無形固定資産として資産計上した金額であります。

なお、当行は、将来のデジタル戦略の実現に向けた基幹系システム（次世代システム）の導入を予定しており、同システムへの投資として、当連結会計年度中に11,498百万円を会計上費用として計上しております。

2 【主要な設備の状況】

当連結会計年度末における主要な設備の状況は次のとおりであります。

なお、「リース資産」は計上していないため設欄しておりません。

(2024年3月31日現在)

銀行業

	店舗名・その他 (所在地)	設備の内容	面積(㎡)	帳簿価額(百万円)				従業員数 (人)
			土地	土地	建物	動産	合計	
当行	本店 (滋賀県大津市)	店舗 事務センターほか	10,999.38	2,757	4,353	736	7,847	656
	坂本支店 ほか14店 (滋賀県大津市)	店舗	18,481.90 (1,620.71)	3,416	638	159	4,214	162
	草津支店 ほか5店 (滋賀県草津市)	店舗	8,858.92 (1,303.32)	1,536	618	127	2,282	102
	栗東支店 ほか2店 (滋賀県栗東市)	店舗	4,228.79	766	333	33	1,134	39
	守山支店 ほか2店 (滋賀県守山市)	店舗	4,620.18	671	569	99	1,340	48
	野洲支店 ほか1店 (滋賀県野洲市)	店舗	5,026.82	657	149	21	829	31
	八幡支店 ほか4店 (滋賀県近江八幡市)	店舗	8,026.24 (666.00)	709	139	36	885	74
	彦根支店 ほか6店 (滋賀県彦根市)	店舗	7,507.06	1,160	388	85	1,634	97
	八日市東支店 ほか4店 (滋賀県東近江市)	店舗	7,336.14 (1,038.00)	440	360	44	846	64
	水口支店 ほか5店 (滋賀県甲賀市)	店舗	9,164.14 (1,308.00)	732	291	42	1,067	63
	石部支店 ほか2店 (滋賀県湖南市)	店舗	5,757.26	540	67	40	648	42
	今津支店 ほか3店 (滋賀県高島市)	店舗	5,426.21	397	237	21	656	41
	長浜支店 ほか4店 (滋賀県長浜市)	店舗	12,795.35 (1,378.14)	929	316	51	1,297	61
	米原支店 ほか2店 (滋賀県米原市)	店舗	4,252.12 (264.46)	215	227	11	454	25
	竜王支店 ほか1店 (滋賀県蒲生郡竜王町ほか)	店舗	1,633.49	80	34	9	123	16
	多賀支店 ほか1店 (滋賀県犬上郡多賀町ほか)	店舗	2,403.29	83	134	21	240	9
	愛知川支店 (滋賀県愛知郡愛荘町)	店舗	1,904.94	80	16	6	104	19
	京都支店 (京都市下京区)	店舗	1,182.50	2,221	443	8	2,673	39

	店舗名・その他 (所在地)	設備の内容	帳簿価額(百万円)					従業員数 (人)
			面積(㎡) 土地	土地	建物	動産	合計	
当行	北大路支店 ほか 1店 (京都市北区)	店舗	678.63	674	41	3	720	18
	九条支店 (京都市南区)	店舗	869.42	375	35	7	418	15
	東山支店 (京都市東山区)	店舗	718.99	501	6	2	511	15
	丸太町支店 ほか 1店 (京都市上京区)	店舗	2,415.74	1,316	39	10	1,366	27
	桂支店 (京都市西京区)	店舗	769.45	455	100	1	557	13
	太秦支店 (京都市右京区)	店舗	498.79	135	6	4	146	13
	京都南支店 (京都市伏見区)	店舗	1,101.00 (1,101.00)		49	4	53	17
	山科支店 ほか 3店 (京都市山科区)	店舗	1,336.65	507	17	9	535	35
	宇治支店 (京都府宇治市)	店舗	1,287.71	231	51	4	287	12
	大阪支店 ほか 1店 (大阪市北区)	店舗	428.69	1,476	122	20	1,619	29
	新大阪支店 (大阪市淀川区)	店舗			18	1	19	8
	阪急高槻支店 (大阪府高槻市)	店舗	968.44	410	17	6	434	12
	牧野支店 (大阪府枚方市)	店舗	1,198.55	169	7	1	179	10
	大阪東法人営業部 (大阪府守口市)	店舗			5	0	5	6
	東京支店 (東京都中央区)	店舗	620.91	2,492	246	5	2,744	18
	名古屋支店 (名古屋市中区)	店舗				1	1	10
	大垣支店 (岐阜県大垣市)	店舗	856.87	62	50	1	113	9
	上野支店 (三重県伊賀市)	店舗	958.21	52	54	2	109	8
	三重支店 (三重県四日市市)	店舗			9	0	9	9
	香港支店 (5Queen's Road Central, Hong Kong)	店舗			29	2	32	3
浜町研修センター (滋賀県大津市)	研修所	2,551.97	595	987	18	1,601		
社宅・寮 計11か所 (滋賀県大津市ほか)	社宅・寮	9,464.43	3,106	946	5	4,058		
その他の施設 (滋賀県大津市ほか)	倉庫ほか	8,086.99	1,404	968	40	2,413		

- (注) 1 土地の面積欄の()内は借地の面積(内書き)であり、その年間賃借料は建物も含め201百万円であります。
2 上記の動産の内訳は、事務機械1,195百万円、その他517百万円であります。
3 当行の国内代理店33か所、店舗外現金自動設備136か所、海外駐在員事務2か所は上記に含めて記載しております。
4 上記のほか、レンタル契約による主な賃借設備は次のとおりであります。

会社名	店舗名・その他 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	従業員数 (人)	年間レンタル料 (百万円)
当行	本店ほか (滋賀県大津市ほか)	銀行業	自動車・ バイクほか		121
連結子会社	国内連結子会社2社 (滋賀県大津市)	銀行業	自動車		6

3 【設備の新設、除却等の計画】

当行及び連結子会社の設備投資については、地元重視の地域戦略に基づく営業政策、利益に対する投資割合等を総合的に勘案して計画しております。

連結子会社の設備投資計画は、原則的に各社が個別に策定しておりますが、当連結会計年度末において重要な設備の新設等の計画はありません。

当行の当連結会計年度末における重要な設備の新設、改修等に係る所要資金については、全額自己資金で賄う予定であります。

当連結会計年度末において計画中等である重要な設備の新設、除却等は次のとおりであります。

(1) 新設、改修

会社名	店舗名 その他	所在地	区分	セグメント の名称	設備の内容	投資予定金額 (百万円)		資金 調達 方法	着手 年月	完了 予定 年月
						総額	既支払額			
当行	次世代基幹系 システム関連	滋賀県大津市ほか	新規	銀行業	ソフトウェア の開発費等	未定	27,725	自己資金	2021年 6月	未定
当行	勘定系システム	滋賀県大津市ほか	更改	銀行業	ソフトウェア の開発費等	6,139		自己資金	2024年 6月	2027年 1月

(注) 1 上記設備計画の記載金額には、消費税及び地方消費税を含んでおりません。

2 次世代基幹系システム関連の着手年月については、当初の投資予定金額（総額：27,537百万円）が取締役会にて最終承認された年月を記載しております。

3 次世代基幹系システム関連については投資計画の検証を行っております。このため、「投資予定金額（総額）」及び「完了予定年月」については「未定」と記載しております。

(2) 売却

該当事項はありません。

第4 【提出会社の状況】

1 【株式等の状況】

(1) 【株式の総数等】

【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	100,000,000
計	100,000,000

【発行済株式】

種類	事業年度末現在 発行数(株) (2024年3月31日)	提出日現在 発行数(株) (2024年6月11日)	上場金融商品取引所名又は 登録認可金融商品取引業協会名	内容
普通株式	53,090,081	53,090,081	東京証券取引所 プライム市場	単元株式数は100株 であります。
計	53,090,081	53,090,081		

(2) 【新株予約権等の状況】

【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

(4) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年 月 日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金 増減額 (百万円)	資本金 残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2018年10月1日(注)	212,360	53,090		33,076		23,942

(注) 発行済株式総数の減少は、株式併合(5株を1株に併合)によるものであります。

(5) 【所有者別状況】

2024年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	1	39	29	704	181	2	8,103	9,059	
所有株式数(単元)	127	147,920	10,695	101,054	105,436	19	163,384	528,635	226,581
所有株式数の割合(%)	0.02	27.98	2.02	19.12	19.95	0.00	30.91	100.00	

(注) 自己株式6,159,570株は「個人その他」に61,595単元、「単元未満株式の状況」に70株含まれております。

(6) 【大株主の状況】

2024年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区赤坂1丁目8番1号 赤坂インターシティAIR	4,112	8.76
株式会社日本カストディ銀行(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8-12	1,835	3.91
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内1丁目6番6号 日本生命証券管理部内	1,610	3.43
明治安田生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内2丁目1-1	1,599	3.40
GOLDMAN SACHS INTERNATIONAL (常任代理人 ゴールドマン・サックス証券株式会社)	PLUMTREE COURT,25 SHOE LANE,LONDON EC4A 4AU,U.K. (東京都港区六本木6丁目10-1 六本木ヒルズ森タワー)	1,277	2.72
損害保険ジャパン株式会社	東京都新宿区西新宿1丁目26番1号	1,180	2.51
滋賀銀行従業員持株会	滋賀県大津市浜町1番38号	1,167	2.48
京都中央信用金庫	京都府京都市下京区四条通室町東入 函谷鉾町91	1,000	2.13
JP MORGAN CHASE BANK 385781 (常任代理人 株式会社みずほ銀行決済営業部)	25 BANK STREET,CANARY WHARF,LONDON, E14 5JP, UNITED KINGDOM (東京都港区港南2丁目15番1号 品川インターシティA棟)	646	1.37
CEPLUX-THE INDEPENDENT UCITS PLATFORM 2 (常任代理人 シティバンク、エヌ・エス・エイ東京支店)	31,Z.A.BOURMICH,L- 8070,BERTRANGE,LUXEMBOURG (東京都新宿区新宿6丁目27番30号)	609	1.29
計		15,039	32.04

(注) 1 当行は自己株式6,159千株(発行済株式総数に対する所有株式数の割合は11.60%)を所有しておりますが、上記大株主の状況には記載しておりません。

2 2023年11月6日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書の変更報告書において、ウエリントン・マネージメント・カンパニー・エルエルピー(Wellington Management Company LLP)及びその共同保有者であるウエリントン・マネージメント・インターナショナル・リミテッド(Wellington Management International Ltd)が2023年10月31日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当行として2024年3月31日時点における実質所有株式数の確認ができません。

なお、大量保有報告書の変更報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(千株)	株券等保有割合(%)
ウエリントン・マネージメント・カンパニー・エルエルピー (Wellington Management Company LLP)	アメリカ合衆国 02210 マサチューセッツ州ボストン、コンGRESS・ストリート 280	2,265	4.27
ウエリントン・マネージメント・インターナショナル・リミテッド (Wellington Management International Ltd)	英国 SWIE 5JL、ロンドン、ビクトリア・ストリート80、カーディナル・プレイス	1,073	2.02
合計		3,338	6.29

3 2023年1月30日付で公衆の縦覧に供されている大量保有報告書の変更報告書において、シルチェスター・インターナショナル・インベスターズ・エルエルピー (Silchester International Investors LLP) が2023年1月27日現在で以下の株式を所有している旨が記載されているものの、当行として2024年3月31日時点における実質所有株式数の確認ができません。

なお、大量保有報告書の変更報告書の内容は以下のとおりであります。

氏名又は名称	住所	保有株券等の数(千株)	株券等保有割合(%)
シルチェスター・インターナショナル・インベスターズ・エルエルピー (Silchester International Investors LLP)	英国 ロンドン ダブリュー1ジェイ 6 ティーエル、ブルトン ストリート1、タイム アンド ライフ ビル5階	2,322	4.38

(7) 【議決権の状況】

【発行済株式】

2024年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式			
議決権制限株式(自己株式等)			
議決権制限株式(その他)			
完全議決権株式(自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 6,159,500		
完全議決権株式(その他)	普通株式 46,704,000	467,040	
単元未満株式	普通株式 226,581		一単元(100株)未満の株式
発行済株式総数	53,090,081		
総株主の議決権		467,040	

(注) 「単元未満株式」欄の普通株式には、当行所有の自己株式70株が含まれております。

【自己株式等】

2024年3月31日現在

所有者の氏名 又は名称	所有者の住所	自己名義 所有株式数 (株)	他人名義 所有株式数 (株)	所有株式数 の合計 (株)	発行済株式総数 に対する所有 株式数の割合 (%)
(自己保有株式) 株式会社滋賀銀行	滋賀県大津市浜町 1 番38号	6,159,500		6,159,500	11.60
計		6,159,500		6,159,500	11.60

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び第7号による普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

会社法第155条第3号による取得

区 分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2024年1月26日)での決議状況 (取得期間 2024年1月29日～2024年3月22日)	700,000	2,000,000,000
当事業年度前における取得自己株式		
当事業年度における取得自己株式	552,000	1,999,668,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	148,000	332,000
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	21.14	0.01
当期間における取得自己株式		
提出日現在の未行使割合(%)	21.14	0.01

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

会社法第155条第7号による取得

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	2,230	8,012,117
当期間における取得自己株式	616	2,453,210

(注) 1 単元未満株式の買取りによる増加であります。

2 当期間における取得自己株式には、2024年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式数は含めておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式				
消却の処分を行った取得自己株式				
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式				
その他(譲渡制限付株式報酬としての自己株式の処分)	7,690	19,849,752		
その他(単元未満株式の買増請求による売り渡し)	60	154,877		
保有自己株式数	6,159,570		6,160,186	

(注) 当期間における保有自己株式数には、2024年6月1日から有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り、買増請求による売り渡し及び市場買付けによる自己株式数は含めておりません。

3 【配当政策】

当行は、「『三方よし』で地域を幸せにする」のパーパスのもと、健全性、成長投資、株主還元をバランスよく運営する「三方よし」の資本政策をベースに、出来る限りの株主還元を行うことを基本方針としております。

配当については、株主総会の決議を要しますが、当事業年度の期末配当金は1株当たり40円として2024年6月26日開催の定時株主総会にお諮りする予定であります。

当行は会社法第454条第5項の規定に基づき、取締役会の決議によって中間配当をすることができる旨を定款に定めており、中間配当として1株当たり50円（普通配当40円、創立90周年記念配当10円）をお支払いいたしました。

第8次中期経営計画期間（5年間：2024年4月～2029年3月まで）の株主還元につきましては、配当と自己株式取得合計の株主還元率40%を目安に取り組んでまいります。

(注) 基準日が当事業年度に属する剰余金の配当は、以下のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額（百万円）	1株当たり配当額(円)
2023年11月10日 取締役会決議	2,374	50.00
2024年6月26日 定時株主総会決議(予定)	1,877	40.00

4 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

(1) 【コーポレート・ガバナンスの概要】

当行は財務及び事業の方針の決定を支配する者の在り方に関する基本方針を定めておりませんので、その内容等（会社法施行規則第118条第3号に掲げる事項）については記載しておりません。

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当行は、滋賀県に本拠を置く地方銀行として、伝統ある近江商人の「三方よし（売り手よし、買い手よし、世間よし）」の精神を継承した行是「自分にきびしく 人には親切 社会につくす」を活動の原点とし、経営理念に掲げる「地域社会」「役職員」「地球環境」との共存共栄に努め、当行の持続的な成長と中長期的な企業価値向上を図る観点から、次の基本的な考え方に基づきコーポレート・ガバナンスの充実及び不断の見直しを行っております。

（コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方）

- ・株主の権利を尊重し、平等性を確保する。
- ・ステークホルダーと適切に協働する。
- ・非財務情報を含めた情報の適切な開示と、意思決定の透明性、公正性を確保する。
- ・経営陣幹部による適切なリスクテイクを可能とするための環境整備を行う。
- ・持続的な成長と中長期的な企業価値向上に資するため、株主との対話を重視する。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

（企業統治体制の概要）

当行は監査役会制度を採用し、社外取締役を含む取締役会が経営を監督する機能を担い、社外監査役を含む監査役会が取締役会を牽制する体制としております。

業務運営上は、業務執行の意思決定機関である常務会を中心に、コンプライアンス委員会やALM委員会を設置し、さらに監査役がそれらの運営状況の監視を行っております。

（当該体制を採用する理由）

経営を監督する取締役会を監査役会が牽制する体制とすることで適正なコーポレート・ガバナンスを確保できるものと判断しております。

各機関の内容及び内部統制システムの整備の状況等

(A) 取締役会

取締役会は9名(有価証券報告書提出日現在、うち社外取締役3名)の取締役で構成され、監査役出席のもと、原則毎月1回開催し、当行の重要な業務執行を決定し、取締役の職務の執行を監督しております。

なお、以下の取締役会構成員のほか、監査役は取締役会に出席することを要する旨を定め、監督機能の強化を図っております。

(取締役会構成員の氏名等)

議長：取締役会長 高橋祥二郎

構成員：取締役頭取 久保田真也 ・ 専務取締役 西藤崇浩 ・ 常務取締役 堀内勝美
常務取締役 戸田秀和 ・ 常務取締役 遠藤良則 ・ 取締役 竹内美奈子（社外取締役）
取締役 服部力也（社外取締役） ・ 取締役 鎌田沢一郎（社外取締役）

2024年3月期の取締役会の活動状況は以下のとおりであります。

なお、2022年12月より討議事項を新設し、経営戦略や経営課題など重要テーマに関して、本質的かつ建設的な意見交換を行っております。

開催日	主な審議内容等	出席状況
2023年4月21日	(定例的な議案) ・重要な人事に関する事項 ・経営方針・経営計画に関する事項 ・決算等会社の計算に関する事項 ・従業員の賃金・賞与金に関する事項	全員出席
2023年5月12日		(同上)
2023年6月27日		(同上)
2023年7月28日		(同上)
2023年8月25日		(同上)
2023年9月28日	(今年度の特記すべき議案) ・パーパスの制定、理念体系に関する事項 ・第8次中期経営計画の策定に関する事項 ・子会社の設立に関する事項 ・Flexusプロジェクトに関する事項	(同上)
2023年10月20日		(同上)
2023年11月10日		(同上)
2023年12月15日		(同上)
2024年1月26日		(同上)
2024年2月22日	(討議事項) ・ブランディングの件 ・適正な自己資本の件 ・戦略的RAFの件 ・株主還元方針の件	(同上)
2024年3月22日		(同上)

(B) 監査役会

監査役会は、監査役4名(有価証券報告書提出日現在、うち社外監査役2名)で構成され、監査役会を原則毎月1回開催し、監査の方針、監査計画、監査の方法、監査業務の分担の策定など、監査に関する重要事項の決議、協議、報告等を行っております。

(監査役会構成員の氏名等)

議長：監査役(常勤) 大野恭永

構成員：監査役(常勤) 杉江秀樹

監査役(非常勤) 松井保仁(社外監査役)・監査役(非常勤) 大西一清(社外監査役)

2024年3月期の監査役会の活動状況は以下のとおりであります。

なお、監査役監査の状況については「(3) 監査の状況 監査役監査の状況」に記載しております。

開催日	主な審議内容等	出席状況
2023年4月21日	(定例的な議案) ・監査役の監査計画策定に関する事項 ・常務会・内部監査報告会等の重要な会議内容 ・会計監査人の職務執行状況(KAMを含む) ・会計監査人の選解任に関する事項 ・監査役の監査報告に関する事項 ・監査役の頭取への報告・提言に関する事項	全員出席
2023年5月11日		(同上)
2023年6月27日		(同上)
2023年7月28日		(同上)
2023年8月25日		(同上)
2023年9月28日	(今年度の特記すべき議案) ・Flexusプロジェクトに関する事項 ・信用リスク(与信コスト)の管理状況 ・運用の多様化にともなうリスク管理状況 ・グループガバナンス、連結子会社の管理状況 ・内部通報制度の運用状況 ・不祥事件再発防止策の運用状況	(同上)
2023年10月20日		(同上)
2023年11月10日		(同上)
2023年12月15日		(同上)
2024年1月26日		(同上)
2024年2月22日		(同上)
2024年3月22日		(同上)

(C) 指名・報酬委員会

指名・報酬委員会は、取締役会長・取締役頭取・社外取締役により構成（過半数は社外取締役）され、指名・報酬に関する事項について、取締役会の諮問に応じて審議し、取締役会に対して助言・提言を行っております。

(指名・報酬委員会構成員の氏名等)

議長：取締役頭取 久保田真也

構成員：取締役会長 高橋祥二郎 ・ 取締役 竹内美奈子（社外取締役） ・ 取締役 服部力也（社外取締役）
取締役 鎌田沢一郎（社外取締役）

2024年3月期の指名・報酬委員会の活動状況は以下のとおりであります。

開催日	主な審議内容等	出席状況
2023年4月20日	(指名に関する事項) ・ 取締役・役付取締役・代表取締役候補者の審議 ・ 監査役・補欠監査役候補者の審議 ・ 他社社外取締役兼任の審議 ・ 後継者要件、取締役スキルシートの審議 ・ スキル補完策の審議 ・ 後継者(経営人材)計画の審議	全員出席
2023年5月11日		(同上)
2023年6月26日		(同上)
2023年8月25日		(同上)
2023年10月20日		(同上)
2023年11月9日		(同上)
2024年2月21日		(報酬に関する事項) ・ 取締役報酬の審議
2024年3月21日		(同上)

(D) 常務会

常務会は、取締役会長・取締役頭取・取締役副頭取（現在空席）・専務取締役・常務取締役から構成され、監査役出席のもと投資計画、新商品の開発、営業体制の強化、リスク状況の把握など、経営全般について迅速な意思決定を行うために、必要に応じて開催しております。

なお、重要な業務の執行については取締役会に上程しております。

(E) 内部監査体制

内部監査を実施する監査部は25名(2024年3月31日現在。出向者を除く)で構成され、監査対象部店の内部管理態勢の適切性・有効性を検証・評価しております。

なお、内部監査の状況については、「(3) 監査の状況 内部監査の状況」に記載しております。

(F) サステナビリティ委員会

サステナビリティ委員会は、取締役頭取を委員長とし、しがぎんグループのESG（環境、社会、ガバナンス）優先課題、社会的課題解決を中長期的な観点から議論し、地域社会、お取引先、当行グループのサステナビリティ（持続可能性）の向上を目指すための企画の検討を行っております。

(G) コンプライアンス委員会

コンプライアンス委員会は、専務取締役を委員長とし、参与として監査役を加え、誠実・公正な企業活動の遂行に資することを目的として、社会規範、法令及び当行内規の遵守に向け慎重な審議を行うとともに、諸問題に内在するリスクの縮減に向け、ルール・ベースにとらわれず、より高い視座をもって総合的な検討を行っております。

(H) ALM委員会

ALM委員会は、取締役頭取を委員長とし、ALM(資産と負債の総合管理)の対応とともに、リスク管理の充実によって安定した収益の向上に寄与することを目的としております。

リスク・アペタイト・フレームワークの考え方にに基づき、健全性と効率性の両面から資本・資金を最大限活用すべく運営しております。

(I) 会計監査人

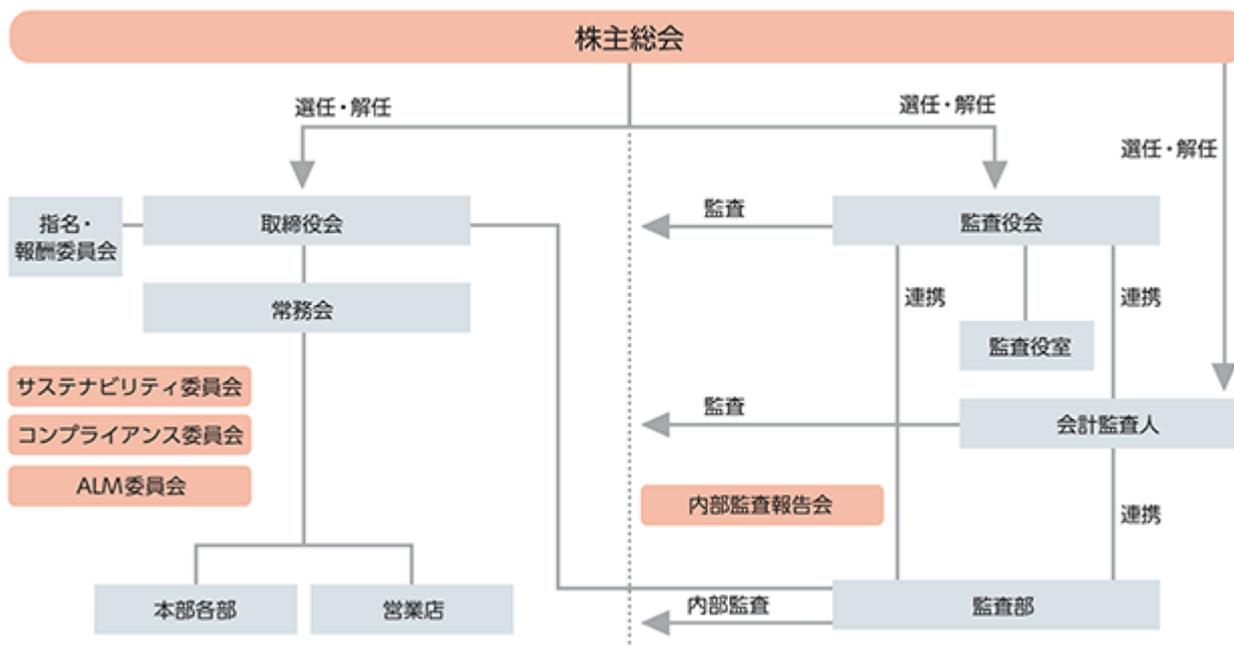
当行と監査契約を締結している有限責任監査法人トーマツが会計監査人として監査を実施しております。

(当行の会計監査業務を執行した公認会計士の氏名及び所属する監査法人名)

氏名	所属する監査法人
木村 充男	有限責任監査法人トーマツ
河越 弘昭	同上

なお、会計監査の状況については、「(3) 監査の状況 会計監査の状況」に記載しております。

(コーポレート・ガバナンス体制の概要)



(内部統制システムの整備の状況)

(a) 基本方針

当行は、滋賀県に本拠を置く地方銀行として、伝統ある近江商人の「三方よし(売り手よし、買い手よし、世間よし)」の精神を継承した行是「自分にきびしく 人には親切 社会につくす」を活動の原点とし、経営理念に掲げる「地域社会」「役職員」「地球環境」との共存共栄に努めております。

この考え方にに基づき、当行グループは、業務の適正を確保するための体制(内部統制システム)を次のとおり構築しております。また、変化する経営環境に適切に対応するため、適宜必要に応じて体制の見直しを行っております。

(b) 業務の適正を確保するための体制

ア. 当行及び子会社の取締役の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制並びに当行及び子会社の使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するための体制

- ・当行グループは、コンプライアンス体制の整備、並びに規程類の制定、使用人の教育訓練を行い、グループ全体としてのコンプライアンス体制を構築しております。
- ・当行の経営管理部はコンプライアンス統轄部署として、グループ会社のコンプライアンス体制の整備、規程類の制定、使用人の教育や訓練に、必要に応じ助言や指導を行っております。
- ・当行の総合企画部及び所管部はグループ会社における日常のコンプライアンス実施状況を把握し、必要に応じ助言や指導を行っております。
- ・当行の監査役及び監査部は、当行グループの健全かつ適正な業務運営に資することを目的に監査を実施しております。
- ・当行の取締役及び監査役は、必要に応じ当行の監査部との連携を確保しております。
- ・また、当行グループでは全ての役職員が利用できる「内部通報制度」を整備しております。
- ・当行グループは市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力等との関係を遮断し、断固として排除するための体制を整備しております。

イ. 当行の取締役の職務の執行に係る情報の保存及び管理に関する体制

- ・当行は取締役会、常務会、その他重要な諸会議の議事録やその他の経営上の重要な文書・情報の保存及び管理方法を「事務取扱要領」で定め、適切に管理しております。

ウ. 当行及び子会社の損失の危険の管理に関する規程その他の体制

- ・当行は基本規程である「リスク管理規程」を定め、これに基づいて主要なリスク毎に具体的な管理体制を構築するとともに、リスク管理の統轄部署を経営管理部と定め、統合的リスク管理を行っております。リスク管理に関する重要事項については取締役会に付議・報告する体制としております。
- ・グループ会社のリスク管理に関しては、当行の総合企画部がリスク管理規程に基づき、各リスク所管部と連携し、その保有するリスクに応じて適切に管理を行っております。
- ・当行の総合企画部はグループ会社からの報告、もしくは銀行のモニタリング等の結果に基づき、リスクの状況を適切に把握し、それが銀行の経営に重要な影響を与えると判断した場合は常務会及び必要に応じて取締役会に報告を行う体制を整備しております。

エ. 当行及び子会社の取締役の職務の執行が効率的に行われることを確保するための体制

- ・当行グループでは、取締役の職務執行を効率的に行うため、「取締役会規程」で取締役会での決議事項を明確に定めております。また、当行では取締役会の決定する事項の細目及び日常的な業務の決定を役付取締役で構成される常務会に委任しております。
- ・役付取締役については、担当業務を定めることで職務分担を行い、効率化を図っております。
- ・中期経営計画において連結での経営指標を掲げ、グループとしての効率化に努めております。

- オ.子会社の取締役の職務の執行に係る事項の当行への報告体制その他の当行及び子会社から成る企業集団における業務の適正を確保するための体制
- ・当行は当行グループにおける業務の適正を確保するため、当行グループを一体と考え、グループ全体が同等の水準で法令遵守やリスク管理等の内部管理体制を構築しております。
 - ・当行グループは「関連会社管理・運営規程」を定め、コンプライアンス、顧客保護、リスク管理等について、グループ横断的に統一された管理体制の構築を目指しております。
 - ・グループ会社の代表取締役は全部課店長会やサステナビリティ委員会等の重要な会議に出席しております。
 - ・当行の監査役及び監査部はグループ会社に対して定期的に業務監査を行っております。
 - ・グループ会社に対し、四半期ごとの財務・業績の概況並びに決算状況の他、当行が求めた場合には一定の事項を報告することを義務付けております。
- カ.当行の監査役がその職務を補助すべき使用人を置くことを求めた場合における当該使用人に関する事項、当該使用人の取締役からの独立性に関する事項及び当該使用人に対する監査役の指示の実効性の確保に関する事項
- ・当行は監査役職務を補助する業務執行取締役から独立した使用人を常設し、監査役職務を遂行するために十分な体制を構築しております。
 - ・監査役職務を補助すべき使用人の処遇については、監査役会と協議して行うものとしております。
 - ・監査役を補助する使用人は、監査役の指示に従い業務を遂行する方針を定めております。
- キ.当行の取締役及び使用人並びに子会社の取締役、監査役及び使用人(これらから報告を受けた者を含む)が当行監査役に報告をするための体制その他の監査役への報告に関する体制、及びその他監査役への報告が実効的に行われることを確保するための体制、当該報告をした者が報告をしたことを理由に不利な取扱いを受けないことを確保するための体制
- ・当行の監査役は当行グループの経営状態を十分に把握し、監査役としての業務執行の実効性を確保するため、各企業の主要な会議にも出席しております。
 - ・また、当行監査役は当行代表取締役と定期的な意見交換会を開催しております。
 - ・当行の監査部は経営に関する課題、重大なコンプライアンス上の問題や不正不祥事の実態等を、当行の監査役に報告しております。
 - ・グループ会社で作成する稟議書やその他の重要な報告は当行監査役にも回付するなど、監査役に報告するための体制を整備しております。
 - ・当行グループでは全ての役職員が利用できる内部通報制度を整備しており、通報内容は当行監査役に報告されます。なお、通報したことを理由に不利益な扱いを行うことは禁止されております。
- ク.当行監査役職務の執行について生ずる費用の前払又は償還の手続その他の当該職務の執行について生ずる費用又は債務の処理に係る方針に関する事項
- ・監査役がその職務の執行について会社法第388条に基づき費用の前払いの請求等をしたときは、その職務に必要でないと認める場合を除き、速やかに支払う方針を定めております。

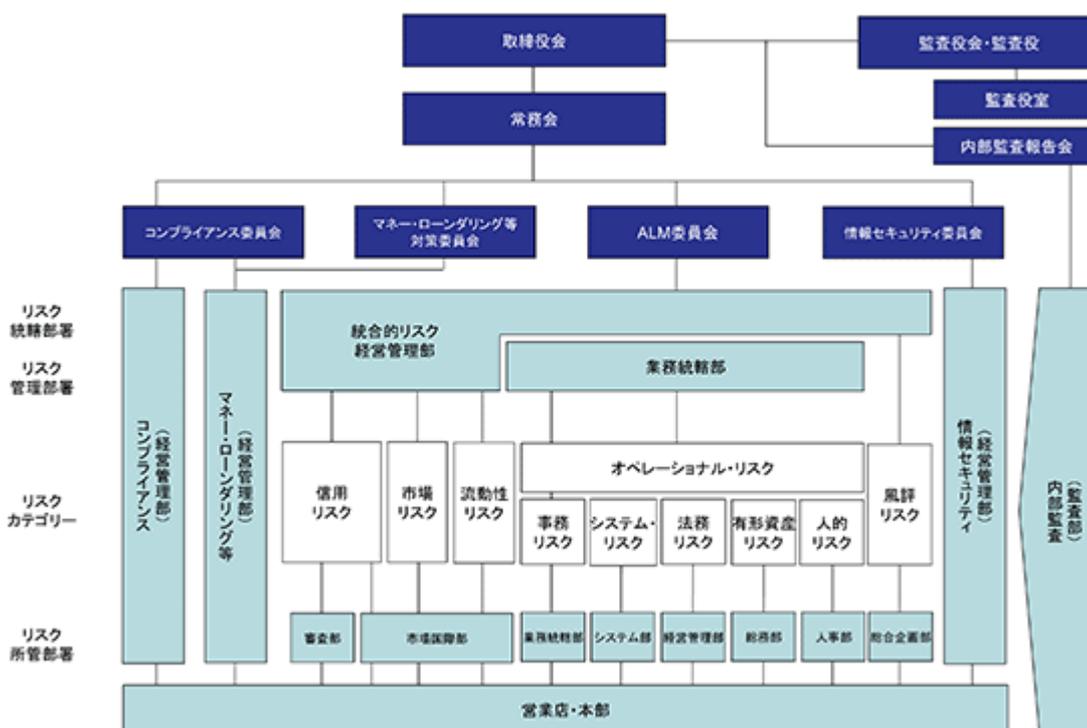
(リスク管理体制)

当行では、リスク管理を銀行の本質的な機能のひとつと位置付け、各種リスクを的確に把握・分析・評価し、適切に管理することが経営の健全性を維持し、収益性を向上するための最重要課題であると認識しております。

そのため、取締役会において「リスク管理規程」を定め、管理すべきリスクの種類を特定し、各リスク所管部の役割と責任を明確化するとともに、リスクの管理方法について規定しております。また、コンプライアンスやマネー・ローンダリング等のリスクについても、重要性が増していることから、別途委員会を設置するなど管理体制を強化しております。加えて、当行の戦略目標やリスクの状況に照らして、半期毎に「リスク管理方針」を取締役会で策定しております。

これらのリスク管理の状況等については、各委員会、常務会、取締役会へ報告するなど、適切な運営を行っております。

<リスク管理体制図>



さらに、当行では、取締役会において年度毎のコンプライアンス・プログラムを定め、コンプライアンス体制を計画的に整備することに努めております。

なお、当行におけるコンプライアンス体制の整備の状況は、次のとおりであります。

(コンプライアンス体制)

当行は経営理念に基づき「滋賀銀行の行動規範」を定めております。これらを遵守し、法令等遵守を徹底するために、専務取締役を委員長とするコンプライアンス委員会の審議を経て取締役会が年度毎に「コンプライアンス・プログラム」を定め、全部店での研修や不祥事件再発防止のためのモニタリングを実施するなど、職員の意識向上に努めております。

また、同プログラムの実施状況を経営管理部法務室でモニタリングし、コンプライアンス委員会・取締役会へ報告するなど、PDCAサイクルを継続的に実施しております。

なお、法令等違反を役職員の通報により早期に発見し、適切に問題を解決する仕組みとして、内部通報制度(コンプライアンスヘルプライン、ハラスメントホットライン)も整備しております。

今後も業務の適切な運営、社会的信頼の維持、確保に向けて、コンプライアンス体制の継続的整備を経営の最重要課題の一つと認識し、全力で取り組む所存であります。

企業統治に関するその他の事項

a. 取締役の員数

当行の取締役の員数は、15名以内とする旨を定款に定めております。

b. 取締役の選任の決議要件

当行の取締役の選任決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び累積投票によらない旨を定款に定めております。

c. 取締役会で決議できる株主総会決議事項

・自己株式の取得

当行は、経営環境の変化に対応した機動的な資本政策を可能とするため、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己株式を取得することができる旨を定款に定めております。

・中間配当

当行は、株主への機動的な利益還元を可能とするため、取締役会の決議によって、毎年9月30日を基準日として中間配当をすることができる旨を定款に定めております。

d. 株主総会の特別決議要件

当行は、会社法第309条第2項に定める決議は、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

e. 責任限定契約

当行は、社外役員として有用な人材を迎えることができるよう、現行定款において、当行と社外取締役及び社外監査役との間で、当行への損害賠償責任を一定の範囲に限定する契約を締結できる旨を定めております。

これに基づき、社外取締役である竹内美奈子、服部力也及び鎌田沢一郎並びに社外監査役である松井保仁及び大西一清の5名は、当行との間で、当該責任限定契約を締結しております。

その契約内容の概要は次のとおりであります。

(責任限定契約の内容)

社外取締役又は社外監査役が、善意でかつ重大な過失なくして銀行に対して会社法第423条第1項に定める損害賠償責任を負うときは、定款第29条又は第39条の規定の範囲内である1,000万円又は次の各号の金額の合計額のいずれか高い額をもって、賠償責任の限度額とする。

その在職中に銀行から職務執行の対価として受け、又は受けるべき財産上の利益の1年間当たりの額として会社法施行規則第113条で定める方法により算定される額に2を乗じて得た額。

銀行の新株予約権を引き受けた場合における当該新株予約権に関する財産上の利益に相当する額として会社法施行規則第114条で定める方法により算定される額。

f. 補償契約

該当事項はありません。

g. 役員等賠償責任保険契約

当行は、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約を保険会社との間で締結し、被保険者にその職務の執行に関する責任の追及に係る請求等がなされた場合に、当該被保険者が負担することになる損害賠償責任に基づく賠償金及び訴訟費用を補填することとしております。

当行取締役、監査役及び執行役員が、当該保険契約の被保険者であり、その保険料は当行が全額負担しております。なお、意図的に違法行為を行った被保険者の損害等は補償対象外としております。

(2) 【役員の状況】

役員一覧

(A) 2024年6月11日(有価証券報告書提出日)現在の当行の役員の状況は、以下のとおりであります。

男性12名 女性1名(役員のうち女性の比率7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長	高橋 祥二郎	1956年8月20日	1979年4月 当行入行 2006年6月 営業統轄部長 2008年6月 取締役営業統轄部長 2009年6月 取締役京都支店長 2011年6月 常務取締役 2014年6月 専務取締役 2015年6月 取締役副頭取 2016年4月 取締役頭取 2023年6月 取締役会長(現職)	2023年 6月か ら1年	29
取締役頭取 代表取締役	久保田 真也	1962年12月2日	1986年4月 当行入行 2015年6月 総合企画部長 2017年6月 取締役総合企画部長 2018年6月 常務取締役 2020年6月 専務取締役 2023年6月 取締役頭取(現職)	同上	13
専務取締役 代表取締役	西藤 崇浩	1961年2月16日	1983年4月 当行入行 2014年2月 審査部長 2014年6月 取締役審査部長 2017年6月 常務取締役 2023年6月 専務取締役(現職)	同上	14
常務取締役	堀内 勝美	1964年8月6日	1987年4月 当行入行 2014年6月 経営管理部長 2017年6月 執行役員営業統轄部長 2019年6月 取締役京都支店長 2021年6月 常務取締役市場国際部長 2022年2月 常務取締役(現職)	同上	7
常務取締役	戸田 秀和	1968年2月22日	1990年4月 当行入行 2020年6月 執行役員業務統轄部長 2021年6月 常務執行役員業務統轄部長 2023年6月 常務取締役(現職)	同上	1
常務取締役	遠藤 良則	1969年2月10日	1991年4月 当行入行 2019年6月 総務部長 2020年6月 執行役員総務部長 2021年6月 常務執行役員京都支店長 2023年6月 常務取締役(現職)	同上	3

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 非常勤	竹内 美奈子	1961年1月17日	1983年4月 日本電気株式会社入社 2002年12月 日本電気株式会社退職 2003年1月 スタントンチェイスインターナショナル株式会社入社 2013年6月 スタントンチェイスインターナショナル株式会社退職 2013年8月 株式会社T M Future代表取締役(現職) 2019年6月 当行社外取締役(現職) 2020年6月 株式会社日本M & Aセンター(現株式会社日本M & Aセンターホールディングス)社外取締役(現職) 2022年6月 三菱製鋼株式会社社外取締役(現職)	2023年 6月か ら1年	
取締役 非常勤	服部 力也	1954年2月3日	1978年4月 住友信託銀行株式会社(現三井住友信託銀行株式会社)入社 2012年4月 三井住友信託銀行株式会社取締役専務執行役員 2013年4月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社副社長執行役員 三井住友信託銀行株式会社取締役副社長 2015年6月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役副社長 2017年4月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役 三井住友信託銀行株式会社取締役副会長 2017年6月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役退任 2018年4月 三井住友信託銀行株式会社エグゼクティブアドバイザー 三井住友トラスト・パナソニックファイナンス株式会社取締役会長 2018年6月 住友電設株式会社社外監査役 2020年3月 三井住友信託銀行株式会社エグゼクティブアドバイザー退任 2020年6月 当行社外取締役(現職) 2021年2月 三井住友トラスト・パナソニックファイナンス株式会社取締役会長退任 2021年6月 住友電設株式会社社外監査役退任 2021年6月 住友電設株式会社社外取締役(現職)	同上	
取締役 非常勤	鎌田 沢一郎	1960年4月20日	1984年4月 日本銀行入行 2012年7月 日本銀行京都支店長 2015年6月 日本銀行退職 2015年7月 日本証券業協会政策本部参与 2017年7月 日本証券業協会管理本部共同本部長(最高情報責任者兼最高リスク管理責任者) 2021年6月 日本証券業協会退職 2021年6月 当行社外取締役(現職)	同上	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
常勤監査役	大野 恭 永	1961年 1月28日	1983年 4月 当行入行 2013年 6月 営業統轄部長 2014年 6月 取締役営業統轄部長 2015年 6月 常務取締役 2020年 6月 常勤監査役（現職）	2020年 6月か ら 4年	9
常勤監査役	杉 江 秀 樹	1961年 9月13日	1985年 4月 当行入行 2012年 6月 当行秘書室秘書役 2016年 6月 当行退職 2016年 6月 びわ湖放送株式会社常務取締役 2022年 3月 びわ湖放送株式会社常務取締役 退任 2022年 4月 当行審議役 2022年 6月 常勤監査役（現職）	2022年 6月か ら 4年	2
監査役 非常勤	松 井 保 仁	1975年 9月 3日	2000年 4月 弁護士登録 2000年 4月 烏丸法律事務所入所 2005年 1月 ニューヨーク州弁護士登録 2005年 4月 烏丸法律事務所退所 2005年 5月 弁護士法人三宅法律事務所入所 2009年 5月 弁護士法人三宅法律事務所社員 2012年 5月 弁理士登録 2017年 6月 当行社外監査役（現職） 2019年 1月 弁護士法人三宅法律事務所退所 2019年 2月 弁護士法人錦橋法律事務所社員 （現職）	2021年 6月か ら 4年	
監査役 非常勤	大 西 一 清	1957年 1月15日	1980年 4月 大蔵省（現財務省）入省 2014年 7月 財務省横浜税関長 2015年 7月 財務省退職 2015年10月 あいおいニッセイ同和損害保険株 式会社顧問 2016年 6月 あいおいニッセイ同和損害保険株 式会社顧問退任 2016年 6月 高砂香料工業株式会社常勤監査役 2020年 6月 高砂香料工業株式会社常勤監査役 退任 2020年 6月 当行社外監査役（現職）	2020年 6月か ら 4年	
計					82

(注) 1. 取締役竹内美奈子及び同服部力也並びに同鎌田沢一郎は、会社法第2条第15号に定める社外取締役、監査役松井保仁及び同大西一清は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。

2. 当行は執行役員制度を導入しております。2024年6月11日（有価証券報告書提出日）時点の執行役員は、以下のとおりであります。

- 田中 伸幸（現 常務執行役員監査部長）
- 井上 博喜（現 常務執行役員審査部長）
- 片岡 一明（現 常務執行役員京都支店長）
- 山元 磯和（現 常務執行役員本店営業部長）
- 中村 泰彦（現 執行役員市場国際部長）
- 高津 知仁（現 執行役員システム部長）
- 大嶋 英寿（現 執行役員東京支店長兼市場国際部参与）
- 松中 憲吾（現 執行役員経営管理部長）

(B) 2024年 6月26日開催予定の定時株主総会の議案(決議事項)として「取締役 9名選任の件」並びに「監査役 2名選任の件」を上程しており、当該議案が承認可決されますと、当行の役員の状況は、以下のとおりとなる予定であります。

男性12名 女性1名(役員のうち女性の比率7%)

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役会長	高橋 祥二郎	1956年 8月20日	1979年 4月 当行入行 2006年 6月 営業統轄部長 2008年 6月 取締役営業統轄部長 2009年 6月 取締役京都支店長 2011年 6月 常務取締役 2014年 6月 専務取締役 2015年 6月 取締役副頭取 2016年 4月 取締役頭取 2023年 6月 取締役会長(現職)	2024年 6月か ら 1年	29
取締役頭取 代表取締役	久保田 真也	1962年12月 2日	1986年 4月 当行入行 2015年 6月 総合企画部長 2017年 6月 取締役総合企画部長 2018年 6月 常務取締役 2020年 6月 専務取締役 2023年 6月 取締役頭取(現職)	同上	13
専務取締役 代表取締役	堀内 勝美	1964年 8月 6日	1987年 4月 当行入行 2014年 6月 経営管理部長 2017年 6月 執行役員営業統轄部長 2019年 6月 取締役京都支店長 2021年 6月 常務取締役市場国際部長 2022年 2月 常務取締役(現職) 2024年 6月 専務取締役(代表取締役)就任予定	同上	7
常務取締役	戸田 秀和	1968年 2月22日	1990年 4月 当行入行 2020年 6月 執行役員業務統轄部長 2021年 6月 常務執行役員業務統轄部長 2023年 6月 常務取締役(現職)	同上	1
常務取締役	遠藤 良則	1969年 2月10日	1991年 4月 当行入行 2019年 6月 総務部長 2020年 6月 執行役員総務部長 2021年 6月 常務執行役員京都支店長 2023年 6月 常務取締役(現職)	同上	3
常務取締役	田中 伸幸	1967年12月14日	1990年 4月 当行入行 2019年 6月 執行役員大阪支店長 2020年 6月 執行役員審査部長 2021年 6月 常務執行役員審査部長 2022年 6月 常務執行役員監査部長(現職) 2024年 6月 常務取締役就任予定	同上	3

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 非常勤	竹内 美奈子	1961年1月17日	1983年4月 日本電気株式会社入社 2002年12月 日本電気株式会社退職 2003年1月 スタントンチェイスインターナショナル株式会社入社 2013年6月 スタントンチェイスインターナショナル株式会社退職 2013年8月 株式会社T M Future代表取締役(現職) 2019年6月 当行社外取締役(現職) 2020年6月 株式会社日本M & Aセンター(現株式会社日本M & Aセンターホールディングス)社外取締役(現職) 2022年6月 三菱製鋼株式会社社外取締役(現職)	2024年 6月か ら1年	
取締役 非常勤	服部 力也	1954年2月3日	1978年4月 住友信託銀行株式会社(現三井住友信託銀行株式会社)入社 2012年4月 三井住友信託銀行株式会社取締役専務執行役員 2013年4月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社副社長執行役員 三井住友信託銀行株式会社取締役副社長 2015年6月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役副社長 2017年4月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役 三井住友信託銀行株式会社取締役副会長 2017年6月 三井住友トラスト・ホールディングス株式会社取締役退任 2018年4月 三井住友信託銀行株式会社エグゼクティブアドバイザー 三井住友トラスト・パナソニックファイナンス株式会社取締役会長 2018年6月 住友電設株式会社社外監査役 2020年3月 三井住友信託銀行株式会社エグゼクティブアドバイザー退任 2020年6月 当行社外取締役(現職) 2021年2月 三井住友トラスト・パナソニックファイナンス株式会社取締役会長退任 2021年6月 住友電設株式会社社外監査役退任 2021年6月 住友電設株式会社社外取締役(現職)	同上	
取締役 非常勤	鎌田 沢一郎	1960年4月20日	1984年4月 日本銀行入行 2012年7月 日本銀行京都支店長 2015年6月 日本銀行退職 2015年7月 日本証券業協会政策本部参与 2017年7月 日本証券業協会管理本部共同本部長(最高情報責任者兼最高リスク管理責任者) 2021年6月 日本証券業協会退職 2021年6月 当行社外取締役(現職)	同上	

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
常勤監査役	杉江 秀樹	1961年9月13日	1985年4月 当行入行 2012年6月 当行秘書室秘書役 2016年6月 当行退職 2016年6月 びわ湖放送株式会社常務取締役 2022年3月 びわ湖放送株式会社常務取締役 退任 2022年4月 当行審議役 2022年6月 常勤監査役(現職)	2022年 6月か ら4年	2
常勤監査役	肥田 明久	1968年10月11日	1991年4月 当行入行 2019年6月 営業統轄部長 2020年6月 執行役員総合企画部長 2021年6月 常務執行役員総合企画部長 2022年6月 上席理事総合企画部サステナブル戦略室長(現職) 2024年6月 常勤監査役就任予定	2024年 6月か ら4年	1
監査役 非常勤	松井 保仁	1975年9月3日	2000年4月 弁護士登録 2000年4月 烏丸法律事務所入所 2005年1月 ニューヨーク州弁護士登録 2005年4月 烏丸法律事務所退所 2005年5月 弁護士法人三宅法律事務所入所 2009年5月 弁護士法人三宅法律事務所社員 2012年5月 弁理士登録 2017年6月 当行社外監査役(現職) 2019年1月 弁護士法人三宅法律事務所退所 2019年2月 弁護士法人錦橋法律事務所社員 (現職)	2021年 6月か ら4年	
監査役 非常勤	大西 一清	1957年1月15日	1980年4月 大蔵省(現財務省)入省 2014年7月 財務省横浜税関長 2015年7月 財務省退職 2015年10月 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社顧問 2016年6月 あいおいニッセイ同和損害保険株式会社顧問退任 2016年6月 高砂香料工業株式会社常勤監査役 2020年6月 高砂香料工業株式会社常勤監査役 退任 2020年6月 当行社外監査役(現職)	2024年 6月か ら4年	
計					63

- (注) 1. 取締役竹内美奈子及び同服部力也並びに同鎌田沢一郎は、会社法第2条第15号に定める社外取締役、監査役松井保仁及び同大西一清は、会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。
2. 当行は執行役員制度を導入しております。2024年6月26日開催予定の定時株主総会終結後の執行役員は、以下のとおりとなる予定であります。
- 井上 博喜(現 常務執行役員審査部長)
 - 片岡 一明(現 常務執行役員京都支店長)
 - 山元 磯和(現 常務執行役員本店営業部長)
 - 大嶋 英寿(現 執行役員東京支店長兼市場国際部参与)
 - 松中 憲吾(現 執行役員経営管理部長)
 - 木澤 敬人(現 大阪支店長兼梅田支店長)
 - 福知 俊治(現 草津支店長)

社外役員の状況

(A) 社外取締役及び社外監査役の員数

当行は現在、社外取締役3名及び社外監査役2名を選任しております。

なお、社外取締役3名及び社外監査役2名を東京証券取引所の定めに基づく「独立役員」として指定し、同取引所に届け出ております。

(B) 社外取締役及び社外監査役と当行との人的関係、資本的关系又は取引関係その他の利害関係の概要

社外取締役竹内美奈子は、過去に当行又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当行のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。なお、同氏が社外取締役を務める株式会社日本M & Aセンターホールディングスの子会社である株式会社日本M & Aセンターと当行の間には通常の銀行取引及びM & A仲介関連の取引があります。また、同氏が社外取締役を務める三菱製鋼株式会社と当行の間には通常の銀行取引があります。2024年3月期における取引は、両社ともに当行の直近事業年度の連結業務粗利益の1%未満であり、当行の独立性判断基準(下記(6))に記載)を満たしております。なお、上記のほかに当行との間に特別の利害関係はありません。

社外取締役服部力也は、過去に当行又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当行のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。また、当行との間に特別の利害関係はありません。

社外取締役鎌田沢一郎は、過去に当行又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当行のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。また、当行との間に特別の利害関係はありません。

社外監査役松井保仁は、過去に当行又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当行のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。また、当行との間に特別の利害関係はありません。

社外監査役大西一清は、過去に当行又は子会社の業務執行取締役等となったことがなく、当行のその他の取締役、監査役と人的関係はありません。また、当行との間に特別の利害関係はありません。

(C) 社外取締役又は社外監査役が当行の企業統治において果たす機能及び役割、選任状況に関する考え方

専門分野の知識・経験を活かし、取締役会に対して有益なアドバイスを行うとともに、当行経営執行等の意思決定の妥当性・適法性について独立した立場から客観的・中立的に監督・監査を行うことができる人物を株主総会で選任しております。

(D) 社外取締役又は社外監査役を選任するための当行からの独立性に関する基準又は方針

社外取締役及び社外監査役の独立性は、次のいずれにも該当しないことを判断の基準としております。

(a) 当行グループ会社の業務執行者

(b) 当行を主要な取引先とする者(1)若しくはその業務執行者又は当行の主要な取引先(2)若しくはその業務執行者

(c) 当行から役員報酬以外に多額の金銭その他の財産を得ているコンサルタント、会計専門家又は法律専門家

(d) 最近において前記(a)から(c)までに該当していた者

(e) 前記(a)から(d)までのいずれかに掲げるもの(重要でない者を除く。)の近親者

(1) 当行より、当該取引先の直近事業年度の連結売上高の1%以上の支払いのある先

(2) 当行に対し、当行の直近事業年度の連結業務粗利益の1%以上の支払いのある先

社外取締役又は社外監査役による監督又は監査と内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部統制部門との関係

社外取締役及び社外監査役は、すべての取締役会に出席しているほか、社外監査役はすべての監査役会にも出席しこれらの事項について把握しております。

社外取締役による経営監督機能が十分に発揮されるよう、職務遂行に必要な情報提供及び支援を適時、適切に提供しております。取締役会での審議の充実に向け取締役会資料の事前配布・事前説明を実施するなど、当行の経営戦略や活動に対する理解を深める機会を継続的に提供しております。また、定期的に常勤監査役との意見交換、情報交換を実施しております。

社外監査役は、常勤監査役から業務監査の状況、重要会議の内容、閲覧した重要書類等の概要などの報告を受けるなど常勤監査役と十分な意思疎通を図って連携するとともに、内部統制部門や会計監査人から各種報告を受けております。

また、監査役会での議論をふまえたうえで取締役会に出席し、監査の実効性を高めております。なお、監査役による監査等の業務や監査役会の運営を円滑に行うため、業務執行者から独立した監査役室を設置し、監査役室長がこれらの役割を担い、監査役への迅速な報告、連絡及び緊密な連携を行っております。取締役からの独立性を確保するため、監査役室長の人事異動については監査役の同意を得ることとしております。

(3) 【監査の状況】

監査役監査の状況

監査役は常勤監査役2名、非常勤の社外監査役2名の合計4名（有価証券報告書提出日現在）であります。

常勤監査役である大野恭永は取締役として銀行の経営に携わった経験を有し、取締役の職務執行の監査を的確、公正かつ効率的に遂行するための知識を有しております。また、銀行の融資業務や経営管理を通じて、財務・会計に関する相当程度の知見を有しております。

常勤監査役である杉江秀樹は、当行の支店長や民間企業の経営に携わった経験を有し、取締役の職務執行の監査を的確、公正かつ効率的に遂行するための知識を有しております。また銀行の融資業務や経営管理を通じて、財務・会計に関する相当程度の知見を有しております。

非常勤の社外監査役である松井保仁は弁護士資格を有し、法務等に関する専門的な知見を有しております。

非常勤の社外監査役である大西一清は財務省（旧大蔵省）において財政や税務行政に携わった経験等により、財務・会計に関する相当程度の知見を有しております。

当行は監査役会を原則として毎月1回開催し、監査役会規程・監査役監査基準に基づき、監査方針、監査方法、監査計画、職務分担等の決議を行い、各監査役は、監査方針、監査計画等に従い、取締役の職務執行状況、内部統制システムの整備・運用状況等について監査を実施しております。

常勤監査役は、取締役会、常務会、取締役頭取との意見交換会、内部監査報告会、ALM委員会、コンプライアンス委員会、サステナビリティ委員会等の重要な会議へ出席し、業務の執行状況を把握し、必要に応じて意見を述べるほか、重要書類の閲覧、営業店への往査、本部各部へのヒアリング等を通して、客観的・合理的な監査を実施しております。また、内部監査部門、会計監査人とも定期的かつ必要に応じて、意見交換・情報交換を実施し、監査の実効性を高めております。なお、監査上の主要な検討事項（KAM：Key Audit Matters）として認識された貸倒引当金算定及びその他のKAM候補について、担当部門及び会計監査人より随時、検討状況について報告を受け、意見交換を行っております。

非常勤の社外監査役は、取締役会、取締役頭取との意見交換会、会計監査人の決算監査報告会等に出席するほか、常勤監査役と十分に意思疎通を図って連携し、内部統制部門からの各種報告を受け、監査役会での十分な議論を踏まえて監査を行っております。

基幹系システムプロジェクトについては、引き続きプロジェクトの進捗を監査してまいります。

常勤監査役は、各々連結子会社の非常勤監査役を兼務し、取締役会への出席、往査、会計監査等を通じて子会社の監査を行っております。

なお、監査役による監査等の業務や監査役会の運営を円滑に行うため、業務執行者から独立した監査役室を設置し、監査役室長がこれらの役割を担い、監査役への迅速な報告、連絡及び緊密な連携を行っております。取締役からの独立性を確保するため、監査役室長の人事異動等については監査役の同意を得ることとしております。

当事業年度において当行は監査役会を12回開催しており、個々の監査役の出席状況は下表のとおりであります。

(監査役会への出席状況)

氏名	役職名	任期	開催回数	出席回数
大野 恭永	監査役（常勤）	2020年6月から4年	12回	12回
杉江 秀樹	監査役（常勤）	2022年6月から4年	12回	12回
松井 保仁	監査役（非常勤）	2021年6月から4年	12回	12回
大西 一清	監査役（非常勤）	2020年6月から4年	12回	12回

（注）監査役（非常勤）松井保仁、同大西一清は会社法第2条第16号に定める社外監査役であります。

内部監査の状況

内部監査を実施する監査部は25名(2024年3月31日現在。出向者を除く)、うち内部監査に関する資格保有者は公認内部監査人(CIA)3名、公認情報システム監査人(CISA)2名、公認不正検査士(CFE)1名、金融内部監査人11名、金融内部監査士1名であります。

当行の健全かつ適切な業務運営の遂行を目的として、毎年取締役会が承認した「年度内部監査計画」に基づき、監査対象部店の内部管理体制の適切性の確保に努めており、監査結果や指摘事項等を取締役会へ報告しております。また、監査役会は必要に応じて内部監査部門等に報告を求めることとしております。

さらに、原則毎月1回、取締役頭取(代表取締役)、監査役を含む経営陣が出席する内部監査報告会を実施し、監査結果の報告及び監査対象部店の実態、問題点、課題についての詳細な検討を行い、当行のリスクの軽減、事務の堅確化、業務運営の適切性の確保に努めております。

また、三様監査(監査役、会計監査人、監査部)間での情報交換・連携、並びに社外取締役・社外監査役との連携を行い、リスク認識の共有化を図っております。

内部監査の実効性を確保するための取り組みとして、監査役への直接のレポートライン確保の規程化、並びに監査部の独立性を一層高めるための監査役のチェック機能について明文化しております。

内部監査の品質保持・高度化につきましては、継続的な内部品質評価に加えて、第三者機関による外部品質評価を5年毎に受けることにより、自らの品質改善に努めております。

会計監査の状況

a. 監査法人の名称

有限責任監査法人トーマツ

b. 継続監査期間

17年

c. 業務を執行した公認会計士

木村 充男

河越 弘昭

d. 監査業務に係る補助者の構成

当行の会計監査業務における補助者は、公認会計士9名、公認会計士試験合格者等8名、その他(税務専門家、IT専門家等)15名であります。

e. 監査法人の選定方針と理由

当行は適切な会計監査が実施されるよう、主として以下の項目について検討し、有限責任監査法人トーマツを監査公認会計士等に選定しております。

1. 監査法人の品質管理体制が適切であり、独立性に問題がないこと。
2. 監査計画、監査チームの編成、社員ローテーション等の監査の実施体制に問題がないこと。

f. 監査役及び監査役会による監査法人の評価

当行の監査役及び監査役会は監査法人の評価を行っており、有限責任監査法人トーマツについて、会計監査人の適格性・独立性を害する事由等の発生はなく、適正な監査の遂行が可能であると評価しております。

監査報酬の内容等

a. 監査公認会計士等に対する報酬

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社	68	6	68	
連結子会社	6		6	
計	74	6	74	

(注) 前連結会計年度において、上表の提出会社の監査証明業務に基づく報酬のほか、前々連結会計年度の提出会社の監査証明業務に基づく追加報酬として3百万円を支出しております。

当連結会計年度において、上表の提出会社の監査証明業務に基づく報酬のほか、前連結会計年度の提出会社の監査証明業務に基づく追加報酬として2百万円を支出しております。

(監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容)

前連結会計年度・・・自己資本比率算定プロセスの助言・指導業務及びTCFD対応にかかる助言・指導業務であります。

当連結会計年度・・・該当事項はありません。

b. 監査公認会計士等と同一のネットワーク(デロイトグループ)に対する報酬(a.を除く)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)	監査証明業務に基づく報酬(百万円)	非監査業務に基づく報酬(百万円)
提出会社		11		5
連結子会社				
計		11		5

(監査公認会計士等と同一のネットワーク(デロイトグループ)の提出会社に対する非監査業務の内容)

前連結会計年度・・・責任銀行原則にかかる保証業務に関する助言業務、FATCA報告に関する助言・指導業務及び香港支店における気候変動当局報告にかかる助言・指導業務等であります。

当連結会計年度・・・責任銀行原則にかかる保証業務及びFATCA報告に関する助言・指導業務であります。

c. その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

d. 監査報酬の決定方針

当行の監査公認会計士等に対する監査報酬については、会計監査人から提出された監査計画の妥当性を検証のうえ、当該計画に示された監査時間等から監査報酬が合理的であると判断したうえで決定することとしております。

e. 監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当行監査役会は、会計監査人の監査計画の内容、会計監査の職務遂行状況及び報酬見積り等の算定根拠等が適切であるかどうかについて必要な検証を行い、当該検証結果を踏まえて、報酬等の額が合理的であると判断し、報酬等の額について同意いたしました。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針

(A) 基本方針

当行の役員報酬制度は企業価値の持続的な向上を図るインセンティブとして機能する体系とし、指名・報酬委員会の答申を踏まえ、個々の報酬の決定に際しては各職責を踏まえた適正水準とすることを基本方針としております。

具体的には、取締役（社外取締役除く）の報酬は、基本報酬である「確定金額報酬」、業績連動報酬等である「業績連動型報酬」、非金銭報酬等である「譲渡制限付株式に関する報酬」より構成しております。

経営監督機能を担う社外取締役、監査役の報酬は基本報酬である確定金額報酬のみとしております。

また、監査役に対する確定金額報酬は支給実績等を基準として監査役の協議により決定しております。

なお、上記の基本方針は指名・報酬委員会や社外監査役から意見を聴取して策定し、取締役会決議で決定いたしました。

(B) 決定方針

a. 確定金額報酬（基本報酬）

役位を基準として役割や責任に応じて支給する報酬であり、取締役に対する確定金額報酬は支給実績、業績指標等を基準として、取締役会決議により決定しております。

b. 業績連動型報酬（業績連動報酬等）

業績向上へのインセンティブを高めるため、親会社株主に帰属する当期純利益の実績に応じて支給する報酬であり、その配分は役位に基づき取締役会決議により決定しております。

c. 譲渡制限付株式に関する報酬（非金銭報酬等）

中長期的な企業価値向上と株価上昇へのインセンティブを高めるため、役位を基準として譲渡制限付株式を割り当てて支給する報酬であり、取締役会決議により決定しております。

(C) 業績連動報酬等の業績指標の内容及び業績連動報酬等の額の算定方法の決定方針

当行は役員報酬の一部として業績連動型報酬を採用しております。

業績連動型報酬を決定する指標としては、当行グループ業績の最終結果を表す業績指標であることから、「親会社株主に帰属する当期純利益」を採用しております。

業績連動型報酬の額は親会社株主に帰属する当期純利益の0.45%以内（上限7,500万円）とし、その配分については、役位に基づき取締役会決議により決定しております。

(D) 非金銭報酬等の内容及び非金銭報酬等の額もしくは数又はその算定方法の決定方針

当行は役員報酬の一部として譲渡制限付株式に関する報酬を採用しております。

これは在任期間中から株価変動のメリットとリスクを株主の皆さまと共有し、中長期的な企業価値向上と株価上昇への貢献意欲をより高めるため譲渡制限付株式を割り当てるものであります。

個々の割り当て数については、役位を基準として取締役会決議により決定しております。

(E) 報酬等の種類ごとの割合の決定方針

役員区分ごとの報酬等の割合は次のとおりであります。

役員区分	確定金額報酬 (基本報酬)	業績連動型報酬 (業績連動報酬等)	譲渡制限付株式に 関する報酬 (非金銭報酬等)	合計	対象 役員 員数
取締役 (社外取締役を除く)	60%～95%	0%～25%	5%～15%	100%	6人
社外取締役	100%			100%	3人
監査役	100%			100%	4人

(注) 確定金額報酬及び業績連動型報酬は金銭報酬、譲渡制限付株式に関する報酬は非金銭報酬であります。

(F) 報酬等を与える時期又は条件の決定方針

- ・確定金額報酬(基本報酬)
月例の固定金銭報酬として支給しております。
- ・業績連動型報酬(業績連動報酬等)
定時株主総会后に毎年1回金銭報酬として支給しております。
- ・譲渡制限付株式に関する報酬(非金銭報酬等)
毎年6月の取締役会で発行を決議し、翌月の一定の日に譲渡制限付株式を割り当て支給しております。

(G) 決定の全部又は一部の第三者への委任に関する事項

該当事項はありません。

(H) 第三者への委任以外の決定方法

該当事項はありません。

(I) その他重要な事項

当行では、2021年12月に指名・報酬委員会を設置し、取締役会からの諮問事項に対し、適宜、審議・答申をしております。

取締役の個人別の報酬等の内容が方針に沿うものであると取締役会が判断した理由

取締役の個人別の報酬等は、基本方針・決定方針との整合性を確認のうえ取締役会で決定しているため、その内容は方針に沿ったものであると判断しております。

なお、社外取締役、監査役の報酬は経営監督機能を重視するため、確定金額報酬のみで構成されており、各監査役の報酬は監査役の協議により決定しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数
当事業年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

役員区分	員数 (人)	報酬等の 総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額		
			確定金額報酬 (基本報酬)	業績連動型報酬 (業績連動報酬等)	譲渡制限付株式に 関する報酬 (非金銭報酬等)
取締役(社外取締役除く)	7	171	133	18	19
監査役(社外監査役除く)	2	43	43		
社外役員 (社外取締役・社外監査役)	5	32	32		

- (注) 1. 連結報酬等の総額が1億円以上である者は存在いたしません。
2. 業績連動報酬等についての内容は「 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針(C)業績連動報酬等の業績指標の内容及び業績連動報酬等の額の算定方法の決定方針」に記載しております。なお、前連結会計年度の親会社株主に帰属する当期純利益の実績は14,858百万円であります。
3. 非金銭報酬等は、譲渡制限付株式に関する報酬に基づく費用計上額19百万円であります。
4. 基本報酬、業績連動報酬等及び非金銭報酬等の決定方針等については「 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針(B)決定方針」に記載しております。
5. 取締役が使用人を兼ねている場合における使用人としての報酬等はありません。

株主総会決議に関する事項

取締役及び監査役の報酬等についての株主総会決議の内容は次のとおりであります。

取締役の確定金額報酬

年 額：2億6,000万円以内、うち社外取締役に対して3,500万円以内

決議日：2020年6月25日

決議時の員数：取締役9名、うち社外取締役3名

取締役(社外取締役を除く)の業績連動型報酬

年 額：当該事業年度にかかる親会社株主に帰属する当期純利益の0.45%以内、上限7,500万円

決議日：2020年6月25日

決議時の員数：取締役6名

監査役の確定金額報酬

年 額：8,400万円以内

決議日：2020年6月25日

決議時の員数：監査役4名

取締役(社外取締役を除く)の譲渡制限付株式に関する報酬

年 額：1億円以内

決議日：2022年6月24日

決議時の員数：取締役5名

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当行は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式について以下のように区分しております。

(純投資目的である投資株式)

専ら株式の価値の変動又は株式の配当によって利益を得ることを目的とする。

なお、純投資目的以外の目的である投資株式の保有目的を純投資目的に変更した場合は、上記保有目的を踏まえて、売却、追加購入、継続保有を状況に応じて判断しております。

(純投資目的以外の目的である投資株式)

株式の価値の変動又は株式の配当によって利益を得るほか、当該企業、その関連企業及び従業員等との総合的な取引拡大や地域経済の持続的発展等を主たる目的とする。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

a．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

(保有方針)

経済合理性及び地域経済との関連性並びに当行の資本政策上の観点から総合的に判断し、縮減に努めてまいります。

(保有の合理性を検証する方法)

経済合理性の検証は、取引先毎にリスクベースの資本収益率を算出し、ROE(5%)を基準として実施しております。

基準に満たない銘柄については、採算性の向上を目指しますが、改善が見られないものについては売却を検討いたします。

(保有の適否に関する取締役会等における検証の内容)

銘柄毎にリスク・リターンを分析し取締役会へ報告しております。(直近報告：2023年12月)

b．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
上場株式	84	228,823
非上場株式	97	9,419

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
上場株式			
非上場株式	3	1,528	取引安定強化のため

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
上場株式	5	10,730
非上場株式	3	29

c. 特定投資株式及びみなし保有株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

(特定投資株式)

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果(注1)及び 株式数が増加した理由	当行の株式の保有の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社村田製作所	19,959	7,653	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため。なお、同社の株式数は株式分割により増加しております。	有
	56,365	61,531		
ニデック株式会社	8,821	8,821	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	54,078	60,385		
株式会社SCREENホールディングス	1,696	848	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため。なお、同社の株式数は株式分割により増加しております。	有
	33,874	9,883		
株式会社島津製作所	3,634	3,884	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	15,375	16,082		
ダイキン工業株式会社	351	351	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	7,230	8,302		
日本電気硝子株式会社	1,617	1,617	滋賀県内に本社ならびに工場を有し、雇用創出力も高く、地域経済の成長・活性化に貢献しており、同社との関係を維持・強化することが、地域経済の更なる発展、当行の企業価値向上につながるため	有
	6,264	4,123		
株式会社ワコールホールディングス	1,569	1,751	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無(注4)
	5,828	4,355		
株式会社平和堂	2,500	2,500	滋賀県内の中核企業であり、雇用創出力も高く、地域経済の成長・活性化に貢献しており、同社との関係を維持・強化することが、地域経済の更なる発展、当行の企業価値向上につながるため	有
	5,085	5,087		
SOMPOホールディングス株式会社	379	379	損害保険業務を中心とした業務上の連携、協力関係を通じ当行の金融サービスの向上を図ることで、当行の中長期的な企業価値向上につながるため	無(注5)
	3,631	1,993		
株式会社ダイフク	902	902	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため。	有
	3,236	2,205		
セイノーホールディングス株式会社	1,528	1,528	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	3,231	2,231		
株式会社ニコン	1,916	1,916	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	2,934	2,596		
株式会社ジーエス・ユアサコーポレーション	844	844	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無(注6)
	2,658	2,012		
京阪ホールディングス株式会社	578	578	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,964	2,000		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果（注1）及び 株式数が増加した理由	当行の株 式の保有 の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社タクマ	1,008	1,008	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	1,920	1,338		
フジテック株式会社	483	483	滋賀県内に本社ならびに工場を有し、雇用創出力も高く、地域経済の成長・活性化に貢献しており、同社との関係を維持・強化することが、地域経済の更なる発展、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,832	1,586		
株式会社松風	602	602	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,769	1,222		
宝ホールディングス株式会社	1,500	1,500	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,605	1,533		
関西電力株式会社	655	655	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,438	846		
日本精工株式会社	1,367	1,367	滋賀県内に工場を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,208	1,033		
株式会社モリタホールディングス	723	723	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	1,183	961		
株式会社中央倉庫	820	820	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	941	888		
株式会社ツムラ	237	474	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	906	1,246		
東レ株式会社	1,206	1,206	滋賀県内に工場を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	892	912		
株式会社南都銀行	233	233	営業基盤の異なる地方銀行として、金融業務を中心とした協力関係の維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	715	542		
株式会社テクノスマート	321	321	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	659	513		
太平洋工業株式会社	363	363	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	621	419		
東海カーボン株式会社	584	584	滋賀県内に工場を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	582	736		
株式会社百五銀行	792	792	営業基盤の異なる地方銀行として、金融業務を中心とした協力関係の維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	514	293		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果（注1）及び 株式数が増加した理由	当行の株 式の保有 の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
第一工業製薬株式会社	140	140	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	513	263		
長瀬産業株式会社	193	193	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	495	394		
株式会社たけびし	237	237	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	484	412		
株式会社大和証券グループ本社	407	407	証券業務取引や投融資に係る情報提供など協力関係の維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	469	253		
ダイハツディーゼル株式会社	300	300	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	451	162		
知多鋼業株式会社	410	410	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	414	289		
株式会社メタルアート	100	100	滋賀県内に本社ならびに工場を有し、雇用創出力も高く、地域経済の成長・活性化に貢献しており、同社との関係を維持・強化することが、地域経済の更なる発展、当行の企業価値向上につながるため	有
	382	286		
イオン株式会社	105	105	滋賀県内に営業店舗を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	377	269		
西日本旅客鉄道株式会社	60	60	地域経済活性化等への貢献度合いが大きく、持続可能な農業の普及と地域農業の発展を通じた地域活性化に向けた業務提携による関係を維持・強化することが、当行の企業価値向上につながるため	無
	376	327		
サムコ株式会社	72	72	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無
	357	365		
DOWAホールディングス株式会社	67	67	滋賀県内に工場を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	357	284		
株式会社ダイヘン	37	37	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	352	168		
株式会社マネーフォワード	50	50	各種協力関係の維持・連携強化等を目的とした経営戦略上の保有であり、当行の企業価値向上につながるため	無
	334	228		
電源開発株式会社	121	121	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	無
	304	259		
株式会社アルバック	30	30	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	無
	295	172		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果（注1）及び 株式数が増加した理由	当行の株 式の保有 の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社栗本鉄 工所	66	66	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	272	136		
株式会社システ ムディ	200	200	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	262	278		
株式会社オー ケーエム	158	158	滋賀県内に本社ならびに工場を有し、雇用創出力も高く、地域経済の成長・活性化に貢献しており、同社との関係を維持・強化することが、地域経済の更なる発展、当行の企業価値向上につながるため	有
	250	189		
上新電機株式会 社	105	105	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	244	205		
星和電機株式会 社	420	420	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	238	198		
中外炉工業株式 会社	64	64	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	200	119		
日本カーボン株 式会社	30	30	滋賀県内に工場を有し、地域の産業・雇用創出に貢献しており、銀行取引を通じて同社の成長に貢献することが地域経済の発展に寄与し、当行の企業価値向上につながるため	有
	163	125		
日本毛織株式会 社	100	*	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無
	147	*		
ダイニツク株式 会社	192	192	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	146	145		
京都機械工具株 式会社	50	*	当行の営業地域である京都府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無
	140	*		
帝人株式会社	96	96	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	有
	136	134		
丸文株式会社	87	87	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	134	119		
D I C 株式会社	45	*	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	131	*		
三重交通グルー プホールディン グス株式会社	206	206	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	無（注7）
	129	115		
株式会社ニイタ カ	57	57	当行の営業地域である大阪府に本社があり、地域経済の発展に貢献しており、銀行取引関係の維持・強化を図ることが、当行の企業価値向上につながるため	無
	114	122		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果（注1）及び 株式数が増加した理由	当行の株 式の保有 の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社紀陽銀行	61	*	営業基盤の異なる地方銀行として、金融業務を中心とした協力関係の維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	114	*		
株式会社安永	*	120	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	*	123		
株式会社ツカモトコーポレーション	*	78	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
	*	117		
科研製薬株式会社		384	保有に関する経済合理性を有し、業界内の有力企業である同社との関係維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
		1,421		
株式会社大垣共立銀行		76	営業基盤の異なる地方銀行として、金融業務を中心とした協力関係の維持・向上を図ることが当行の中長期的な企業価値向上につながるため	有
		136		

- (注) 1. 定量的な保有効果については守秘義務等の観点より個別の取引条件を開示できないため記載が困難であります。
2. 保有の合理性については a に記載のとおり銘柄毎のリスク・リターン分析等により検証し、取締役会に報告しております。
3. 「-」は、当該銘柄を保有していないことを示しております。「*」は、当該銘柄の貸借対照表計上額が当行の資本金額の100分の1以下であり、かつ、貸借対照表計上額の大きい順の60銘柄に該当しないために記載を省略していることを示しております。
4. 株式会社ワコールホールディングスは当行株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社ワコールは当行株式を保有しております。
5. S O M P Oホールディングス株式会社は当行株式を保有しておりませんが、同社子会社である損害保険ジャパン株式会社は当行株式を保有しております。
6. 株式会社ジーエス・ユアサコーポレーションは当行株式を保有しておりませんが、同社子会社である株式会社GSユアサは当行株式を保有しております。
7. 三重交通グループホールディングス株式会社は当行株式を保有しておりませんが、同社子会社である三重交通株式会社は当行株式を保有しております。

(みなし保有株式)

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、業務提携等の概要、 定量的な保有効果（注2） 及び株式数が増加した理由	当行の株 式の保有 の有無
	株式数(千株)	株式数(千株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
株式会社村田製作所	5,850	1,950	議決権行使の指図 なお、同社の株式数は株式分割により増加しております。	有
	16,520	15,678		
ダイキン工業株式会社	500	500	議決権行使の指図	有
	10,300	11,827		
株式会社ニコン	500	500	議決権行使の指図	有
	765	677		
宝ホールディングス株式会社	500	500	議決権行使の指図	有
	535	511		
日本電気株式会社	30	30	議決権行使の指図	無
	329	153		

- (注) 1. 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算しておりません。
2. 定量的な保有効果については守秘義務等の観点より個別の取引条件を開示できないため記載が困難であります。
3. 保有の合理性については a に記載のとおり銘柄毎のリスク・リターン分析等により検証し、取締役会に報告しております。

保有目的が純投資目的である投資株式

区分	当事業年度		前事業年度	
	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計 上額の合計額 (百万円)
上場株式	54	110,420	51	73,155
非上場株式	2	69	2	69

区分	当事業年度		
	受取配当金の 合計額(百万円)	売却損益の 合計額(百万円)	評価損益の 合計額(百万円)
上場株式	2,749	3,344	45,373
非上場株式			

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的から純投資目的以外の目的に変更したものの
該当事項はありません。

当事業年度中に投資株式の保有目的を純投資目的以外の目的から純投資目的に変更したものの

銘柄	株式数(千株)	貸借対照表計上額(百万円)
科研製薬株式会社	384	1,330
株式会社東京きらぼしフィナン シャルグループ	37	180
株式会社東邦銀行	484	174
株式会社大垣共立銀行	76	166
株式会社清水銀行	43	69

第5 【経理の状況】

- 1 当行の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和51年大蔵省令第28号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 2 当行の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」(昭和38年大蔵省令第59号)に基づいて作成しておりますが、資産及び負債の分類並びに収益及び費用の分類は、「銀行法施行規則」(昭和57年大蔵省令第10号)に準拠しております。
- 3 当行は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度(自2023年4月1日 至2024年3月31日)の連結財務諸表及び事業年度(自2023年4月1日 至2024年3月31日)の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツの監査証明を受けております。
- 4 当行は、連結財務諸表等の適正性を確保するため、以下のような特段の取組みを行っております。
会計基準等の内容を適切に把握するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、監査法人等の行う研修への参加や会計専門誌の定期購読等を行っております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
資産の部		
現金預け金	1,201,938	1,360,066
コールローン及び買入手形	17,759	5,753
買入金銭債権	2,514	1,968
商品有価証券	488	459
金銭の信託	27,059	30,376
有価証券	1, 2, 3, 5, 10 1,515,578	1, 2, 3, 5, 10 1,857,431
貸出金	3, 4, 5, 6 4,343,641	3, 4, 5, 6 4,475,442
外国為替	3, 4 6,730	3, 4 6,193
その他資産	3, 5 119,185	3, 5 161,400
有形固定資産	8, 9 52,349	8, 9 47,638
建物	13,670	13,264
土地	7 32,054	7 31,457
建設仮勘定	4,531	703
その他の有形固定資産	2,092	2,211
無形固定資産	2,180	1,342
ソフトウェア	541	276
ソフトウェア仮勘定	1,470	896
その他の無形固定資産	169	169
退職給付に係る資産	19,650	25,228
繰延税金資産	572	591
支払承諾見返	3 28,226	3 29,340
貸倒引当金	32,177	32,683
資産の部合計	7,305,698	7,970,551
負債の部		
預金	5 5,714,368	5 5,803,032
譲渡性預金	30,332	25,360
コールマネー及び売渡手形	237,906	346,092
債券貸借取引受入担保金	5 205,572	5 241,330
借入金	5 538,456	5 882,628
外国為替	377	92
信託勘定借	11 187	11 184
その他負債	61,346	88,812
退職給付に係る負債	159	168
役員退職慰労引当金	4	4
利息返還損失引当金	10	5
偶発損失引当金	140	196
繰延税金負債	41,893	56,949
再評価に係る繰延税金負債	7 5,495	7 5,463
支払承諾	28,226	29,340
負債の部合計	6,864,476	7,479,663

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
純資産の部		
資本金	33,076	33,076
資本剰余金	24,540	24,541
利益剰余金	258,053	269,792
自己株式	14,488	16,476
株主資本合計	301,181	310,934
その他有価証券評価差額金	107,785	131,867
繰延ヘッジ損益	15,599	30,145
土地再評価差額金	7 8,312	7 8,240
退職給付に係る調整累計額	8,343	9,700
その他の包括利益累計額合計	140,040	179,953
純資産の部合計	441,222	490,887
負債及び純資産の部合計	7,305,698	7,970,551

【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月 31日)
経常収益	115,289	122,630
資金運用収益	58,038	74,177
貸出金利息	38,053	44,427
有価証券利息配当金	19,024	25,026
コールローン利息及び買入手形利息	139	170
預け金利息	711	1,493
その他の受入利息	109	3,060
信託報酬	0	0
役務取引等収益	17,651	19,995
その他業務収益	20,188	13,181
その他経常収益	19,410	15,276
償却債権取立益	615	252
その他の経常収益	¹ 18,795	¹ 15,023
経常費用	95,247	98,663
資金調達費用	9,010	18,990
預金利息	1,185	2,037
譲渡性預金利息	9	7
コールマネー利息及び売渡手形利息	1,711	4,651
債券貸借取引支払利息	3,072	5,124
借入金利息	3,034	7,095
その他の支払利息	3	74
役務取引等費用	4,873	5,730
その他業務費用	33,788	18,072
営業経費	² 44,420	² 51,047
その他経常費用	3,154	4,823
貸倒引当金繰入額	886	2,470
その他の経常費用	³ 2,268	³ 2,352
経常利益	20,041	23,967
特別利益	209	1
固定資産処分益	209	1
特別損失	82	233
固定資産処分損	82	86
減損損失	-	⁴ 146
税金等調整前当期純利益	20,168	23,735
法人税、住民税及び事業税	4,731	10,078
法人税等調整額	578	2,283
法人税等合計	5,309	7,794
当期純利益	14,858	15,940
親会社株主に帰属する当期純利益	14,858	15,940

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 4 月 1 日 至 2023年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 2023年 4 月 1 日 至 2024年 3 月31日)
当期純利益	14,858	15,940
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	41,170	24,082
繰延ヘッジ損益	9,553	14,546
退職給付に係る調整額	1,687	1,356
その他の包括利益合計	1 29,930	1 39,985
包括利益	15,071	55,925
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	15,071	55,925

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度(自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	33,076	24,536	248,089	11,619	294,083
当期変動額					
剰余金の配当			4,951		4,951
親会社株主に帰属する当期純利益			14,858		14,858
自己株式の取得				3,002	3,002
自己株式の処分		3		133	137
土地再評価差額金の取崩			56		56
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	3	9,963	2,869	7,098
当期末残高	33,076	24,540	258,053	14,488	301,181

	その他の包括利益累計額					新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計		
当期首残高	148,955	6,045	8,369	6,656	170,027	103	464,214
当期変動額							
剰余金の配当							4,951
親会社株主に帰属する当期純利益							14,858
自己株式の取得							3,002
自己株式の処分							137
土地再評価差額金の取崩							56
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	41,170	9,553	56	1,687	29,986	103	30,090
当期変動額合計	41,170	9,553	56	1,687	29,986	103	22,992
当期末残高	107,785	15,599	8,312	8,343	140,040	-	441,222

当連結会計年度(自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	33,076	24,540	258,053	14,488	301,181
当期変動額					
剰余金の配当			4,273		4,273
親会社株主に帰属する当期純利益			15,940		15,940
自己株式の取得				2,007	2,007
自己株式の処分		0		20	20
土地再評価差額金の取崩			72		72
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	0	11,739	1,987	9,752
当期末残高	33,076	24,541	269,792	16,476	310,934

	その他の包括利益累計額					純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	退職給付に係る調整累計額	その他の包括利益累計額合計	
当期首残高	107,785	15,599	8,312	8,343	140,040	441,222
当期変動額						
剰余金の配当						4,273
親会社株主に帰属する当期純利益						15,940
自己株式の取得						2,007
自己株式の処分						20
土地再評価差額金の取崩						72
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	24,082	14,546	72	1,356	39,912	39,912
当期変動額合計	24,082	14,546	72	1,356	39,912	49,665
当期末残高	131,867	30,145	8,240	9,700	179,953	490,887

【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月 31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	20,168	23,735
減価償却費	1,846	2,400
減損損失	-	146
貸倒引当金の増減()	637	505
偶発損失引当金の増減()	6	56
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	6,326	5,578
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	1	9
役員退職慰労引当金の増減額(は減少)	0	0
睡眠預金払戻損失引当金の増減()	83	-
利息返還損失引当金の増減額(は減少)	2	4
資金運用収益	58,038	74,177
資金調達費用	9,010	18,990
有価証券関係損益()	5,424	7,635
金銭の信託の運用損益(は運用益)	66	704
為替差損益(は益)	2	3
固定資産処分損益(は益)	126	84
貸出金の純増()減	278,957	131,801
預金の純増減()	103,283	88,664
譲渡性預金の純増減()	11,548	4,971
借入金(劣後特約付借入金を除く)の純増減()	398,383	344,172
預け金(日銀預け金を除く)の純増()減	222	297
コールローン等の純増()減	8,234	12,551
コールマネー等の純増減()	92,096	108,186
債券貸借取引受入担保金の純増減()	19,892	35,757
外国為替(資産)の純増()減	332	537
外国為替(負債)の純増減()	131	285
信託勘定借の純増減()	26	2
資金運用による収入	57,582	72,695
資金調達による支出	5,848	16,812
その他	18,521	9,713
小計	476,807	457,101
法人税等の支払額	6,626	3,808
営業活動によるキャッシュ・フロー	483,433	453,292

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月 31日)
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有価証券の取得による支出	700,336	650,801
有価証券の売却による収入	571,189	285,027
有価証券の償還による収入	87,575	80,993
金銭の信託の増加による支出	11,840	6,109
金銭の信託の減少による収入	-	3,000
有形固定資産の取得による支出	4,235	1,132
有形固定資産の売却による収入	509	486
無形固定資産の取得による支出	849	50
投資活動によるキャッシュ・フロー	57,989	288,586
財務活動によるキャッシュ・フロー		
自己株式の取得による支出	3,002	2,007
自己株式の売却による収入	-	0
配当金の支払額	4,951	4,273
財務活動によるキャッシュ・フロー	7,954	6,280
現金及び現金同等物に係る換算差額	0	-
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	549,377	158,425
現金及び現金同等物の期首残高	1,750,676	1,201,299
現金及び現金同等物の期末残高	1 1,201,299	1 1,359,724

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社 7社

連結子会社名は、「第1 企業の概況 4 関係会社の状況」に記載しているため省略しました。

(2) 非連結子会社 1社

会社名

しがぎん本業支援ファンド2号投資事業有限責任組合

非連結子会社は、その資産、経常収益、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、連結の範囲から除いても企業集団の財政状態及び経営成績に関する合理的な判断を妨げない程度に重要性が乏しいため、連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法適用の非連結子会社

該当事項はありません。

(2) 持分法適用の関連会社

該当事項はありません。

(3) 持分法非適用の非連結子会社 1社

会社名

しがぎん本業支援ファンド2号投資事業有限責任組合

持分法非適用の非連結子会社は、当期純損益(持分に見合う額)、利益剰余金(持分に見合う額)及びその他の包括利益累計額(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に重要な影響を与えないため、持分法の対象から除いております。

(4) 持分法非適用の関連会社

該当事項はありません。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は次のとおりであります。

3月末日 7社

4. 開示対象特別目的会社に関する事項

該当事項はありません。

5. 会計方針に関する事項

(1) 商品有価証券の評価基準及び評価方法

商品有価証券の評価は、時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)により行っております。

(2) 有価証券の評価基準及び評価方法

有価証券の評価は、売買目的有価証券については時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法(定額法)、その他有価証券については時価法(売却原価は主として移動平均法により算定)、ただし市場価格のない株式等については移動平均法による原価法により行っております。また、投資事業組合等への出資金については、組合等の直近の財務諸表等に基づいて、組合等の財産の持分相当額を純額で計上しております。

なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。

有価証券運用を主目的とする単独運用の金銭の信託において信託財産として運用されている有価証券の評価は、時価法により行っております。また、金銭の信託において信託財産を構成している有価証券の評価は、と同じ方法により行っております。

「買入金銭債権」中の信託受益権の評価は、上記と同じ方法により行っております。

(3) デリバティブ取引の評価基準及び評価方法

デリバティブ取引の評価は、時価法により行っております。

(4) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産(リース資産を除く)

当行の有形固定資産は、定率法(ただし、1998年4月1日以後に取得した建物(建物附属設備を除く。)並びに2016年4月1日以後に取得した建物附属設備及び構築物については定額法)を採用しております。

また、主な耐用年数は次のとおりであります。

建物 3年～50年

その他 3年～20年

連結子会社の有形固定資産については、資産の見積耐用年数に基づき、主として定率法により償却しております。

無形固定資産(リース資産を除く)

無形固定資産は、定額法により償却しております。なお、自社利用のソフトウェアについては、当行及び連結子会社で定める利用可能期間(主として5年)に基づいて償却しております。

リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係る「有形固定資産」及び「無形固定資産」中のリース資産は、リース期間を耐用年数とした定額法により償却しております。なお、残存価額については、リース契約上に残価保証の取決めがあるものは当該残価保証額とし、それ以外のもは零としております。

(5) 貸倒引当金の計上基準

当行の貸倒引当金は、予め定めている償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。

破産、特別清算等法的に経営破綻の事実が発生している債務者(以下「破綻先」という。)に係る債権及びそれと同等の状況にある債務者(以下「実質破綻先」という。)に係る債権については、以下のなお書きに記載されている直接減額後の帳簿価額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。

また、現在は経営破綻の状況にないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者(以下「破綻懸念先」という。)に係る債権については、債権額から、担保の処分可能見込額及び保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認める額を、以下の方法により計上しております。

与信額が一定額以上の大口債務者については、債務者の状況を総合的に判断してキャッシュ・フローによる回収可能額を見積もり、非保全額から当該キャッシュ・フローを控除した残額を貸倒引当金とする方法(キャッシュ・フロー控除法)により計上しております。

以外の債務者の債権については、今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正の検討を行い、算定しております。

上記以外の債務者のうち、業況が良好であり、かつ財務内容にも特段の問題がないと認められる債務者(以下「正常先」という。)及び貸出条件に問題のある債務者、履行状況に問題のある債務者、業況が低調ないし不安定な債務者又は財務内容に問題がある債務者など今後の管理に注意を要する債務者(以下「要注意先」という。)に係る債権については、今後1年間の予想損失額を、要注意先のうち当該債務者の債権の全部又は一部が要管理債権(貸出条件緩和債権及び三月以上延滞債権)である債務者の債権については今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正の検討を行い、算定しております。

将来見込み等による予想損失率の必要な修正及び決定方法

引当金の算定に使用する予想損失率は、直近3算定期間の平均値と景気循環サイクルを勘案した長期平均値を比較のうえ決定しております。このうち、直近3算定期間の平均値は、足元の状況及び将来見込み等必要な修正の検討を行い、算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立したリスク管理部署が自己査定結果及び償却・引当の適切性について検証しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は8,362百万円(前連結会計年度末は8,161百万円)であります。

連結子会社の貸倒引当金は、一般債権については過去の貸倒実績率等を勘案して必要と認められた額を、貸倒懸念債権等特定の債権については、個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額をそれぞれ計上しております。

(6) 役員退職慰労引当金の計上基準

連結子会社の役員退職慰労引当金は、役員への退職慰労金の支払いに備えるため、役員に対する退職慰労金の支給見込額のうち、当連結会計年度末までに発生していると認められる額を計上しております。

(7) 利息返還損失引当金の計上基準

連結子会社の利息返還損失引当金は、債務者からの利息返還請求に備えるため、必要と認められる額を計上しております。

(8) 偶発損失引当金の計上基準

当行の偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積もり、必要と認められる額を計上しております。

(9) 退職給付に係る会計処理の方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。また、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理

数理計算上の差異：各連結会計年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から損益処理

なお、連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(10) 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

当行の外貨建資産・負債及び海外支店勘定は、連結決算日の為替相場による円換算額を付しております。

(11) リース取引の収益・費用の計上基準

ファイナンス・リース取引に係る収益・費用の計上基準については、リース契約期間の経過に応じて売上高と売上原価を計上する方法によっております。

(12) 重要なヘッジ会計の方法

金利リスク・ヘッジ

当行の金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、繰延ヘッジによっており、ヘッジ対象とヘッジ手段を紐付けする方法のほか、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日。以下「業種別委員会実務指針第24号」という。)に基づき処理しております。

ヘッジ有効性評価の方法については、その他有価証券に区分している固定金利の債券の相場変動を相殺するヘッジにおいては、同一種類毎にヘッジ対象を識別し、金利スワップ取引をヘッジ手段として指定しておりますが、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件がほぼ同一となるようなヘッジ指定を行っているため、高い有効性があるとみなしており、これをもって有効性の判定に代えております。

また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

なお、一部の資産については、金利スワップの特例処理を行っており、ヘッジの有効性の評価については、特例処理の要件の判定をもって有効性の判定に代えております。

為替変動リスク・ヘッジ

当行の外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」(日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 令和2年10月8日)に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う資金関連スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

資金関連スワップ取引とは、異なる通貨での資金調達・運用を動機として行われ、当該資金の調達又は運用に係る元本相当額を直物買為替又は直物売為替とし、当該元本相当額に将来支払うべき又は支払を受けるべき金額・期日の確定している外貨相当額を含めて先物買為替又は先物売為替とした為替スワップ取引であります。

また、外貨建有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして時価ヘッジを適用しております。

(13) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲は、連結貸借対照表上の「現金預け金」のうち現金及び日本銀行への預け金であります。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当連結会計年度に係る連結財務諸表にその額を計上した項目であって、翌連結会計年度に係る連結財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次の通りであります。

1. 貸倒引当金

(1) 当連結会計年度並びに前連結会計年度に係る連結財務諸表に計上した金額

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
貸倒引当金	32,177百万円	32,683百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

算定方法

貸倒引当金の算定方法は、『注記事項』の「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」「5. 会計方針に関する事項」の「(5) 貸倒引当金の計上基準」に記載しております。また、下記仮定のもと、当該影響により予想される損失に備えるため、貸出先の債務者区分を足元の業績悪化の状況及び財務情報等には未だ反映されていない影響に係る見積りに基づき修正して貸倒引当金を計上しております。なお、新型コロナウイルス感染症による影響を受けている特定業種の一部の貸出先については、貸倒実績率に必要な修正を加えた予想損失率によって追加的に貸倒引当金を計上しております。

主要な仮定

主要な仮定は「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」であります。「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」は、各債務者の収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。なお、「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」に重要な影響を与える可能性のある新型コロナウイルス感染症の影響については、感染症法上の位置づけが5類に移行し、各種経済活動も概ね正常化しているものの、特定業種の一部の取引先においては未だ影響が完全に消失したとは言えない状況にあり、これらの取引先に対する貸出金等に内包される信用リスクは引き続き相対的に高い状況にあると仮定しております。

翌連結会計年度に係る連結財務諸表に及ぼす影響

当行グループは厳格な自己査定を実施し、必要と認める貸倒引当金を計上する等の対応を行っておりますが、上記仮定は不確実性が高いため、当初の見積りに用いた仮定が変化した場合は、翌連結会計年度（2025年3月期）以降の連結財務諸表における貸倒引当金に重要な影響を及ぼす可能性があります。

なお、債務者区分の決定において、貸出先の経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合には、より不確実性が高くなる可能性があります。

(未適用の会計基準等)

- ・「法人税、住民税及び事業税等に関する会計基準」(企業会計基準第27号 令和4年10月28日)
- ・「包括利益の表示に関する会計基準」(企業会計基準第25号 令和4年10月28日)
- ・「税効果会計に係る会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第28号 令和4年10月28日)

(1) 概要

その他の包括利益に対して課税される場合の法人税等の計上区分及びグループ法人税制が適用される場合の子会社株式等の売却に係る税効果の取扱いを定めるもの。

(2) 適用予定日

2025年3月期の期首より適用予定であります。

(3) 当該会計基準等の適用による影響

当該会計基準等の適用による影響は現在評価中であります。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社の株式又は出資金の総額

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
出資金	281百万円	7百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が、「有価証券」中の国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
52,819百万円	52,828百万円

3 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、連結貸借対照表の「有価証券」中の社債(その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)によるものに限る。)、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は貸借契約によるものに限る。)であります。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	2,838百万円	3,006百万円
危険債権額	48,314百万円	51,666百万円
三月以上延滞債権額	68百万円	119百万円
貸出条件緩和債権額	33,340百万円	29,977百万円
合計額	84,561百万円	84,771百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。

なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

4 手形割引は、業種別委員会実務指針第24号に基づき金融取引として処理しております。

これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
5,935百万円	8,464百万円

5 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	656,024百万円	975,359百万円
貸出金	199,653百万円	283,925百万円
計	855,678百万円	1,259,284百万円
担保資産に対応する債務		
預金	25,115百万円	12,547百万円
債券貸借取引受入担保金	205,572百万円	241,330百万円
借入金	533,391百万円	877,226百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
その他資産(中央清算機関等差入 証拠金)	43,553百万円	45,696百万円

また、その他資産には保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
保証金	378百万円	378百万円

なお、手形の再割引は、業種別委員会実務指針第24号に基づき金融取引として処理しておりますが、これにより引き渡した商業手形及び買入外国為替はありません。

6 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
融資未実行残高	1,018,015百万円	1,022,887百万円
うち原契約が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消 可能なもの)	914,616百万円	909,092百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行及び連結子会社の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行及び連結子会社が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内(社内)手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

7 土地の再評価に関する法律(平成10年3月31日公布法律第34号)に基づき、当行の事業用の土地の再評価を行い、評価差額については、当該評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。

再評価を行った年月日 1998年3月31日

同法律第3条第3項に定める再評価の方法

土地の再評価に関する法律施行令(平成10年3月31日公布政令第119号)第2条第3号に定める固定資産税評価額に基づいて、近隣の公示価格を参酌する等合理的な調整を行って算出。

同法律第10条に定める再評価を行った事業用の土地の当連結会計年度末における時価の合計額と当該事業用の土地の再評価後の帳簿価額の合計額との差額

前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
3,634百万円	3,407百万円

8 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
減価償却累計額	47,305百万円	47,804百万円

9 有形固定資産の圧縮記帳額

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
圧縮記帳額	3,487百万円	3,487百万円
(当該連結会計年度の圧縮記帳額)	(百万円)	(百万円)

10 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募（金融商品取引法第2条第3項）による社債に対する保証債務の額

前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
11,026百万円	8,214百万円

11 元本補填契約のある信託の元本金額は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
金銭信託	187百万円	184百万円

(連結損益計算書関係)

1 「その他の経常収益」には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
株式等売却益	18,382百万円	13,861百万円
金銭の信託運用益	136百万円	709百万円

2 「営業経費」には、次のものを含んでおります。

なお、基幹系システム関連費用の前連結会計年度の計上額には研究開発費4,888百万円が含まれております。また、当連結会計年度の計上額には、当連結会計年度末までに基幹系システム関連資産として計上していた金額の一部を費用振替した6,783百万円が含まれております。

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
給料・手当	15,543百万円	15,497百万円
基幹系システム関連費用	6,434百万円	11,498百万円

3 「その他の経常費用」には、次のものを含んでおります。

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
株式等売却損	1,014百万円	866百万円
貸出金償却	989百万円	789百万円
株式等償却	37百万円	288百万円

4 当行は、以下の資産について減損損失を計上しております。

なお、連結子会社の資産のグルーピングについては、全社をひとつの単位として減損の兆候を判定しておりますが、減損損失の計上はありません。

(減損損失を認識した資産又は資産グループ及び種類毎の減損損失額)

滋賀県内

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
主な用途		遊休資産(2カ所)
減損損失額		
土地	百万円	101百万円
建物	百万円	20百万円
動産	百万円	0百万円
合計	百万円	122百万円

滋賀県外

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
主な用途		営業用資産(1カ所)
減損損失額		
建物	百万円	16百万円
動産	百万円	7百万円
合計	百万円	24百万円

上記の資産は、継続的な地価の下落及び営業キャッシュ・フローの低下により、資産グループの帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

(資産グループの概要及びグルーピングの方法)

(1)資産グループの概要

遊休資産

店舗・社宅跡地等

営業用資産

営業の用に供する資産

共用資産

銀行全体に関連する資産(本部、事務センター、寮社宅等)

(2)グルーピングの方法

遊休資産

各々が独立した資産としてグルーピング

営業用資産

フルバンク機能を構成する店舗グループ又は店舗単位

共用資産

銀行全体を一体としてグルーピング

(回収可能価額)

減損損失の測定に使用した回収可能価額は正味売却価額又は使用価値のいずれか高い方の金額であり、正味売却価額は不動産鑑定評価額等より処分費用見込額を控除して、使用価値は将来キャッシュ・フローを5%で割り引いて、それぞれ算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
その他有価証券評価差額金		
当期発生額	64,872百万円	42,137百万円
組替調整額	5,583百万円	7,728百万円
税効果調整前	59,289百万円	34,409百万円
税効果額	18,118百万円	10,326百万円
その他有価証券評価差額金	41,170百万円	24,082百万円
繰延ヘッジ損益		
当期発生額	23,746百万円	24,317百万円
組替調整額	10,009百万円	3,402百万円
税効果調整前	13,736百万円	20,914百万円
税効果額	4,182百万円	6,368百万円
繰延ヘッジ損益	9,553百万円	14,546百万円
退職給付に係る調整額		
当期発生額	4,159百万円	3,827百万円
組替調整額	1,733百万円	1,877百万円
税効果調整前	2,425百万円	1,950百万円
税効果額	738百万円	593百万円
退職給付に係る調整額	1,687百万円	1,356百万円
その他の包括利益合計	29,930百万円	39,985百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計 年度期首株式数 (千株)	当連結会計 年度増加株式数 (千株)	当連結会計 年度減少株式数 (千株)	当連結会計 年度末株式数 (千株)	摘 要
発行済株式					
普通株式	53,090			53,090	
合 計	53,090			53,090	
自己株式					
普通株式	4,502	1,161	51	5,613	(注)
合 計	4,502	1,161	51	5,613	

(注) 当連結会計年度中の自己株式の増加は単元未満株式の買取り及び自己株式立会外買付取引並びに東京証券取引所における市場買付による増加、当連結会計年度中の自己株式の減少はストック・オプションの権利行使及び譲渡制限付株式の割当による減少であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

区分	新株予約権の内訳	新株予約権の 目的となる 株式の種類	新株予約権の目的となる株式の数(株)			当連結会計 年度末残高 (百万円)	摘要	
			当連結会計 年度期首	当連結会計年度				当連結会計 年度末
				増加	減少			
当行	ストック・オプション としての新株予約権							
	合 計							

当連結会計年度より、株式報酬型ストック・オプション制度を廃止し、譲渡制限付株式報酬制度を導入しております。この結果、2023年3月31日時点でストック・オプションは存在していません。

3 配当に関する事項

(1)当連結会計年度中の配当金支払額

決 議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年6月24日 定時株主総会	普通株式	3,036	62.5	2022年3月31日	2022年6月27日
2022年11月11日 取締役会	普通株式	1,914	40.0	2022年9月30日	2022年12月6日

(2)基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

決 議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,899	利益剰余金	40.0	2023年 3月31日	2023年 6月28日

当連結会計年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

1 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計 年度期首株式数 (千株)	当連結会計 年度増加株式数 (千株)	当連結会計 年度減少株式数 (千株)	当連結会計 年度末株式数 (千株)	摘 要
発行済株式					
普通株式	53,090			53,090	
合 計	53,090			53,090	
自己株式					
普通株式	5,613	554	7	6,159	(注)
合 計	5,613	554	7	6,159	

(注) 当連結会計年度中の自己株式の増加は単元未満株式の買取り及び自己株式立会外買付取引並びに東京証券取引所における市場買付による増加、当連結会計年度中の自己株式の減少は譲渡制限付株式の割当及び単元未満株式の売渡しによる減少であります。

2 新株予約権及び自己新株予約権に関する事項

該当事項はありません。

3 配当に関する事項

(1)当連結会計年度中の配当金支払額

決 議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年6月27日 定時株主総会	普通株式	1,899	40.0	2023年3月31日	2023年6月28日
2023年11月10日 取締役会	普通株式	2,374	50.0	2023年9月30日	2023年12月5日

(2)基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が当連結会計年度の末日後となるもの

決 議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2024年6月26日 定時株主総会	普通株式	1,877	利益剰余金	40.0	2024年 3月31日	2024年 6月27日

上記については、2024年6月26日開催予定の定時株主総会の議案として上程しております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
現金預け金勘定	1,201,938百万円	1,360,066百万円
その他預け金	639百万円	341百万円
現金及び現金同等物	1,201,299百万円	1,359,724百万円

2 重要な非資金取引の内容

該当事項はありません。

(リース取引関係)

1 ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

借主側

リース資産の内容

(ア)有形固定資産

該当事項はありません。

(イ)無形固定資産

該当事項はありません。

リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「5. 会計方針に関する事項」の「(4) 固定資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

貸主側

リース投資資産の内訳

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
リース料債権部分	14,933	15,909
見積残存価額部分	390	388
受取利息相当額 ()	1,221	1,325
リース投資資産	14,102	14,972

リース債権及びリース投資資産にかかるリース料債権部分の連結決算日後の回収予定額

リース債権

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
1年以内	445	352
1年超2年以内	253	330
2年超3年以内	231	235
3年超4年以内	136	120
4年超5年以内	21	25
5年超	21	1

リース投資資産

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
1年以内	4,834	4,929
1年超2年以内	3,842	3,851
2年超3年以内	2,763	3,081
3年超4年以内	1,941	2,282
4年超5年以内	1,121	1,294
5年超	429	469

2 オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
1年内	13	15
1年超	37	31
合計	50	47

(金融商品関係)

1 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当行グループ(以下「当行」という。)は、滋賀県を主要な営業基盤とする地域金融機関として、銀行業務を中心とした金融サービスを提供しております。

当行の中核をなす銀行業務として、顧客からお預かりした預金や金融市場等からの借入等により調達した資金を、営業エリア内の顧客に対する貸出金及び有価証券投資等で運用しております。

この業務を行うため、主として金利変動を伴う金融資産及び金融負債を有しており、金利変動による不利益を最小限に抑えるため、資産・負債の総合管理(以下「ALM」という。なお、ALMは、Asset Liability Managementの略)を行っております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

当行が保有する金融資産は、主として営業エリア内の顧客に対する貸出金であり、顧客の財務状況の悪化等によって当該資産の価値が減少又は消失し損失を被る信用リスクに晒されております。なお、当行の国内貸出金ポートフォリオは、特定業種に係る環境変化による信用リスクの顕在化を排除すべく、業種の分散を心がけております。

有価証券は、主に債券、株式、投資信託を保有しており、対顧客販売目的、純投資目的及び政策投資目的に区分しております。これらは、金利や為替、株価等の市場の変動により損失を被る可能性のある市場リスクや発行体の信用リスクに晒されております。

また、外貨建の貸出金及び債券については、上記リスクに加え、為替リスクに晒されておりますが、外貨預金、通貨スワップ、レポ取引あるいはコール取引等で外貨資金を調達することで、当該リスクを抑えた運用を行っております。

金融負債は、主として顧客の預金や借入金等があります。借入金等は、一定の環境下で当行が市場を利用できなくなる場合など、必要な資金を確保できない、あるいは、資金の確保に通常よりも著しく高い金利での資金調達を余儀なくされることにより損失を被るリスクに晒されております。また、一部は変動金利での借入を行っており、金利の上昇に伴う調達コストの増加により損失を被るリスクに晒されております。

当行では、顧客ニーズへの対応及び当行の資産・負債に係る市場リスクのヘッジを目的として、金利スワップ取引、通貨スワップ取引、通貨オプション取引及び為替予約取引等のデリバティブ取引を利用しております。これらのうち一部の取引については、金融商品会計に関する実務指針等に準拠する行内規程類とヘッジ対応方針に基づきヘッジ会計を適用しております。

また、短期的な売買を行う取引については、ポジション限度額や損失限度額を設けたうえで、債券先物取引、債券オプション取引及び株価指数先物取引を行っております。

これらのデリバティブ取引には、市場リスクや信用リスクが内包されております。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

信用リスクの管理

当行では、業務運営上、そのリスクの影響度から信用リスクを最も重要性を持つリスクとして認識し信用リスクに関する規程や基準書等を定めるとともに、基礎的内部格付手法に基づく格付制度を整備し、適切な信用リスク管理体制の構築を図っております。

特に、格付制度については、経営管理部が、その運用状況の検証結果を常務会等に報告するなど、適切な格付自己査定を実施する体制を整備しております。

また、個別与信管理については、「融資業務基本規程」を制定し、貸出金業務に携わる全従業員が遵守すべき考え方や行動規範を明文化するとともに、与信判断や与信管理を行う際の基本的な手続を定め、各役職員が、公共性・安全性・収益性・流動性・成長性の原則に則った与信判断を行える体制を確立しております。具体的には、企業(又は企業グループ)あるいは個別案件ごとの与信審査、与信限度額、信用情報管理、内部格付、保証や担保の設定、問題債権への対応など、与信管理に関する体制を整備し運営しております。これらの与信管理は、各営業店及び審査部により行われております。

海外向け信用供与については、与信先の属する国の外貨事情や政治・経済情勢等を勘案のうえ、事業年度ごとに常務会で国別の限度額を設定し、管理しております。

有価証券等の市場性取引にあたっては、債券発行体の信用リスク及びデリバティブ取引や資金取引のカウンターパーティーリスクについては、半期ごとに常務会で限度額を設定し、信用状態や市場価格を日次で管理するとともに、定期的に常務会等へ報告する体制を整備しております。

市場リスクの管理

当行では、市場リスク管理の高度化及び内部管理の堅確化を図り、経営の健全性を確保する目的で「市場リスク管理規程」を定めるとともに、安定した収益を確保するため、半期ごとに財務プラン及びリスク管理方針を策定し、適切なリスク管理体制の構築に努めております。

() 金利リスクの管理

金利リスクについては、銀行の業務運営上不可避に発生するものであり、預金、貸出金、有価証券等の全ての資産・負債(オフ・バランス取引を含む)について、ALMの観点より総合的に管理しております。

リスク管理方法や報告手続については、「市場リスク管理規程」や「各種基準書」を定め、VaR及び金利感応度分析等によりモニタリングを行い、定期的にALM委員会に報告しております。

() 為替リスクの管理

為替リスクについては、為替変動の影響を受ける持高を管理するため常務会で持高限度額を設定し、為替取引や通貨スワップなどのデリバティブ取引を用いて持高をコントロールしております。

また、VaRによるリスク許容量を設定し、リスク量がその範囲内に収まっていることを日次で管理しております。

() 価格変動リスクの管理

当行では、有価証券等の取引に係る価格変動リスクを厳格に管理するため、組織を市場取引部門、事務管理部門、リスク管理部門に分離しております。

有価証券等の市場性取引については、財務プラン及びリスク管理方針に基づき、全行的なリスクとリターンを勘案したうえ、市場部門で業務運営計画を策定しております。

投資にあたっては、上記の方針及び計画に基づき、ポジション額や損益のほか、VaRや金利感応度を算出するとともに、定められたリスク許容額等の各種限度額の遵守状況を日次で管理しております。

() デリバティブ取引の管理

デリバティブ取引については、取引の執行、ヘッジ有効性の評価、事務管理に関する部門をそれぞれ分離し内部牽制を確立しております。なお、当行のデリバティブ取引の大半は、ヘッジ目的や顧客取引に対するカバー取引であり、保有する資産・負債等と市場リスクが相殺されるように管理しております。

() 市場リスクに係る定量的情報

当行では、市場リスクのうち金利リスク及び株価変動リスクについて、統計的な手法であるVaRによりリスク量を定量的に把握するとともに、定期的にALM委員会等へ報告するなど、適切にモニタリング・管理しております。なお、リスク量の計測にあたっては、ヒストリカル・シミュレーション法(保有期間1年、信頼水準99%、観測期間2年)を採用しております。

(金利リスク)

当行では、貸出金、有価証券、預金をはじめとする全ての資産・負債並びにデリバティブ取引を対象として、金利リスクを計測しております。

当連結会計年度末における当行の金利リスク量は、5,077百万円（前連結会計年度末は7,386百万円）であります。

なお、普通預金等の流動性預金については、その一部を長期間銀行に滞留する預金として扱い、内部モデルに基づき各期間帯へ割り振り、金利リスクを認識しております。

(株価変動リスク)

政策投資及び純投資を目的とする株式を保有しておりますが、当連結会計年度末における株価変動リスク量は、61,439百万円（前連結会計年度末は62,108百万円）であります。

(バック・テスト等)

当行では、V a Rにより計測されたリスク量の適切性を検証するため、V a Rを損益と比較するバック・テストを実施し、リスク計測手法の有効性について分析しております。しかしながら、V a Rは過去の相場変動に基づき統計的に計測するため、前提条件や計測手法等によって異なる値となるほか、市場環境が激変する状況下ではリスクを適切に捕捉できない可能性があります。

なお、連結子会社が保有する金利リスク及び株価変動リスクは、当行に与える影響が軽微であることから、市場リスク量算出の対象外としております。

資金調達に係る流動性リスクの管理

当行では、正確な資金繰りの把握及び資金繰りの安定に努めることを基本方針として「流動性リスク管理規程」を定め、適切なリスク管理体制の構築を図っております。

日常の資金繰りについて、金融環境、資金化可能な流動資産の保有状況、予想される資金流出額などの状況を把握、管理するとともに、定期的に資金繰りに関する状況等をA L M委員会・取締役会に報告しております。

(4) 金融商品の時価等に関する事項についての補足説明

金融商品の時価の算定においては一定の前提条件等を採用しているため、異なる前提条件等によった場合、当該価額が異なることもあります。

2 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額は、次のとおりであります。なお、市場価格のない株式等及び組合出資金は、次表には含めておりません（注1参照）。

また、現金預け金、コールローン及び買入手形、外国為替（資産・負債）、コールマネー及び売渡手形、債券貸借取引受入担保金は、短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似することから、注記を省略しております。なお、重要性が乏しい金融商品については記載を省略しております。

前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 有価証券	1,498,034	1,492,882	5,152
満期保有目的の債券	66,958	61,806	5,152
その他有価証券(1)	1,431,076	1,431,076	
(2) 貸出金	4,343,641		
貸倒引当金(2)	31,842		
	4,311,798	4,286,290	25,508
資 産 計	5,809,833	5,779,173	30,660
(1) 預金	5,714,368	5,714,494	126
(2) 譲渡性預金	30,332	30,333	1
(3) 借入金	538,456	536,341	2,114
負 債 計	6,283,157	6,281,169	1,987
デリバティブ取引(3)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(5,773)	(5,773)	
ヘッジ会計が適用されているもの(4)	22,428	22,428	
デリバティブ取引計	16,655	16,655	

(1) その他有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」（企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日）第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託が含まれております。

(2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(3) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

(4) ヘッジ対象である外国証券の相場変動を相殺するためにヘッジ手段として指定した金利スワップであり、繰延ヘッジを適用しております。なお、これらのヘッジ関係に、「LIBOR を参照する金融商品に関するヘッジ会計の取扱い」（実務対応報告第40号 令和4年3月17日）を適用しております。

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

	連結貸借対照表 計上額	時価	差額
(1) 有価証券	1,834,766	1,826,501	8,264
満期保有目的の債券	66,960	58,695	8,264
其他有価証券(1)	1,767,805	1,767,805	
(2) 貸出金	4,475,442		
貸倒引当金(2)	32,315		
	4,443,126	4,403,369	39,756
資 産 計	6,277,892	6,229,871	48,021
(1) 預金	5,803,032	5,803,163	131
(2) 譲渡性預金	25,360	25,361	1
(3) 借入金	882,628	874,896	7,732
負 債 計	6,711,021	6,703,422	7,599
デリバティブ取引(3)			
ヘッジ会計が適用されていないもの	(8,999)	(8,999)	
ヘッジ会計が適用されているもの(4)	43,343	43,343	
デリバティブ取引計	34,344	34,344	

(1) その他有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託が含まれております。

(2) 貸出金に対応する一般貸倒引当金及び個別貸倒引当金を控除しております。

(3) その他資産・負債に計上しているデリバティブ取引を一括して表示しております。

デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、()で表示しております。

(4) ヘッジ対象である外国証券の相場変動を相殺するためにヘッジ手段として指定した金利スワップであり、繰延ヘッジを適用しております。なお、これらのヘッジ関係に、「LIBORを参照する金融商品に関するヘッジ会計の取扱い」(実務対応報告第40号 令和4年3月17日)を適用しております。

(注1) 市場価格のない株式等及び組合出資金の連結貸借対照表計上額は次のとおりであり、金融商品の時価情報の「資産(1)有価証券(その他有価証券)」には含まれておりません。

(単位：百万円)

区 分	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
非上場株式(1)(2)	3,416	4,818
組合出資金等(3)	14,126	17,846

(1) 非上場株式については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号 令和2年3月31日)第5項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(2) 前連結会計年度において、非上場株式について37百万円の減損処理を行っております。

当連結会計年度において、非上場株式について116百万円の減損処理を行っております。

(3) 組合出資金については、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-16項に基づき、時価開示の対象とはしておりません。

(注2) 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額
前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	1,162,006					
有価証券	63,219	138,422	163,388	114,681	103,854	642,048
満期保有目的の債券						67,000
うち国債						67,000
その他有価証券のうち満期があるもの	63,219	138,422	163,388	114,681	103,854	575,048
うち国債	3,000	12,000			20,000	227,000
地方債	13,128	36,031	42,756	70,799	54,343	13,045
社債	19,498	38,540	59,944	15,838	800	178,828
その他	27,592	51,850	60,687	28,043	28,710	156,174
貸出金()	952,444	826,450	653,775	410,949	471,956	954,086
合計	2,177,670	964,872	817,164	525,631	575,810	1,596,135

() 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない150,816百万円、期間の定めのないもの23,161百万円は上記に含めておりません。

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預け金	1,326,185					
有価証券	51,999	293,810	253,705	124,300	111,756	677,986
満期保有目的の債券						67,000
うち国債						67,000
その他有価証券のうち満期があるもの	51,999	293,810	253,705	124,300	111,756	610,986
うち国債	12,000	140,000	49,800	20,000	31,000	235,000
地方債	9,143	45,183	57,926	51,960	61,073	8,850
社債	12,170	44,338	73,238	18,966	300	158,133
その他	18,685	64,288	72,740	33,373	19,383	209,003
貸出金()	990,052	852,255	700,676	412,448	435,265	1,008,247
合計	2,368,237	1,146,065	954,382	536,748	547,022	1,686,234

() 貸出金のうち、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等、償還予定額が見込めない154,122百万円、期間の定めのないもの22,373百万円は上記に含めておりません。

(注3) 借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額
前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金()	5,406,329	290,410	17,627			
譲渡性預金	30,332					
コールマネー及び売渡手形	237,906					
債券貸借取引受入担保金	205,572					
借入金	197,505	71,387	265,414	114	4,035	
合 計	6,077,646	361,798	283,042	114	4,035	

() 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預金()	5,514,274	260,492	28,265			
譲渡性預金	25,360					
コールマネー及び売渡手形	346,092					
債券貸借取引受入担保金	241,330					
借入金	198,523	303,219	376,187	4,697		
合 計	6,325,581	563,712	404,453	4,697		

() 預金のうち、要求払預金については、「1年以内」に含めて開示しております。

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

なお、保有目的ごとの有価証券に関する注記事項については、「(有価証券関係)」に記載しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品
前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
その他有価証券				
国債・地方債等	240,840	244,617		485,457
社債		155,167	11,459	166,627
住宅ローン担保証券		143,447		143,447
株式	278,050	2,895		280,945
その他	100,292	188,829	53,634	342,755
デリバティブ取引				
金利関連		24,073		24,073
通貨関連		6,062		6,062
資産計	619,182	765,091	65,094	1,449,368
デリバティブ取引				
金利関連		1,591		1,591
通貨関連		11,888		11,888
負債計		13,479		13,479

(*) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は含まれておりません。第24-3項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額は1,707百万円、第24-9項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額は3,698百万円であります。

第24-3項及び第24-9項の取扱いを適用した投資信託の期首残高から期末残高への調整表

(単位：百万円)

期首残高	当期の損益 又はその他の包括利益		購入、売却 及び償還の 純額	投資信託の基 準価額を時価 とみなすこと とした額	投資信託の基 準価額を時価 とみなさない こととした額	当期末残高	当期の損益に 計上した額の うち連結 貸借対照表日 において保有 する投資信託 の評価損益
	損益に計上	その他の 包括利益 に計上 (*)					
808		44	4,553			5,405	

(*) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

連結決算日における解約又は買戻請求に関する制限の内容ごとの内訳

(単位：百万円)

解約又は買戻請求に関する制限の主な内容	連結貸借対照表計上額
解約・買戻請求ができず、譲渡には運用会社の承諾を要する	1,302
解約申込から払戻まで数か月を要する	404

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
その他有価証券				
国債・地方債等	446,036	256,982		703,019
社債		168,490	8,189	176,680
住宅ローン担保証券		124,214		124,214
株式	336,710	4,097		340,807
その他	123,666	214,670	65,573	403,909
デリバティブ取引				
金利関連		44,406		44,406
通貨関連		4,665		4,665
資産計	906,414	817,526	73,762	1,797,703
デリバティブ取引				
金利関連		960		960
通貨関連		13,767		13,767
負債計		14,727		14,727

(*) 有価証券には、「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号 令和3年6月17日)第24-3項及び第24-9項の基準価額を時価とみなす取扱いを適用した投資信託は含まれておりません。第24-3項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額は2,838百万円、第24-9項の取扱いを適用した投資信託の連結貸借対照表計上額は9,327百万円であります。

第24-3項及び第24-9項の取扱いを適用した投資信託の期首残高から期末残高への調整表

(単位：百万円)

期首残高	当期の損益 又はその他の包括利益		購入、売却 及び償還の 純額	投資信託の基 準価額を時価 とみなすこと とした額	投資信託の基 準価額を時価 とみなさない こととした額	当期末残高	当期の損益に 計上した額の うち連結 貸借対照表日 において保有 する投資信託 の評価損益
	損益に計上	その他の 包括利益 に計上 (*)					
5,405		35	6,725			12,165	

(*) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

連結決算日における解約又は買戻請求に関する制限の内容ごとの内訳

(単位：百万円)

解約又は買戻請求に関する制限の主な内容	連結貸借対照表計上額
解約・買戻請求ができず、譲渡には運用会社の承諾を要する	1,968
解約申込から払戻まで数か月を要する	869

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品
前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
満期保有目的の債券				
国債・地方債等	61,806			61,806
貸出金			4,286,290	4,286,290
資産計	61,806		4,286,290	4,348,097
預金		5,714,494		5,714,494
譲渡性預金		30,333		30,333
借入金		536,341		536,341
負債計		6,281,169		6,281,169

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
有価証券				
満期保有目的の債券				
国債・地方債等	58,695			58,695
貸出金			4,403,369	4,403,369
資産計	58,695		4,403,369	4,462,065
預金		5,803,163		5,803,163
譲渡性預金		25,361		25,361
借入金		874,896		874,896
負債計		6,703,422		6,703,422

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

資産

有価証券

有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。

公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に地方債、社債がこれに含まれます。また、市場における取引価格が存在しない投資信託について、解約又は買い戻し請求に関して市場参加者からリスクの対価を求められるほどの重要な制限がない場合には、基準価額を時価とし、レベル2の時価に分類しております。

相場価格が入手できない場合には、将来キャッシュ・フローの現在価値技法などの評価技法を用いて時価を算定しております。評価に当たっては観察可能なインプットを最大限利用しており、インプットには、TIBOR、国債利回り、期限前返済率、信用スプレッド、倒産確率、倒産時の損失率等が含まれます。算定に当たり重要な観察できないインプットを用いている場合には、レベル3の時価に分類しております。

貸出金

貸出金については、貸出金の種類及び内部格付、期間に基づく区分ごとに、元利金の合計額を市場金利に信用リスク等を反映させた割引率で割り引いて時価を算定しております。このうち変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映するため、貸出先の信用状態が実行後大きく異なっていない場合は時価と帳簿価額が近似していることから、帳簿価額を時価としております。また、破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先に対する債権等については、見積将来キャッシュ・フロー、又は、担保及び保証による回収見込額等を用いて時価を算定しております。金利スワップの特例処理又は為替予約等の振当処理の対象とされた貸出金については、当該金利スワップ又は為替予約等の時価を反映しております。時価に対して観察できないインプットによる影響額が重要な場合はレベル3の時価、そうでない場合はレベル2の時価に分類しております。

負債

預金、及び譲渡性預金

要求払預金について、連結決算日に要求に応じて直ちに支払うものは、その金額を時価としております。また、定期預金及び譲渡性預金については、一定の期間ごとに区分して将来キャッシュ・フローを割り引いた割引現在価値により時価を算定しております。割引率は市場金利としております。なお、預入期間が短期間（1年未満）のものは時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

借入金

借入金については、一定の期間ごとに区分した当該借入金の元利金の合計額を当該借入金の残存期間及び信用リスクを加味した利率で割り引いて現在価値を算定しております。このうち、変動金利によるものは、短期間で市場金利を反映し、また、当行及び連結子会社の信用状態は実行後大きく異なっていないことから、時価は帳簿価額と近似していると考えられるため、当該帳簿価額を時価としております。なお、約定期間が短期間（1年未満）のものは、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額を時価としております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

デリバティブ取引

デリバティブ取引については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しており、主に債券先物取引や金利先物取引がこれに含まれます。

ただし、大部分のデリバティブ取引は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しないため、取引の種類や満期までの期間に応じて現在価値技法やブラック・ショールズ・モデル等の評価技法を利用して時価を算定しております。それらの評価技法で用いている主なインプットは、金利や為替レート、ボラティリティ等であります。また、取引相手の信用リスク及び当行自身の信用リスクに基づく価格調整を行っております。観察できないインプットを用いていない又はその影響が重要でない場合はレベル2の時価に分類しており、ブレイン・バニラ型の金利スワップ取引、為替予約取引等が含まれます。重要な観察できないインプットを用いている場合はレベル3の時価に分類しており、債券店頭オプション取引等が含まれます。

(注2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品のうちレベル3の時価に関する情報

(1) 重要な観察できないインプットに関する定量的情報

前連結会計年度(2023年3月31日)

区分	評価技法	重要な観察できないインプット	インプットの範囲	インプットの加重平均
有価証券				
その他有価証券				
社債				
私募債	現在価値技法	割引率	0.3%～1.9%	0.4%

当連結会計年度(2024年3月31日)

区分	評価技法	重要な観察できないインプット	インプットの範囲	インプットの加重平均
有価証券				
その他有価証券				
社債				
私募債	現在価値技法	割引率	0.3%～2.1%	0.4%

(2) 期首残高から期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

前連結会計年度(2023年3月31日)

(単位：百万円)

	期首残高	当期の損益 又はその他の包括利益		購入、売却、 発行及び決済 の純額	レベル3の 時価への 振替 (*3)	レベル3の 時価からの 振替	期末残高	当期の損益に 計上した額 のうち連結 貸借対照表日 において保有 する金融資産 及び負債の 評価損益 (*1)
		損益に計上 (*1)	その他の 包括利益 に計上 (*2)					
有価証券								
その他有価証券								
社債	17,858	5	29	6,374			11,459	
外国債券	17,467	4	749	34,676	2,235		53,634	

(*1) 連結損益計算書の「その他業務収益」及び「その他業務費用」に含まれております。

(*2) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

(*3) レベル2の時価からレベル3の時価への振替であり、時価の算定に使用しているインプットの観察可能性の変化によるものであります。当該振替は当連結会計年度末日に行っております。

当連結会計年度(2024年3月31日)

(単位：百万円)

	期首残高	当期の損益 又はその他の包括利益		購入、売却、 発行及び決済 の純額	レベル3の 時価への 振替	レベル3の 時価からの 振替	期末残高	当期の損益に 計上した額の うち連結 貸借対照表日 において保有 する金融資産 及び負債の 評価損益 (*1)
		損益に計上 (*1)	その他の 包括利益 に計上 (*2)					
有価証券								
その他有価証券								
社債	11,459	2	2	3,269			8,189	
外国債券	53,634	4	1,529	12,379			64,488	
その他			22	1,107			1,084	

(*1) 連結損益計算書の「その他業務収益」及び「その他業務費用」に含まれております。

(*2) 連結包括利益計算書の「その他の包括利益」の「その他有価証券評価差額金」に含まれております。

(3) 時価の評価プロセスの説明

当行グループはリスク管理部門において時価の算定に関する方針及び手続を定め、当該方針及び手続に沿って事務部門が時価評価モデルを策定しております。リスク管理部門は当該モデル、使用するインプット及び算定結果としての時価が方針及び手続に準拠しているか妥当性を確認しております。また、リスク管理部門は当該確認結果に基づき時価のレベルの分類について判断しております。第三者から入手した相場価格を時価として利用する場合には、使用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。

(4) 重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

割引率はリスク・フリー・レートやスワップ・レートなどの基準市場金利に対する調整率であり、主に信用リスクから生じる金融商品のキャッシュ・フローの不確実性に対し、市場参加者が必要とする報酬額であるリスク・プレミアムから構成されます。一般に、割引率の著しい上昇(低下)は、時価の著しい下落(上昇)を生じさせます。

(有価証券関係)

- 1 連結貸借対照表の「有価証券」のほか、「商品有価証券」及び「買入金銭債権」中の信託受益権を含めて記載しております。
- 2 「子会社株式及び関連会社株式」については、財務諸表における注記事項として記載しております。

1 売買目的有価証券

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
連結会計年度の損益に含まれた評価差額(百万円)	0	0

2 満期保有目的の債券

前連結会計年度(2023年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債			
	地方債			
	社債			
	その他			
	小計			
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債	66,958	61,806	5,152
	地方債			
	社債			
	その他			
	小計	66,958	61,806	5,152
合計		66,958	61,806	5,152

当連結会計年度(2024年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価(百万円)	差額(百万円)
時価が連結貸借対照表計上額を超えるもの	国債			
	地方債			
	社債			
	その他			
	小計			
時価が連結貸借対照表計上額を超えないもの	国債	66,960	58,695	8,264
	地方債			
	社債			
	その他			
	小計	66,960	58,695	8,264
合計		66,960	58,695	8,264

3 その他有価証券

前連結会計年度(2023年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えるもの	株式	267,227	82,563	184,663
	債券	214,445	211,130	3,315
	国債	82,915	80,784	2,130
	地方債	48,773	48,462	311
	社債	82,757	81,883	873
	その他	86,486	83,598	2,887
	小計	568,159	377,292	190,866
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えないもの	株式	13,717	14,410	692
	債券	581,086	595,456	14,370
	国債	174,350	181,991	7,640
	地方債	179,418	181,699	2,281
	社債	227,317	231,765	4,448
	その他	268,677	293,987	25,309
	小計	863,481	903,854	40,372
合計		1,431,641	1,281,146	150,494

当連結会計年度(2024年3月31日)

	種類	連結貸借対照表計上額 (百万円)	取得原価(百万円)	差額(百万円)
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えるもの	株式	334,826	93,789	241,036
	債券	229,177	228,113	1,063
	国債	144,568	144,086	482
	地方債	49,358	49,177	180
	社債	35,249	34,849	399
	その他	151,700	145,959	5,740
	小計	715,703	467,863	247,840
連結貸借対照表計 上額が取得原価を 超えないもの	株式	5,981	6,310	329
	債券	774,737	801,439	26,702
	国債	326,661	344,251	17,590
	地方債	182,430	184,785	2,355
	社債	265,645	272,402	6,756
	その他	271,383	307,230	35,846
	小計	1,052,101	1,114,980	62,878
合計		1,767,805	1,582,843	184,961

4 当連結会計年度中に売却した満期保有目的の債券
該当事項はありません。

5 当連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	53,825	17,616	985
債券	289,507	685	4,943
国債	272,955	678	4,898
地方債			
社債	16,552	7	44
その他	170,584	555	18,511
合計	513,917	18,857	24,440

当連結会計年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

種類	売却額(百万円)	売却益の合計額(百万円)	売却損の合計額(百万円)
株式	38,523	13,064	708
債券	179,540	1,189	5,155
国債	96,230	1,130	3,156
地方債	60,792	48	1,290
社債	22,517	9	708
その他	32,677	1,201	1,690
合計	250,741	15,455	7,554

6 保有目的を変更した有価証券
該当事項はありません。

7 減損処理を行った有価証券

売買目的有価証券以外の有価証券(市場価格のない株式等及び組合出資金を除く)のうち、当該有価証券の時価が取得原価に比べて著しく下落しており、時価が取得原価まで回復する見込があると認められないものについては、当該時価をもって連結貸借対照表計上額とするとともに、評価差額を当該連結会計年度の損失として処理(以下「減損処理」という。)しております。

前連結会計年度における減損処理額は0百万円(全額債券)であります。

当連結会計年度における減損処理額172百万円(全額株式)であります。

また、時価が「著しく下落した」と判断するための基準は、資産の自己査定基準において、有価証券の発行会社区分ごとに次のとおり定めております。

破綻先、実質破綻先及び破綻懸念先については連結決算日の時価が取得原価に比べて下落している場合、要注意先については連結決算日の時価が取得原価に比べて30%以上下落した場合、正常先については連結決算日の時価が取得原価に比べて50%以上下落した場合又は30%以上下落した場合で市場価格が一定水準以下で推移した場合であります。

なお、要注意先とは今後管理に注意を要する債務者、正常先とは破綻先、実質破綻先、破綻懸念先及び要注意先以外の債務者であります。

(金銭の信託関係)

1 運用目的の金銭の信託

前連結会計年度(2023年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	24,517	75

当連結会計年度(2024年3月31日)

	連結貸借対照表計上額(百万円)	連結会計年度の損益に含まれた評価差額 (百万円)
運用目的の金銭の信託	26,721	83

2 満期保有目的の金銭の信託

該当事項はありません。

3 その他の金銭の信託(運用目的及び満期保有目的以外)

前連結会計年度(2023年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えるもの (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えないもの (百万円)
その他の 金銭の信託	2,542	2,578	36		36

(注)「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

当連結会計年度(2024年3月31日)

	連結貸借対照表 計上額(百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えるもの (百万円)	うち連結貸借対照 表計上額が取得原 価を超えないもの (百万円)
その他の 金銭の信託	3,655	3,749	94		94

(注)「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの」「うち連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの」はそれぞれ「差額」の内訳であります。

(その他有価証券評価差額金)

連結貸借対照表に計上されているその他有価証券評価差額金の内訳は、次のとおりであります。

前連結会計年度(2023年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	150,169
その他有価証券	150,205
その他の金銭の信託	36
()繰延税金負債	42,384
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	107,785
()非支配株主持分相当額	
その他有価証券評価差額金	107,785

当連結会計年度(2024年3月31日)

	金額(百万円)
評価差額	184,579
その他有価証券	184,673
その他の金銭の信託	94
()繰延税金負債	52,711
その他有価証券評価差額金(持分相当額調整前)	131,867
()非支配株主持分相当額	
その他有価証券評価差額金	131,867

(デリバティブ取引関係)

1 ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごとの連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額、時価及び評価損益は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度(2023年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融 商品 取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
店頭	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ				
	受取固定・支払変動	11,077	5,683	66	66
	受取変動・支払固定	12,545	7,285	119	119
	受取変動・支払変動				
	金利オプション				
	売建				
	買建				
その他	売建				
	買建				
	合計			53	53

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

当連結会計年度(2024年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融商品取引所	金利先物				
	売建				
	買建				
	金利オプション				
店頭	売建				
	買建				
	金利先渡契約				
	売建				
	買建				
	金利スワップ				
	受取固定・支払変動	4,742	3,992	39	39
	受取変動・支払固定	6,408	5,658	142	142
	受取変動・支払変動				
	金利オプション				
	売建				
買建					
その他	売建				
	買建				
	合計			102	102

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

(2) 通貨関連取引

前連結会計年度(2023年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)	
金融商品取引所	通貨先物					
	売建					
	買建					
	通貨オプション					
店頭	売建					
	買建					
	通貨スワップ	40,542	33,509	5,190	5,190	
	為替予約					
	売建	70,892		830	830	
	買建	21,998		343	343	
	通貨オプション					
	売建	113,883	87,761	5,524	2,269	
	買建	113,883	87,761	5,375	2,858	
	その他	売建				
		買建				
	合計			5,826	5,087	

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

当連結会計年度(2024年3月31日)

区分	種類	契約額等(百万円)	契約額等のうち1年 超のもの(百万円)	時価(百万円)	評価損益(百万円)
金融 商品 取引所	通貨先物				
	売建				
	買建				
	通貨オプション				
店頭	売建				
	買建				
	通貨スワップ	62,271	47,690	7,867	7,867
	為替予約				
	売建	54,789	15	1,302	1,302
	買建	9,904	317	97	97
	通貨オプション				
	売建	139,260	111,016	4,208	28
	買建	139,260	111,016	4,178	813
	その他				
売建					
買建					
	合計			9,101	8,287

(注) 上記取引については時価評価を行い、評価損益を連結損益計算書に計上しております。

(3) 株式関連取引

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(5) 商品関連取引

該当事項はありません。

(6) クレジット・デリバティブ取引

該当事項はありません。

2 ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引について、取引の対象物の種類ごと、ヘッジ会計の方法別の連結決算日における契約額又は契約において定められた元本相当額及び時価は、次のとおりであります。なお、契約額等については、その金額自体がデリバティブ取引に係る市場リスクを示すものではありません。

(1) 金利関連取引

前連結会計年度（2023年3月31日）

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	金利スワップ	その他有価証券(債券)	312,847	312,847	22,428
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション				
その他					
金利スワップの特例処理	金利スワップ				
	受取固定・支払変動 受取変動・支払固定				
	合計				22,428

(注) 主として、繰延ヘッジによっております。

当連結会計年度（2024年3月31日）

ヘッジ会計の方法	種類	主なヘッジ対象	契約額等 (百万円)	契約額等のうち 1年超のもの (百万円)	時価 (百万円)
原則的処理方法	金利スワップ	その他有価証券(債券)、 預金	373,522	373,522	43,343
	受取固定・支払変動				
	受取変動・支払固定				
	金利先物				
	金利オプション				
その他					
金利スワップの特例処理	金利スワップ	貸出金			
	受取固定・支払変動 受取変動・支払固定		7,000	7,000	(注) 2
	合計				43,343

(注) 1. ヘッジ対象とヘッジ手段を紐付けする方法のほか、業種別委員会実務指針第24号に基づき、繰延ヘッジによっております。
2. 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸出金と一体として処理されているため、その時価は「(金融商品関係)」の当該貸出金の時価に含めて記載しております。

(2) 通貨関連取引

該当事項はありません。

(3) 株式関連取引

該当事項はありません。

(4) 債券関連取引

該当事項はありません。

(退職給付関係)

1 採用している退職給付制度の概要

当行及び連結子会社は、従業員の退職給付にあてるため、積立型、非積立型の確定給付制度を採用しております。当行の確定給付企業年金制度（規約型の積立型制度であります。）では、勤務期間等に基づいて一時金又は年金を支給しております。

当行の退職一時金制度（退職給付信託を設定した結果、すべて積立型制度となっております。）では、退職給付として勤務期間、役職等に基づいて一時金を支給しております。

当行は2017年10月1日に確定給付企業年金制度の一部について確定拠出年金制度へ移行しております。

なお、連結子会社が有する退職一時金制度（すべて非積立型制度であります。）は、簡便法により退職給付に係る負債及び退職給付費用を計算しております。

2 確定給付制度（簡便法を適用した制度を除く。）

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
退職給付債務の期首残高	47,217	42,143
勤務費用	1,709	1,466
利息費用	203	493
数理計算上の差異の発生額	4,508	1,110
退職給付の支払額	2,477	2,334
過去勤務費用の発生額		
退職給付債務の期末残高	42,143	40,658

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
年金資産の期首残高	60,540	61,793
期待運用収益	1,219	1,027
数理計算上の差異の発生額	349	2,717
事業主からの拠出額	1,697	1,655
退職給付の支払額	1,314	1,306
年金資産の期末残高	61,793	65,887

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	42,143	40,658
年金資産	61,793	65,887
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	19,650	25,228

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
退職給付に係る負債		
退職給付に係る資産	19,650	25,228
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	19,650	25,228

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
勤務費用	1,709	1,466
利息費用	203	493
期待運用収益	1,219	1,027
数理計算上の差異の損益処理額	1,733	1,877
過去勤務費用の損益処理額		
確定給付制度に係る退職給付費用	1,039	944

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
過去勤務費用		
数理計算上の差異	2,425	1,950
合計	2,425	1,950

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次のとおりであります。

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
未認識過去勤務費用		
未認識数理計算上の差異	11,996	13,947
合計	11,996	13,947

(7) 年金資産に関する事項

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
債券	12%	12%
株式	60%	61%
現金及び預金	10%	9%
一般勘定	18%	18%
合計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度及び退職一時金制度に対して設定した退職給付信託(主として株式5銘柄で構成)が前連結会計年度は52%、当連結会計年度は48%含まれております。

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率は、年金資産の資産構成を踏まえ、それぞれの資産から長期的に期待される収益を考慮して設定しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項
主要な数理計算上の計算基礎

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
割引率	1.17%	1.17%
長期期待運用収益率		
年金資産(退職給付信託除く)	4.19%	3.48%
年金資産(退職給付信託)	0.00%	0.00%
予想昇給率	4.10%	3.90%

3 簡便法を適用した確定給付制度

(1) 簡便法を適用した制度の退職給付に係る負債の期首残高と期末残高の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
退職給付に係る負債の期首残高	157	159
退職給付費用	20	24
退職給付の支払額	18	15
制度への拠出額		
退職給付に係る負債の期末残高	159	168

(2) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
非積立型制度の退職給付債務	159	168
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	159	168

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
退職給付に係る負債	159	168
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	159	168

(3) 退職給付費用

(百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
簡便法で計算した退職給付費用	20	24

4 確定拠出制度

当行の確定拠出制度への要拠出額は、前連結会計年度338百万円、当連結会計年度332百万円であります。

(ストック・オプション等関係)

1 スtock・オプションにかかる費用計上額及び科目名

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月31日)
営業経費	17	

2 スtock・オプションの内容、規模及びその変動状況

該当事項はありません。

3 スtock・オプションの公正な評価単価の見積方法

該当事項はありません。

4 スtock・オプションの権利確定数の見積方法

該当事項はありません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	11,009百万円	11,088百万円
有価証券評価損	4,295百万円	4,149百万円
退職給付に係る負債	262百万円	57百万円
減価償却費	6,173百万円	9,666百万円
未払事業税	154百万円	421百万円
その他	2,010百万円	2,267百万円
繰延税金資産小計	23,906百万円	27,650百万円
評価性引当額	12,174百万円	12,889百万円
繰延税金資産合計	11,731百万円	14,761百万円
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	184百万円	184百万円
その他有価証券評価差額金	42,384百万円	52,711百万円
退職給付に係る調整累計額	3,652百万円	4,246百万円
退職給付に係る資産	百万円	778百万円
繰延ヘッジ損益	6,829百万円	13,198百万円
繰延税金負債合計	53,052百万円	71,119百万円
繰延税金負債の純額	41,320百万円	56,358百万円

2 連結財務諸表提出会社の法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
法定実効税率	30.4%	30.4%
(調整)		
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	3.6%	1.9%
試験研究費等の税額控除	3.3%	%
評価性引当額の増減	2.4%	3.0%
その他	0.4%	1.3%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	26.3%	32.8%

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
経常収益	115,289	122,630
うち役務取引等収益	17,651	19,995
預金・貸出業務	4,003	5,812
為替業務	2,843	3,017
信託関連業務	135	160
証券関連業務	234	131
代理業務	313	298
保護預り・貸金庫業務	113	108
保証業務	1,007	951
カード業務	3,228	3,324
投資信託・保険販売業務	4,100	4,359
その他	1,670	1,830
うち信託報酬	0	0

上表には、企業会計基準第10号「金融商品に関する会計基準」に基づく収益も含んでおります。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【関連情報】

前連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	38,669	38,275	17,651	20,693	115,289

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

当連結会計年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

1 サービスごとの情報

(単位：百万円)

	貸出業務	有価証券投資業務	役務取引業務	その他	合計
外部顧客に対する 経常収益	44,679	40,501	19,995	17,454	122,630

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

2 地域ごとの情報

(1) 経常収益

当行グループは、本邦の外部顧客に対する経常収益に区分した金額が連結損益計算書の経常収益の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

当行グループは、本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3 主要な顧客ごとの情報

特定の顧客に対する経常収益で連結損益計算書の経常収益の10%以上を占めるものがないため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

当行グループは、銀行業の単一セグメントであるため、記載を省略しております。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

1 関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の役員及び主要株主(個人の場合に限る。)等

前連結会計年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

種類	会社等の名称 又は氏名	所在地	資本金又は 出資金 (百万円)	事業の内容 又は職業	議決権等 の所有 (被所有) 割合(%)	関連当事者 との関係	取引の内容	取引金額 (百万円)	科目	期末残高 (百万円)
役員及び その近親 者が議決 権等の過 半数を所 有してい る会社	高木ビル 有限公司 (注1)	滋賀県 彦根市	3	不動産賃貸 管理業		金銭貸借取引	資金の貸付 (純額)	3	貸出金	82
							(注2,3)		その他負債	0
							利息の受取	0		
							手数料等の受取	0		

取引条件及び取引条件の決定方針等

(注1) 当行取締役 西川勝之(2023年6月27日付で任期満了により退任)の近親者が議決権の100%を直接保有しております。

(注2) 資金の貸付については、市場金利を勘案して一般的取引条件と同様に決定しております。

(注3) 「取引の内容」欄の資金の貸付(純額)については、当連結会計年度末残高と前連結会計年度末残高の純増減額を記載しております。

当連結会計年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

該当事項はありません。

2 親会社又は重要な関連会社に関する注記

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
1株当たり純資産額	9,293円39銭	10,459円88銭
1株当たり当期純利益	310円57銭	336円31銭
潜在株式調整後1株当たり当期純利益	310円49銭	

(注) 1. 当連結会計年度の潜在株式調整後1株当たり当期純利益は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 1株当たり情報の算定上の基礎は、次のとおりであります。

(1) 1株当たり純資産額

		前連結会計年度 (2023年3月31日)	当連結会計年度 (2024年3月31日)
純資産の部の合計額	百万円	441,222	490,887
純資産の部の合計額から控除する金額	百万円		
(うち新株予約権)	百万円		
普通株式に係る期末の純資産額	百万円	441,222	490,887
1株当たり純資産額の算定に用いられた期末の普通株式の数	千株	47,476	46,930

(2) 1株当たり当期純利益及び潜在株式調整後1株当たり当期純利益

		前連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当連結会計年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	14,858	15,940
普通株主に帰属しない金額	百万円		
普通株式に係る親会社株主に帰属する当期純利益	百万円	14,858	15,940
普通株式の期中平均株式数	千株	47,841	47,397
潜在株式調整後1株当たり当期純利益			
親会社株主に帰属する当期純利益調整額	百万円		
普通株式増加数	千株	11	
(うち新株予約権)	千株	11	
希薄化効果を有しないため、潜在株式調整後1株当たり当期純利益の算定に含めなかった潜在株式の概要			

(重要な後発事象)

(子会社の設立)

当行は、2024年2月22日開催の取締役会において、当行が100%出資する子会社の設立を決議し、2024年4月1日付で株式会社しがぎんエナジーを設立いたしました。

1. 設立の目的

G X (グリーン・トランスフォーメーション)の取り組みを通じて地域の課題をエネルギーの観点から解決し、経済と環境の好循環を生み出すことを目的として株式会社しがぎんエナジーを設立いたしました。

2. 子会社の概要

- | | |
|-----------|---|
| (1) 名称 | 株式会社しがぎんエナジー |
| (2) 所在地 | 大津市浜町1番38号(当行本店敷地内) |
| (3) 資本金 | 1億円(当行100%出資) |
| (4) 設立年月日 | 2024年4月1日 |
| (5) 事業内容 | <ul style="list-style-type: none">・企業および行政のG X、S Xに向けたコンサルティング事業・太陽光発電設備を活用したオンサイト・オフサイトP P A事業・太陽光発電所の取得・運営事業・環境価値に関する事業(環境価値の創出、売買、仲介等)・脱炭素、資源循環に関連する事業会社への投資事業 |

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
借入金	538,456	882,628	0.75	
借入金	538,456	882,628	0.75	2024年4月 ~2030年12月

(注) 1 「平均利率」は、期末日現在の「利率」及び「当期末残高」により算出(加重平均)しております。
2 借入金の連結決算日後5年以内における返済額は次のとおりであります。

	1年以内	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
借入金(百万円)	198,523	40,125	263,093	365,393	10,793

銀行業は、預金の受入れ、コール・手形市場からの資金の調達・運用等を営業活動として行っているため、借入金等明細表については連結貸借対照表中「負債の部」の「借入金」を記載しております。

(参考) なお、営業活動として資金調達を行っている約束手形方式によるコマーシャル・ペーパーの発行はありません。

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、資産除去債務明細表の記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
経常収益 (百万円)	33,108	58,793	91,024	122,630
税金等調整前四半期(当期)純利益金額 (百万円)	13,429	17,999	25,670	23,735
親会社株主に帰属する四半期(当期)純利益金額 (百万円)	9,683	12,518	17,807	15,940
1株当たり四半期(当期)純利益金額 (円)	203.95	263.64	375.04	336.31

(注) 一般企業の売上高に代えて、経常収益を記載しております。

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額又は1株当たり四半期純損失金額 (円)	203.95	59.70	111.39	39.60

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
資産の部		
現金預け金	1,201,831	1,359,939
現金	39,930	33,879
預け金	1,161,901	1,326,060
コールローン	17,759	5,753
買入金銭債権	2,514	1,968
商品有価証券	488	459
商品国債	117	42
商品地方債	371	417
金銭の信託	27,059	30,376
有価証券	1, 3, 5 1,518,879	1, 3, 5 1,860,529
国債	2 324,224	2 538,190
地方債	228,191	231,788
社債	8 310,074	8 300,895
株式	287,682	348,733
その他の証券	368,706	440,921
貸出金	3, 5, 6 4,360,257	3, 5, 6 4,495,122
割引手形	4 5,793	4 8,322
手形貸付	72,600	69,385
証書貸付	3,862,747	3,968,623
当座貸越	419,115	448,791
外国為替	3 6,730	3 6,193
外国他店預け	6,258	5,840
買入外国為替	4 0	-
取立外国為替	471	352
その他資産	3, 5 87,034	3, 5 125,738
前払費用	234	230
未収収益	5,553	7,827
先物取引差入証拠金	1,310	933
金融派生商品	30,135	49,071
その他の資産	49,801	67,674
有形固定資産	7 52,115	7 47,388
建物	13,544	13,136
土地	31,965	31,369
建設仮勘定	4,531	703
その他の有形固定資産	2,074	2,178
無形固定資産	2,034	1,237
ソフトウェア	400	177
ソフトウェア仮勘定	1,470	896
その他の無形固定資産	163	163
前払年金費用	7,653	11,281
支払承諾見返	3 28,226	3 29,340
貸倒引当金	30,620	31,130
資産の部合計	7,281,966	7,944,199

(単位：百万円)

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
負債の部		
預金	5 5,718,288	5 5,808,311
当座預金	248,146	269,159
普通預金	3,354,656	3,523,250
貯蓄預金	18,573	18,509
通知預金	55,454	33,613
定期預金	1,956,610	1,898,521
その他の預金	84,847	65,257
譲渡性預金	44,152	38,370
コールマネー	237,906	346,092
債券貸借取引受入担保金	5 205,572	5 241,330
借入金	5 537,871	5 882,398
借入金	537,871	882,398
外国為替	377	92
売渡外国為替	172	47
未払外国為替	205	44
信託勘定借	10 187	10 184
その他負債	45,410	71,692
未払法人税等	402	6,797
未払費用	6,218	8,711
前受収益	1,191	509
金融派生商品	13,479	14,727
資産除去債務	13	594
その他の負債	9 24,104	9 40,351
偶発損失引当金	140	196
繰延税金負債	37,993	52,429
再評価に係る繰延税金負債	5,495	5,463
支払承諾	28,226	29,340
負債の部合計	6,861,621	7,475,901

(単位：百万円)

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
純資産の部		
資本金	33,076	33,076
資本剰余金	23,946	23,946
資本準備金	23,942	23,942
その他資本剰余金	3	4
利益剰余金	246,651	258,197
利益準備金	9,134	9,134
その他利益剰余金	237,516	249,062
固定資産圧縮積立金	422	422
別途積立金	220,593	230,893
繰越利益剰余金	16,500	17,746
自己株式	14,488	16,476
株主資本合計	289,185	298,744
その他有価証券評価差額金	107,247	131,167
繰延ヘッジ損益	15,599	30,145
土地再評価差額金	8,312	8,240
評価・換算差額等合計	131,159	169,552
純資産の部合計	420,344	468,297
負債及び純資産の部合計	7,281,966	7,944,199

【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月31日)	当事業年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月31日)
経常収益	103,401	110,306
資金運用収益	59,005	75,151
貸出金利息	38,054	44,433
有価証券利息配当金	19,994	25,998
コールローン利息	139	170
預け金利息	711	1,493
金利スワップ受入利息	11	2,948
その他の受入利息	93	106
信託報酬	0	0
役務取引等収益	15,015	17,370
受入為替手数料	2,869	3,037
その他の役務収益	12,146	14,332
その他業務収益	9,947	2,584
商品有価証券売買益	-	1
国債等債券売却益	870	1,614
金融派生商品収益	9,075	943
その他の業務収益	1	24
その他経常収益	19,432	15,200
償却債権取立益	615	252
株式等売却益	18,381	13,861
金銭の信託運用益	136	709
その他の経常収益	298	377
経常費用	84,559	87,176
資金調達費用	9,006	18,987
預金利息	1,185	2,037
譲渡性預金利息	9	7
コールマネー利息	1,711	4,651
債券貸借取引支払利息	3,072	5,124
借入金利息	3,030	7,091
その他の支払利息	3	74
役務取引等費用	4,986	5,822
支払為替手数料	307	322
その他の役務費用	4,679	5,500
その他業務費用	24,467	8,405
外国為替売買損	836	1,717
商品有価証券売買損	1	-
国債等債券売却損	23,426	6,687
国債等債券償還損	198	-
国債等債券償却	0	-
その他の業務費用	4	0
営業経費	1 42,785	1 49,349

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	当事業年度 (自 2023年 4月 1日 至 2024年 3月 31日)
その他経常費用	3,313	4,610
貸倒引当金繰入額	1,060	2,301
貸出金償却	987	785
株式等売却損	1,014	866
株式等償却	37	255
金銭の信託運用損	70	4
その他の経常費用	143	397
経常利益	18,841	23,130
特別利益	209	1
固定資産処分益	209	1
特別損失	82	233
固定資産処分損	82	86
減損損失	-	146
税引前当期純利益	18,968	22,899
法人税、住民税及び事業税	4,092	9,358
法人税等調整額	464	2,205
法人税等合計	4,557	7,152
当期純利益	14,411	15,746

【株主資本等変動計算書】

前事業年度(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本										
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金			自己株式	株主資本合計	
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計		その他利益剰余金					利益剰余金合計
					固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	33,076	23,942	-	23,942	9,134	400	208,993	18,605	237,134	11,619	282,534
当期変動額											
剰余金の配当								4,951	4,951		4,951
固定資産圧縮積立金の積立						22		22	-		
別途積立金の積立							11,600	11,600	-		
当期純利益								14,411	14,411		14,411
自己株式の取得										3,002	3,002
自己株式の処分			3	3						133	137
土地再評価差額金の取崩								56	56		56
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)											
当期変動額合計	-	-	3	3	-	22	11,600	2,105	9,516	2,869	6,651
当期末残高	33,076	23,942	3	23,946	9,134	422	220,593	16,500	246,651	14,488	289,185

	評価・換算差額等				新株予約権	純資産合計
	その他有価証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計		
当期首残高	148,402	6,045	8,369	162,817	103	445,455
当期変動額						
剰余金の配当						4,951
固定資産圧縮積立金の積立						
別途積立金の積立						
当期純利益						14,411
自己株式の取得						3,002
自己株式の処分						137
土地再評価差額金の取崩						56
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)	41,155	9,553	56	31,658	103	31,761
当期変動額合計	41,155	9,553	56	31,658	103	25,110
当期末残高	107,247	15,599	8,312	131,159	-	420,344

当事業年度(自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)

(単位：百万円)

	株主資本										
	資本金	資本剰余金			利益剰余金					自己株式	株主資本 合計
		資本 準備金	その他 資本 剰余金	資本 剰余金 合計	利益 準備金	その他利益剰余金			利益 剰余金 合計		
						固定資産 圧縮 積立金	別途 積立金	繰越利益 剰余金			
当期首残高	33,076	23,942	3	23,946	9,134	422	220,593	16,500	246,651	14,488	289,185
当期変動額											
剰余金の配当								4,273	4,273		4,273
別途積立金の積立							10,300	10,300	-		
当期純利益								15,746	15,746		15,746
自己株式の取得										2,007	2,007
自己株式の処分			0	0						20	20
土地再評価差額金の 取崩								72	72		72
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）											
当期変動額合計	-	-	0	0	-	-	10,300	1,245	11,545	1,987	9,558
当期末残高	33,076	23,942	4	23,946	9,134	422	230,893	17,746	258,197	16,476	298,744

	評価・換算差額等				純資産 合計
	その他 有価証券 評価 差額金	繰延 ヘッジ 損益	土地 再評価 差額金	評価・ 換算差額 等合計	
当期首残高	107,247	15,599	8,312	131,159	420,344
当期変動額					
剰余金の配当					4,273
別途積立金の積立					
当期純利益					15,746
自己株式の取得					2,007
自己株式の処分					20
土地再評価差額金の 取崩					72
株主資本以外の項目 の当期変動額（純 額）	23,920	14,546	72	38,393	38,393
当期変動額合計	23,920	14,546	72	38,393	47,952
当期末残高	131,167	30,145	8,240	169,552	468,297

上記以外の債務者のうち、業況が良好であり、かつ財務内容にも特段の問題がないと認められる債務者（以下「正常先」という。）及び貸出条件に問題のある債務者、履行状況に問題のある債務者、業況が低調ないし不安定な債務者又は財務内容に問題がある債務者など今後の管理に注意を要する債務者（以下「要注意先」という。）に係る債権については、今後1年間の予想損失額を、要注意先のうち当該債務者の債権の全部又は一部が要管理債権（貸出条件緩和債権及び三月以上延滞債権）である債務者の債権については今後3年間の予想損失額を見込んで計上しており、予想損失額は、1年間又は3年間の貸倒実績を基礎とした貸倒実績率の過去の一定期間における平均値に基づき損失率を求め、これに将来見込み等必要な修正の検討を行い、算定しております。

将来見込み等による予想損失率の必要な修正及び決定方法

引当金の算定に使用する予想損失率は、直近3算定期間の平均値と景気循環サイクルを勘案した長期平均値を比較のうえ決定しております。このうち、直近3算定期間の平均値は、足元の状況及び将来見込み等必要な修正の検討を行い、算定しております。

すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、営業関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立したリスク管理部署が自己査定結果及び償却・引当の適切性について検証しております。

なお、破綻先及び実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額及び保証による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は8,362百万円(前事業年度末は8,161百万円)であります。

(2) 退職給付引当金

退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき、必要額を計上しております。また、退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については給付算定式基準によっております。なお、過去勤務費用及び数理計算上の差異の損益処理方法は次のとおりであります。

過去勤務費用：その発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により損益処理
数理計算上の差異：各事業年度の発生時の従業員の平均残存勤務期間内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から損益処理

(3) 偶発損失引当金

偶発損失引当金は、他の引当金で引当対象とした事象以外の偶発事象に対し、将来発生する可能性のある損失を見積もり、必要と認められる額を計上しております。

6. 外貨建の資産及び負債の本邦通貨への換算基準

外貨建の資産・負債及び海外支店勘定は、決算日の為替相場による円換算額を付しております。

7. ヘッジ会計の方法

(1) 金利リスク・ヘッジ

金融資産・負債から生じる金利リスクに対するヘッジ会計の方法は、繰延ヘッジによっており、ヘッジ対象とヘッジ手段を紐付けする方法のほか、「銀行業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第24号 令和4年3月17日。以下「業種別委員会実務指針第24号」という。）に基づき処理しております。

ヘッジ有効性評価の方法については、その他有価証券に区分している固定金利の債券の相場変動を相殺するヘッジにおいては、同一種類毎にヘッジ対象を識別し、金利スワップ取引をヘッジ手段として指定しておりますが、ヘッジ対象とヘッジ手段に関する重要な条件がほぼ同一となるようなヘッジ指定を行っているため、高い有効性があるとみなしており、これをもって有効性の判定に代えております。

また、キャッシュ・フローを固定するヘッジについては、ヘッジ対象とヘッジ手段の金利変動要素の相関関係の検証により有効性の評価をしております。

なお、一部の資産については、金利スワップの特例処理を行っており、ヘッジの有効性の評価については、特例処理の要件の判定をもって有効性の判定に代えております。

(2) 為替変動リスク・ヘッジ

外貨建金融資産・負債から生じる為替変動リスクに対するヘッジ会計の方法は、「銀行業における外貨建取引等の会計処理に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会業種別委員会実務指針第25号 令和2年10月8日）に規定する繰延ヘッジによっております。

ヘッジ有効性評価の方法については、外貨建金銭債権債務等の為替変動リスクを減殺する目的で行う資金関連スワップ取引をヘッジ手段とし、ヘッジ対象である外貨建金銭債権債務等に見合うヘッジ手段の外貨ポジション相当額が存在することを確認することによりヘッジの有効性を評価しております。

資金関連スワップ取引とは、異なる通貨での資金調達・運用を動機として行われ、当該資金の調達又は運用に係る元本相当額を直物買為替又は直物売為替とし、当該元本相当額に将来支払うべき又は支払を受けるべき金額・期日の確定している外貨相当額を含めて先物買為替又は先物売為替とした為替スワップ取引であります。

また、外貨建有価証券（債券以外）の為替変動リスクをヘッジするため、事前にヘッジ対象となる外貨建有価証券の銘柄を特定し、当該外貨建有価証券について外貨ベースで取得原価以上の直先負債が存在していること等を条件に包括ヘッジとして時価ヘッジを適用しております。

8. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

会計上の見積りにより当事業年度に係る財務諸表にその額を計上した項目であって、翌事業年度に係る財務諸表に重要な影響を及ぼす可能性があるものは、次の通りであります。

1. 貸倒引当金

(1) 当事業年度並びに前事業年度に係る財務諸表に計上した金額

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
貸倒引当金	30,620百万円	31,130百万円

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する理解に資する情報

算定方法

貸倒引当金の算定方法は、『注記事項』の(重要な会計方針)「5. 引当金の計上基準」の「(1)貸倒引当金」に記載しております。また、下記仮定のもと、当該影響により予想される損失に備えるため、貸出先の債務者区分を足元の業績悪化の状況及び財務情報等には未だ反映されていない影響に係る見積りに基づき修正して貸倒引当金を計上しております。なお、新型コロナウイルス感染症による影響を受けている特定業種の一部の貸出先については、貸倒実績率に必要な修正を加えた予想損失率によって追加的に貸倒引当金を計上しております。

主要な仮定

主要な仮定は「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」であります。「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」は、各債務者の収益獲得能力を個別に評価し、設定しております。なお、「債務者区分の判定における貸出先の将来の業績見通し」に重要な影響を与える可能性のある新型コロナウイルス感染症の影響については、感染症法上の位置づけが5類に移行し、各種経済活動も概ね正常化しているものの、特定業種の一部の取引先においては未だ影響が完全に消失したとは言えない状況にあり、これらの取引先に対する貸出金等に内包される信用リスクは引き続き相対的に高い状況であると仮定しております。

翌事業年度に係る財務諸表に及ぼす影響

当行は厳格な自己査定を実施し、必要と認める貸倒引当金を計上する等の対応を行っておりますが、上記仮定は不確実性が高いため、当初の見積りに用いた仮定が変化した場合は、翌事業年度(2025年3月期)以降の財務諸表における貸倒引当金に重要な影響を及ぼす可能性があります。

なお、債務者区分の決定において、貸出先の経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合には、より不確実性が高くなる可能性があります。

(貸借対照表関係)

1 関係会社の株式又は出資金の総額

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
株式	5,753百万円	5,753百万円
出資金	269百万円	7百万円

2 無担保の消費貸借契約(債券貸借取引)により貸し付けている有価証券が国債に含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
	52,819百万円	52,828百万円

3 銀行法及び金融機能の再生のための緊急措置に関する法律に基づく債権は次のとおりであります。なお、債権は、貸借対照表の「有価証券」中の社債(その元本の償還及び利息の支払の全部又は一部について保証しているものであって、当該社債の発行が有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)によるものに限る。)、貸出金、外国為替、「その他資産」中の未収利息及び仮払金並びに支払承諾見返の各勘定に計上されるもの並びに注記されている有価証券の貸付けを行っている場合のその有価証券(使用貸借又は賃貸借契約によるものに限る。)であります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
破産更生債権及びこれらに準ずる債権額	2,697百万円	2,762百万円
危険債権額	48,314百万円	51,666百万円
三月以上延滞債権額	68百万円	119百万円
貸出条件緩和債権額	33,336百万円	29,975百万円
合計額	84,416百万円	84,524百万円

破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始、再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。

危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しないものであります。

三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が約定支払日の翌日から三月以上遅延している貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権並びに危険債権に該当しないものであります。

貸出条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他の債務者に有利となる取決めを行った貸出金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権並びに三月以上延滞債権に該当しないものであります。

なお、上記債権額は、貸倒引当金控除前の金額であります。

4 手形割引は、業種別委員会実務指針第24号に基づき金融取引として処理しております。これにより受け入れた商業手形及び買入外国為替は、売却又は(再)担保という方法で自由に処分できる権利を有しておりますが、その額面金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
	5,935百万円	8,464百万円

5 担保に供している資産は次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
担保に供している資産		
有価証券	656,024百万円	975,359百万円
貸出金	199,653百万円	283,925百万円
計	855,678百万円	1,259,284百万円
担保資産に対応する債務		
預金	25,115百万円	12,547百万円
債券貸借取引受入担保金	205,572百万円	241,330百万円
借入金	533,391百万円	877,226百万円

上記のほか、為替決済等の取引の担保あるいは先物取引証拠金等の代用として、次のものを差し入れております。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
その他資産(中央清算機関等差入 証拠金)	43,553百万円	45,696百万円

また、その他の資産には、保証金が含まれておりますが、その金額は次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
保証金	378百万円	377百万円

なお、手形の再割引は、業種別委員会実務指針第24号に基づき金融取引として処理しておりますが、これにより引き渡した商業手形及び買入外国為替はありません。

6 当座貸越契約及び貸付金に係るコミットメントライン契約は、顧客からの融資実行の申し出を受けた場合に、契約上規定された条件について違反がない限り、一定の限度額まで資金を貸付けることを約する契約であります。これらの契約に係る融資未実行残高は次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
融資未実行残高	1,012,030百万円	1,021,410百万円
うち原契約が1年以内のもの (又は任意の時期に無条件で取消 可能なもの)	908,632百万円	907,614百万円

なお、これらの契約の多くは、融資実行されずに終了するものであるため、融資未実行残高そのものが必ずしも当行の将来のキャッシュ・フローに影響を与えるものではありません。これらの契約の多くには、金融情勢の変化、債権の保全及びその他相当の事由があるときは、当行が実行申し込みを受けた融資の拒絶又は契約極度額の減額をすることができる旨の条項が付けられております。また、契約時において必要に応じて不動産・有価証券等の担保を徴求するほか、契約後も定期的に予め定めている行内手続に基づき顧客の業況等を把握し、必要に応じて契約の見直し、与信保全上の措置等を講じております。

7 有形固定資産の圧縮記帳額

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
圧縮記帳額 (当該事業年度の圧縮記帳額)	3,487百万円 (百万円)	3,487百万円 (百万円)

8 「有価証券」中の社債のうち、有価証券の私募(金融商品取引法第2条第3項)による社債に対する保証債務の額

前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
11,026百万円	8,214百万円

9 取締役及び監査役との間の取引による取締役及び監査役に対する金銭債務総額

前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
12百万円	12百万円

10 元本補填契約のある信託の元本金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
金銭信託	187百万円	184百万円

(損益計算書関係)

1 「営業経費」には、次のものを含んでおります。

なお、基幹系システム関連費用の前事業年度の計上額には研究開発費4,888百万円が含まれております。また、当事業年度の計上額には、当事業年度末までに基幹系システム関連資産として計上していた金額の一部を費用振替した6,783百万円が含まれております。

	前事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	当事業年度 (自 2023年4月1日 至 2024年3月31日)
基幹系システム関連費用	6,434百万円	11,498百万円

(有価証券関係)

子会社株式及び関連会社株式で時価のあるものはありません。

(注) 市場価格のない株式等の貸借対照表計上額

(単位：百万円)

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
子会社株式	5,753	5,753
関連会社株式		

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
繰延税金資産		
貸倒引当金	10,534百万円	10,606百万円
有価証券評価損	4,272百万円	4,115百万円
退職給付引当金	207百万円	百万円
減価償却費	6,173百万円	9,666百万円
未払事業税	125百万円	385百万円
その他	2,024百万円	2,223百万円
繰延税金資産小計	23,338百万円	26,997百万円
評価性引当額	12,357百万円	13,063百万円
繰延税金資産合計	10,981百万円	13,934百万円
繰延税金負債		
固定資産圧縮積立金	184百万円	184百万円
その他有価証券評価差額金	41,960百万円	52,202百万円
繰延ヘッジ損益	6,829百万円	13,198百万円
前払年金費用	百万円	778百万円
繰延税金負債合計	48,974百万円	66,363百万円
繰延税金負債の純額	37,993百万円	52,429百万円

2 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主な項目別の内訳

	前事業年度 (2023年3月31日)	当事業年度 (2024年3月31日)
法定実効税率	30.4%	30.4%
(調整)		
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	5.4%	3.3%
試験研究費等の税額控除	3.6%	%
評価性引当額の増減	2.6%	3.1%
その他	0.0%	1.0%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	24.0%	31.2%

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

(子会社の設立)

当行は、2024年2月22日開催の取締役会において、当行が100%出資する子会社の設立を決議し、2024年4月1日付で株式会社しがぎんエナジーを設立いたしました。

1. 設立の目的

G X (グリーン・トランスフォーメーション)の取り組みを通じて地域の課題をエネルギーの観点から解決し、経済と環境の好循環を生み出すことを目的として株式会社しがぎんエナジーを設立いたしました。

2. 子会社の概要

- (1) 名称 株式会社しがぎんエナジー
- (2) 所在地 大津市浜町1番38号(当行本店敷地内)
- (3) 資本金 1億円(当行100%出資)
- (4) 設立年月日 2024年4月1日
- (5) 事業内容
 - ・企業および行政のG X、S Xに向けたコンサルティング事業
 - ・太陽光発電設備を活用したオンサイト・オフサイトP P A事業
 - ・太陽光発電所の取得・運営事業
 - ・環境価値に関する事業(環境価値の創出、売買、仲介等)
 - ・脱炭素、資源循環に関連する事業会社への投資事業

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

資産の種類	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (百万円)	当期末残高 (百万円)	当期末減価 償却累計額 又は償却 累計額 (百万円)	当期償却額 (百万円)	差 引 当期末残高 (百万円)
有形固定資産							
建物	(4) 49,423	997	796 (37)	49,624	36,487	1,364	13,136
土地	31,965 [13,807]		596 (101) [104]	31,369 [13,703]			31,369
建設仮勘定	4,531	108	3,935	703			703
その他の有形固定 資産	(2) 13,111	853	838 (7)	13,125	10,947	741	2,178
有形固定資産計	(7) 99,031	1,959	6,167 (146)	94,823	47,435	2,105	47,388
無形固定資産							
ソフトウェア				4,842	4,664	222	177
ソフトウェア 仮勘定				896			896
その他の無形固定 資産				164	1		163
無形固定資産計				5,903	4,665	222	1,237
その他							

- (注) 1 当期首残高欄における()内は為替換算差額であります。
2 当期減少額欄における()内は減損損失の計上額(内書き)であります。
3 当期首残高欄及び当期末残高欄における[]内は、土地再評価差額(再評価に係る繰延税金負債控除前)の残高であります。なお、当期減少額欄における[]内は土地再評価差額(再評価に係る繰延税金負債控除前)の減少であり、土地の売却及び減損損失の計上によるものであります。
4 無形固定資産の金額が資産の総額の1%以下であるため、「当期首残高」「当期増加額」及び「当期減少額」の記載を省略しております。

【引当金明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
貸倒引当金	30,620	31,130	1,790	28,829	31,130
一般貸倒引当金	10,415	9,799		10,415	9,799
個別貸倒引当金	20,204	21,331	1,790	18,414	21,331
うち非居住者向け債権分					
特定海外債権引当勘定					
偶発損失引当金	140	196		140	196
計	30,760	31,327	1,790	28,970	31,327

(注) 貸倒引当金(一般貸倒引当金、個別貸倒引当金)及び偶発損失引当金の当期減少額(その他)欄に記載の減少額は洗替による取崩額であります。

未払法人税等

区分	当期首残高 (百万円)	当期増加額 (百万円)	当期減少額 (目的使用) (百万円)	当期減少額 (その他) (百万円)	当期末残高 (百万円)
未払法人税等	402	8,283	1,888		6,797
未払法人税等	432	6,402	1,304		5,530
未払事業税	29	1,881	584		1,266

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6 【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで							
定時株主総会	6月中							
基準日	3月31日							
剰余金の配当の基準日	9月30日、3月31日							
1単元の株式数	100株							
単元未満株式の買取り・ 売渡し								
取扱場所	(特別口座) 大阪市中央区伏見町三丁目6番3号 三菱UFJ信託銀行株式会社大阪証券代行部							
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社							
取次所								
買取り・ 売渡し手数料	当行所定の算式により1単元あたりの金額を算定し、これを買取請求又は売渡請求に係る単元未満株式の数で按分した金額に消費税相当額を加算した額							
公告掲載方法	電子公告により当行ホームページに掲載いたします。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載いたします。 (公告掲載URL https://www.shigagin.com/)							
株主に対する特典	<p>毎年3月31日時点の株主名簿に登録された当行株式200株以上を1年以上継続保有いただいている株主さまを対象とし、保有株式数に応じて次のカタログのいずれかからお好みの商品をお選びいただけます。</p> <p>1. 地元滋賀県の特産品を中心に掲載した専用カタログ 2. T S U B A S A アライアンス共同企画カタログ</p> <p>なお、「1年以上継続保有いただいている株主さま」とは、毎年3月31日及び9月30日現在の当行株主名簿に、同一株主番号で連続して3回以上記録されている株主さまといたします。</p> <table border="1" data-bbox="432 1350 1310 1485"> <thead> <tr> <th>保有株式数</th> <th>優待商品</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>200株以上1,000株未満</td> <td>3,000円相当</td> </tr> <tr> <td>1,000株以上</td> <td>6,000円相当</td> </tr> </tbody> </table>		保有株式数	優待商品	200株以上1,000株未満	3,000円相当	1,000株以上	6,000円相当
保有株式数	優待商品							
200株以上1,000株未満	3,000円相当							
1,000株以上	6,000円相当							

(注) 当行の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができない旨を定款に定めております。

1. 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
2. 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
3. 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
4. 株主の有する単元未満株式の数と併せて単元株式数となる数の株式を売り渡すことを請求する権利

第7 【提出会社の参考情報】

1 【提出会社の親会社等の情報】

当行は、法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2 【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | | |
|-----|-------------------------------|---|---------------------------------|--|
| (1) | 有価証券報告書
及びその添付書類
並びに確認書 | 事業年度
(第136期) | (自 2022年4月1日
至 2023年3月31日) | 2023年6月12日
関東財務局長に提出。 |
| (2) | 内部統制報告書 | | | 2023年6月12日
関東財務局長に提出。 |
| (3) | 四半期報告書及び確認書 | 事業年度
(第137期第1四半期) | (自 2023年4月1日
至 2023年6月30日) | 2023年8月4日
関東財務局長に提出。 |
| | | 事業年度
(第137期第2四半期) | (自 2023年7月1日
至 2023年9月30日) | 2023年11月22日
関東財務局長に提出。 |
| | | 事業年度
(第137期第3四半期) | (自 2023年10月1日
至 2023年12月31日) | 2024年2月13日
関東財務局長に提出。 |
| (4) | 有価証券報告書の訂正報告書
及び確認書 | 事業年度
(第136期) | (自 2022年4月1日
至 2023年3月31日) | 2023年11月22日
関東財務局長に提出。 |
| (5) | 臨時報告書 | 企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第
9号の2(株主総会における議決権行使の結果)に
基づく臨時報告書 | | 2023年6月29日
関東財務局長に提出。 |
| (6) | 自己株券買付状況報告書 | | | 2024年2月13日
2024年3月13日
2024年4月12日
関東財務局長に提出。 |
| (7) | 訂正発行登録書 | | | 2023年6月29日
2023年11月22日
関東財務局長に提出。 |

第二部 【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2024年6月5日

株式会社滋賀銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

大阪事務所

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 木村 充 男

指定有限責任社員
業務執行社員

公認会計士 河越 弘 昭

< 連結財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社滋賀銀行の2023年4月1日から2024年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社滋賀銀行及び連結子会社の2024年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

貸倒引当金の算定	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、地域金融機関として、地域の持続的発展を支える金融仲介機能を担っており、貸出金を中心とした信用リスクを影響度から最も重要性のあるリスクと認識している。また、地域に根ざした営業を展開するなかで、コンサルティング機能を発揮した営業力強化に特に注力している。このような貸出金に対して、会社は、貸出先の貸倒れによる将来の損失の発生に備えるため、貸出先の財務状況や返済状況、担保の価値、貸出先の経営環境等を評価し、貸倒引当金を計上している。当期末の連結貸借対照表において、貸出金は4兆4,754億円、貸倒引当金は326億円が計上されている。</p> <p>貸倒引当金の算定は、連結財務諸表等の注記事項「(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)5. 会計方針に関する事項 (5) 貸倒引当金の計上基準」及び「(重要な会計上の見積り)」に記載されている通り、社内で定めている格付自己査定基準等に基づき貸出金をリスクに応じて、正常先、要注意先、破綻懸念先、実質破綻先及び破綻先の5つの債務者区分に分類することで実施する。自己査定において、債務者区分は、営業店などの業務運営部門が債務者区分と総合的な信用格付評価をした後に、信用リスク所管部署(審査部)が承認することで決定される。債務者区分の決定においては、貸出先の財務状況、資金繰り、収益力等により、返済の能力を判定して、その状況等を考慮する。また、貸出先の経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合もある。当該自己査定の結果については、業務運営部門及び信用リスク所管部署から独立したリスク管理部署が一定の基準に従って抽出した貸出先について、検証することで正確性が担保されている。</p> <p>債務者区分の決定において、経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合には、貸出先の属する業界の今後の成長性や市場の需給環境、価格動向などの経営環境に関する将来予測や経費削減策、収益向上策などの経営施策に関する実現可能性が債務者区分決定の重要な要素となる。その結果、債務者区分の決定において経営者の主観的な判断への依存度が高まることとなり、経営者による見積りの偏向や判断を誤るリスクが高まると考えられる。</p> <p>特に、当連結会計年度は、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症となったことに伴い経済活動の制約が変化している。また外部環境の変化に伴いコスト構造も変化しており、将来予測を必要とする経営改善計画を貸出先が策定することを、さらに困難にする場合がある。</p> <p>そのため当監査法人は、債務者区分の決定が将来の業績見込みに高度に依存し、かつ債務者区分が悪化した場合に会社の経営成績に重要な影響を与えると認められる貸出先に対する貸倒引当金の算定について、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当該監査上の主要な検討事項に対して当監査法人は、主として、以下の手続を実施した。</p> <p>(1) 内部統制の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 当監査法人が監査上の主要な検討事項の対象とした貸出先について、社内で定めている格付自己査定基準等に基づいて、債務者区分と総合的な信用格付が決定されることを確保するための社内における査閲と承認に係る内部統制の有効性を評価した。 <p>(2) 経営改善計画の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 貸出先の経費削減策や収益向上策などの経営施策の合理性について、経営施策の策定の基礎となった関連資料を査閲して、具体的な数値の裏付けを伴っているかを評価した。 特に資源高や経済活動の制約の変化といった外部環境の変化に対応した経営改善計画を策定している場合、業績が回復するとの仮定の合理性を評価するため、貸出先の事業内容や現況等に関して会社が作成した自己査定関連資料を査閲するとともに、貸出先の財政状態や経営成績の推移分析を実施した。また、貸出先の経営施策の進捗状況を評価するため、貸出先の決算書や直近の試算表を査閲し、計画数値と実績数値を比較した。 <p>上記の手続に加えて、債務者区分が悪化した場合に会社の経営成績に与える影響が相当程度大きいと認められる特定の貸出先に対しては、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 貸出先の属する業界の今後の成長性や市場の需給環境、価格動向などの経営環境に関する将来予測の合理性について、予測の前提となった基礎数値について統計調査や調査機関によるレポートなど客観的事実との整合性を評価した。 経営施策の進捗状況や今後の見込みについて、債務者区分の決定においての承認部署である審査部の責任者に質問するとともに、貸出先との面談記録や貸出先を支援する金融機関との協議記録を査閲して、経営施策の進捗状況について外部環境の変化に対する貸出先への影響を踏まえて評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうか検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 内部統制監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社滋賀銀行の2024年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、株式会社滋賀銀行が2024年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

< 報酬関連情報 >

当監査法人及び当監査法人と同一のネットワークに属する者に対する、会社及び子会社の監査証明業務に基づく報酬

及び非監査業務に基づく報酬の額は、「提出会社の状況」に含まれるコーポレート・ガバナンスの状況等(3)【監査の状況】に記載されている。

利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- () 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2 X B R L データは監査の対象には含まれておりません。

独立監査人の監査報告書

2024年6月5日

株式会社滋賀銀行
取締役会 御中

有限責任監査法人トーマツ

大阪事務所

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 木村 充 男

指定有限責任社員
業務執行社員 公認会計士 河越 弘 昭

<財務諸表監査>

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社滋賀銀行の2023年4月1日から2024年3月31日までの第137期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社滋賀銀行の2024年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

貸倒引当金の算定	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、地域金融機関として、地域の持続的発展を支える金融仲介機能を担っており、貸出金を中心とした信用リスクを影響度から最も重要性のあるリスクと認識している。また、地域に根ざした営業を展開するなかで、コンサルティング機能を発揮した営業力強化に特に注力している。このような貸出金に対して、会社は、貸出先の貸倒れによる将来の損失の発生に備えるため、貸出先の財務状況や返済状況、担保の価値、貸出先の経営環境等を評価し、貸倒引当金を計上している。当期末の貸借対照表において、貸出金は4兆4,951億円、貸倒引当金は311億円が計上されている。</p> <p>貸倒引当金の算定は、財務諸表等の注記事項「(重要な会計方針)5.引当金の計上基準 (1)貸倒引当金」及び「(重要な会計上の見積り)」に記載されている通り、社内で定めている格付自己査定基準等に基づき貸出金をリスクに応じて、正常先、要注意先、破綻懸念先、実質破綻先及び破綻先の5つの債務者区分に分類することで実施する。自己査定において、債務者区分は、営業店などの業務運営部門が債務者区分と整合的な信用格付評価をした後に、信用リスク所管部署(審査部)が承認することで決定される。債務者区分の決定においては、貸出先の財務状況、資金繰り、収益力等により、返済の能力を判定して、その状況等を考慮する。また、貸出先の経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合もある。当該自己査定の結果については、業務運営部門及び信用リスク所管部署から独立したリスク管理部署が一定の基準に従って抽出した貸出先について、検証することで正確性が担保されている。</p> <p>債務者区分の決定において、経営改善計画などの将来の業績見込みに依存する場合には、貸出先の属する業界の今後の成長性や市場の需給環境、価格動向などの経営環境に関する将来予測や経費削減策、収益向上策などの経営施策に関する実現可能性が債務者区分決定の重要な要素となる。その結果、債務者区分の決定において経営者の主観的な判断への依存度が高まることとなり、経営者による見積りの偏向や判断を誤るリスクが高まると考えられる。</p> <p>特に、当事業年度は、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症となったことに伴い経済活動の制約が変化している。また外部環境の変化に伴いコスト構造も変化しており、将来予測を必要とする経営改善計画を貸出先が策定することを、さらに困難にする場合がある。</p> <p>そのため当監査法人は、債務者区分の決定が将来の業績見込みに高度に依存し、かつ債務者区分が悪化した場合に会社の経営成績に重要な影響を与えると認められる貸出先に対する貸倒引当金の算定について、監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当該監査上の主要な検討事項に対して当監査法人は、主として、以下の手続を実施した。</p> <p>(1) 内部統制の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 当監査法人が監査上の主要な検討事項の対象とした貸出先について、社内で定めている格付自己査定基準等に基づいて、債務者区分と整合的な信用格付が決定されることを確保するための社内における査閲と承認に係る内部統制の有効性を評価した。 <p>(2) 経営改善計画の検討</p> <ul style="list-style-type: none"> 貸出先の経費削減策や収益向上策などの経営施策の合理性について、経営施策の策定の基礎となった関連資料を査閲して、具体的な数値の裏付けを伴っているかを評価した。 特に資源高や経済活動の制約の変化といった外部環境の変化に対応した経営改善計画を策定している場合、業績が回復するとの仮定の合理性を評価するため、貸出先の事業内容や現況等に関して会社が作成した自己査定関連資料を査閲するとともに、貸出先の財政状態や経営成績の推移分析を実施した。また、貸出先の経営施策の進捗状況を評価するため、貸出先の決算書や直近の試算表を査閲し、計画数値と実績数値を比較した。 <p>上記の手続に加えて、債務者区分が悪化した場合に会社の経営成績に与える影響が相当程度大きいと認められる特定の貸出先に対しては、以下の手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 貸出先の属する業界の今後の成長性や市場の需給環境、価格動向などの経営環境に関する将来予測の合理性について、予測の前提となった基礎数値について統計調査や調査機関によるレポートなど客観的事実との整合性を評価した。 経営施策の進捗状況や今後の見込みについて、債務者区分の決定においての承認部署である審査部の責任者に質問するとともに、貸出先との面談記録や貸出先を支援する金融機関との協議記録を査閲して、経営施策の進捗状況について外部環境の変化に対する貸出先への影響を踏まえて評価した。

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうかを注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去するための対応策を講じている場合又は阻害要因を許容可能な水準にまで軽減するためのセーフガードを適用している場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

< 報酬関連情報 >

報酬関連情報は、連結財務諸表の監査報告書に記載されている。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

-
- () 1 上記の監査報告書の原本は当社（有価証券報告書提出会社）が別途保管しております。
2 X B R L データは監査の対象には含まれておりません。